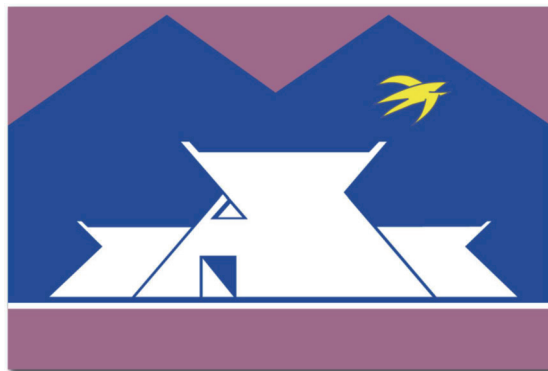


宮崎県埋蔵文化財センター

# 研 究 紀 要

第3集



2015年3月

宮崎県埋蔵文化財センター



## 例 言

1 本書は、宮崎県埋蔵文化財センター職員および県内の埋蔵文化財関連部署に所属する職員の研究活動の一端を紹介し、広く情報発信することで各々の資質向上を図り、ひいては県民文化の向上に寄与することを目的として刊行するものである。

2 掲載されている論文等の内容や見解は執筆者個人に属するものであり、宮崎県教育委員会あるいは宮崎県埋蔵文化財センターの公式見解を示すものではない。

3 本書は Adobe 社製の Adobe InDesign CS6 で編集し、PDF 版で公開するものである。なお、原稿等の作成には Microsoft 社製の Microsoft Word 2010、Microsoft Excel 2010 および Adobe 社製の Adobe Illustrator CS6、Adobe Photoshop CS6 を使用している。





# 目次

## 【研究ノート】

宮崎県でのトレハロース含浸法処理事例（1）	柳田 晴子	1
-----------------------	-------	---

## 【資料紹介】

延岡市駄小屋遺跡出土石鏃の紹介と若干の考察	加藤 徹	7
-----------------------	------	---

## 【みやざき発掘100年物語 講演会記録】

「高速道路網を整備せよ ～東九州自動車道の発掘調査～ 人が動く、モノも動く、古代日向への『道』」	長津宗重	43
「考古学に何ができるか ～これからの遺跡の活用～」	北郷泰道	59



# 宮崎県でのトレハロース含浸法処理事例（1）

柳田 晴子

（宮崎県埋蔵文化財センター）

## はじめに

当センターではトレハロースを用いた木製品の保存処理（以下、トレハロース含浸法とする）を2012年度より行ってきた。PEG含浸槽等の木製品処理設備がない当センターでは木製品処理は自前で行うことが出来ないため、出土木製品はすべて業者委託するか水漬保管かもしくは自然乾燥しか方法がなかった。この状況を改善すべく、遺物を浸漬させた糖液の温度を一定に保つ機材があれば行えるトレハロース含浸法を選択した。この方法ならば当センターに設置している鉄器処理用の送風定温恒温器を使用すれば処理が行えると考えた。

2014年度には町屋敷遺跡・塚原遺跡・鳥の子遺跡（宮崎市）、野首第1遺跡（高鍋町）出土木製品と延岡市教育委員会より依頼のあった木簡3点、漆椀1点など約40点の処理を行った。町屋敷・塚原・鳥の子・野首第1遺跡出土の木製品についてはまだ処理途中のため次年度まとめて報告する予定である。今回は延岡市より依頼のあった4点について報告する。

## トレハロース含浸法とは

トレハロース含浸法に先行する糖アルコール法は、1994年に開発された木製品処理法のひとつである。当初はラクチトールという糖アルコールを使用していたが、ラクチトールの価格高騰の為、主剤をトレハロースにしたのである（伊藤・藤田・今津2010）。

ラクチトールを用いた処理は、経験が必要な工程が多く、処理が不十分だと高温・高湿度環境で溶け出してしまう三水和物が発生したり、濃度を上げすぎるとラクチトールが結晶化しにくい状態となる等、処理未経験者が行うにはハードルが高かった。価格も1000円前後/kgとトレハロースの約2倍である。

トレハロースを主剤とした処理は工程もラクチトールを用いた処理ほど複雑でない。また、トレハロースはラクチトールよりも常温で安定した結晶を作り、そして結晶化したトレハロースは高湿度環境でも吸湿しない等、処理後遺物の安定を考える上でも優れた性質を持っている（伊藤・藤田・今津2010）。

## 資料について

処理を行った資料は、宮崎県延岡市に所在する延岡城跡（24次調査）出土遺物4点である。延岡（縣）城は、慶長8年（1603）に初代延岡藩主高橋元種によって築かれた日向国最大の近世城である。24次調査は平成17年に調査を開始した。絵図によると調査地は内堀があった場所で、資料は延岡城内堀より出土している。資料は漆椀・木簡等で取上後、密閉容器に水漬<sup>(1)</sup>けされ冷蔵庫内で保管されていた。漆椀の含水率は約35%、木簡3点は300～450%程度である（表1参照）。

## 処理手順

漆椀は実測・写真撮影後、トレハロース濃度30～50%水溶液を入れた容器に1点ずつ浸漬

表1 処理遺物一覧表

遺物名	法 量 (cm)	処理前重量(g)	含水率 (%)	処理後重量(g)	備 考
漆椀	(復元) 口径 12.3 × 底形 6.4 × 器高 4.8	27.1	351.7	21.8	1/6 残存、外面に金絵あり
木簡 1	最大長 18.6 × 最大幅 5.5 × 厚さ 0.7	69.1	311.3	64.1	
木簡 2	最大長 18.9 × 最大幅 4.0 × 厚さ 0.6	45.9	446.4	42.8	
木簡 3	最大長 13.8 × 最大幅 2.9 × 厚さ 0.7	23.8	350.9	23.5	亀裂・穴(意図的?)あり

させ、含浸を行った。30～40%の間は常温で含浸を行った。濃度を上げるのは液交換にて行った。50%以降は52℃に設定した送風定温恒温器（ヤマト科学（株）製 DN93）内で45日間含浸し取上げた後、濃度70%水溶液にディッピングし、風乾を行った。

木簡3点は脱色するためにEDTA-2Na（商品名クレワット）1%水溶液に1昼夜浸漬し、その後5日間、日中は水を循環させ資料内に残存したEDTA-2Naを除去した。実測・写真撮影を行い、3点とも同じ容器に入れトレハロース濃度30～70%溶液に浸漬し含浸を行った。濃度30～40%の間は常温で行い、30%から50%に濃度を上げる際は液交換にて行った。50%以降は送風定温恒温器内で容器の蓋を開け、水分を蒸発させ少しずつ濃度を上げた。工程は以下の通りである。なお、トレハロース溶液の濃度は糖度計（アタゴ社製 MASTER-2PT、3PT）により計測した（濃度≒糖度として計測）。

漆椀（含水率 351.67%）

1 含浸

1-1 トレハロース水溶液 30%に浸漬（常温）  
（8/18～9/10 24日間）

1-2 " 40%に浸漬（常温）  
（9/11～11/11 62日間）

1-3 " 50%に浸漬（52℃）  
（11/12～12/15 45日間）

2 取上げ・ディッピング

取上後、70%溶液へディッピング

3 乾燥

扇風機による風乾（12/16～1/30 15日間）

4 表面処理

小型スチームクリーナー使用（2/1）

5 乾燥

再度扇風機による風乾（2/3～3/10 36日間）

木簡（詳細は表1）

1 前処理（脱色）

EDTA-2Na 1%水溶液に一昼夜浸漬する  
（8/12 1日間）

EDTA-2Na 除去（水循環・交換）  
（8/13～17 5日間）

2 含浸

2-1 トレハロース水溶液 30%に浸漬（常温）  
（8/21～9/10 21日間）

2-2 " 40%に浸漬（常温）  
（9/11～11/11 62日間）

2-3 " 50%に浸漬（52℃）  
（11/12～12/15 45日間）

2-4 " 60%に浸漬（60℃）  
（12/16～1/5 21日間）

2-5 " 70%に浸漬（70℃）  
（1/6～1/21の間 最大16日間）

3 乾燥

扇風機による風乾（1/19～1/30 12日間）

4 表面処理

小型スチームクリーナー使用（2/1、2）

## 5 乾燥

再度扇風機による風乾(2/3～3/10 36日間)

## 考察

## 1) 漆椀

休日および業務の都合を除く日以外は資料の重量計測を行った。そのデータを元に処理前重量を100%とした重量変化グラフ（図1）を作成し、処理の進捗を考える上で参考とした。漆椀は、塗膜に覆われた部分からはトレハロースは浸透していかず、木胎の露出した断面といった狭く限られた場所からしか吸収されないため低濃度含浸期間（30～40%）を長めにを行った。

取上げ後はトレハロース水溶液濃度70%のディッピング（10秒程度浸ける）によりトレハ結晶が椀表面に大量に固着し、重量が一気に上がったが、文化財用の小型スチームクリーナー（商品名：スチーマーPR1）を用いて表面処理を行い、結晶を除去した後は重量も一気に下がった。収縮は処理前の実測図を基に確認したが見られず、全体的に自然な仕上がりとなった。

## 2) 木筒

トレハロース水溶液の濃度を上げるタイミングは重量が増加した後、恒量になったあたりで濃度を上げるようにしている。図1のグラフからトレハロース水溶液40%含浸日数は半分の期間ですでに恒量に達しており、その時点で濃度を上げることも可能であったと読み取れる。しかし資料の重要性から低濃度含浸をじっくり行おうべきと考え、50%以降は加熱が必要であり数点の遺物だけで機械を稼働するより効率よく行いたく、他の処理遺物の進捗に合わせた。そのため含浸期間が長くなってしまった。その後も他の遺物との兼ね合いもあり、比較的ゆっくりと含浸を

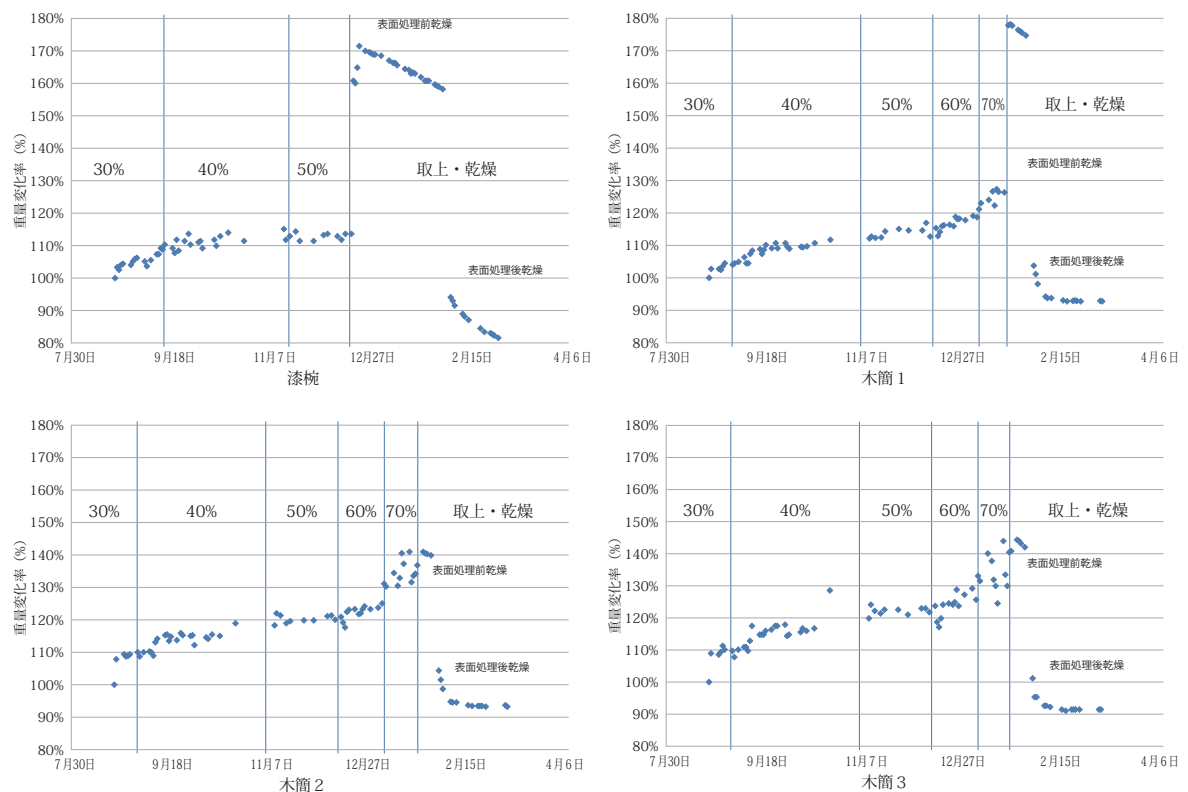


図1 漆椀・木筒重量変化グラフ（処理前重量を100%とする）

進めた。

ちなみに木簡1は、取上げ時に資料表面に大量の結晶が固着してしまったため、急激な重量の増加が見られる。また、木簡2と3が取上げ後に重量が増加しているのは、乾燥処理中の遺物表面に高濃度(60～70%)のトレハロース水溶液を筆で塗布(部分的な高濃度トレハロース含浸)したためである。3点とも漆椀と同様、小型スチームクリーナーで表面処理を行った。表面処理後は色調も明るく文字が明確になった。

処理による収縮は、3点ともほとんど見られなかった。

### おわりに～今後の課題～

今回報告した4点の資料は他の処理資料と進捗を合わせて行ったため、重量変化から得られるデータが処理進行に反映されにくかった。現在処理を進めている資料はこの反省を活かし極力、資料から得られるデータを元に処理を進めている。

漆椀や木簡などこれまで専門家へ委託することでしか処理できなかった資料について、自前処理が可能となったことに大きな意義を感じている。ただ当センターは漆椀や脆弱遺物の表面処理を行うのに適した文化財修復用の小型スチームクリーナーを所有していないため、九州歴史資料館の設備を使用させていただいた。トレハロース含浸法による処理は今後も続けていく予定だが、技術の向上および処理設備の更なる充実も検討していきたい。

今年度、処理を進めていくうえで多くの方々にお世話になりました。

今後ともご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願ひいたします。(敬称略)

今津節生 伊藤幸司 藤田浩明 東郷加奈子 加藤和歳 小林 啓 金 旻貞 小森義尚  
水吉優子 山田 聡 尾方農一 近藤 協 赤崎広志 関 雅文

### 註

(1) 含水率とは木材実質量に対して木材が含有する水分量の割合のことをいう。今回の数値は「トレハロース含浸処理記録用紙」(東郷2013)による計算式により算出した。

### 引用・参考文献

- 伊藤幸司・藤田浩明・今津節生 2010「糖アルコール含浸法からの新たな展開—トレハロースを主剤とする出土木材保存法へ—」『日本文化財科学会第27回大会発表要旨集』。
- 伊藤幸司・藤田浩明・今津節生 2013「ラクチツールからトレハロースへ—糖類含浸法の新展開—」『考古学と自然科学』第65号。
- 伊藤幸司・藤田浩明・金原正子・今津節生 2011「トレハロース含浸処理法の実用化—漆製品への有効性について—」『日本文化財科学会第28回大会発表要旨集』。
- 東郷加奈子 2013「トレハロース含浸処理記録用紙」『第4回トレハロース含浸処理法研究会資料』。
- 東郷加奈子 2012「トレハロース含浸処理法<主な作業の流れ 2012年9月版>」木器保存処理勉強会資料。
- 永濱功治・内山伸明・中村幸一郎 2012「トレハロースを用いた木製品の保存処理(Ⅰ)」『鹿児島県埋蔵文化財センター研究紀要・年報 縄文の森から』第5号。



漆椀（処理前）



漆椀（処理後）



木簡 1（処理前）



木簡 1（処理後）



木簡 2（処理前）



木簡 2（処理後）



木簡 3（処理前）



木簡 3（処理後）

（写真の漆椀および木簡 1～3 はいずれも延岡市教育委員会所蔵資料）





# 延岡市駄小屋遺跡出土石鏃の紹介と若干の考察

加藤 徹

(宮崎県埋蔵文化財センター)

## はじめに

駄小屋遺跡は、延岡市北方町蔵田に所在し、標高 99 ～ 115 m の狭い丘陵尾根～斜面上に形成された遺跡である。遺跡は縄文時代早期前葉～中葉の押型文土器が中心で、2 軒の竪穴建物跡と 1 軒の平地式建物跡、76 基に及ぶ集石遺構、18 基の炉跡や 47 基の土坑とともに、702 点（破片・未成品等を含む）に達する石鏃が出土している。報告書ではそのうちの 242 点が図化され掲載されている。今後の研究に資することを鑑みれば、筆者の能力では実測図を掲載することは難しいが、写真で紹介することによってその内容の把握を可能とするとともに、利用可能な状況としておきたい。なお、旧石器時代の遺物も出土しているが、縄文時代では早期以外の時期の遺物は出土していないため、石鏃も当該時期のものと考えられる。

報告書は平成 26 年 8 月に刊行されている（宮崎県埋蔵文化財センター 2014）。

## 1 民族誌からみた石鏃研究の視点と作業仮説

資料紹介を行うに先立って、本稿で若干の分析を行うことと、また観察表の内容にも影響するため、ここで少し研究の視点と作業仮説について触れておく。

縄文時代のような狩猟採集社会は、一般的に平等に配分がなされる平等主義社会のイメージがあるが、民族誌をみるとそれは必ずしも当てはまっていないことがわかる。たとえば、狩猟によって得た獲物は、最初から平等に分けられるのではなく、射止めた人間や、その道具の所有者に最初に分ける権利が与えられ、その後、狩りの参加者、さらにその後家族へ、といったように順次分けられる（市川 1991、北村 1996）。しかし、最初に多くの部位を得ても、互酬的関係をもつ人々へ次々と分配していくことによって、結果的には社会の中に平等に行き渡ることになるため、見かけ上は平等主義的な社会となる。このように配分を行う際、興味深いことに、獲物を射止めた者（＝矢の使用）だけでなく、その矢の製作者にも最初の配分の権利が存在する場合がある。このことは、矢の製作者は、その形態等において明示的に表されていることを示している。矢を構成する部材は様々あるが、鏃もそれが表現される素材の一つといえる。したがって、ここでは鏃も個を識別する意味を付与されていた可能性があることを念頭に検討を行うこととする。ところで、以上のように仮定すると、弥生時代の磨製石鏃の形態は縄文時代とは対照的に類似した形態のものが多いように思われる。弥生時代に入って、社会の変化に伴い、石鏃や狩猟行為のもつ意味が変化したのかもしれない。

では、具体的に鏃の形態差にはどのような意味があるのだろうか。ここでは Weissner によるアフリカのカラハリ砂漠に居住するサン族（“San”）の一例をみってみる。カラハリ砂漠のサン族が所有する矢には「紋章様式」(Emblemic Style) と「個人様式」(Assertive Style)<sup>(1)</sup> がある。紋章様式とは「物質文化における形式的差異 (formal variation) であり、はっきりとした指示対象をもち、意識的な協力やアイデンティティーの対象となる集団に向けての明確なメッセージを伝達するものであり、それは紋章や旗のようなもの」である。一方、個人様式は「物質文化における

形式的な差異であり、それは個人を基礎として、個人のアイデンティティーの土台となる情報を伝達する」ものである (Weissner1983:pp257~258)。このように、サン族では、矢が集団と個人のアイデンティティーという二つの意味を持っていることが指摘されている。

さて、既に述べたように、矢の使用者と製作者は異なる場合のあることが民族例などで明らかにされているが、実際には矢の所有形態はどうなっているのだろうか。これについても、先に挙げたサン族の研究の中で例示されている (Weissner1983:pp260~261)。サン族の中のグループである“/Xai/Xai”では、自分の製作した矢だけしかもたないのは16人中4人で、ほかの12人は、相手の人数によっていくつかのグループに分かれるものの、別の人間が製作した矢も所有している。“!Kung”では、自分で製作したものが57%、1~20km圏内の相手と交換したものが26%、20~60km圏内の相手から受け取ったものが3%、60~100km圏内の相手からもらったものが13%、100~200km圏内の相手からもたらされたものが1%だという。以上のような民族例から仮定すれば、同一遺跡内において、異なる複数の形態が存在するのはいわば当然であり、仮に複数の集団によって狩りを行う場合は、その集団内においてもそれぞれ複数の型式が出てくることとなる。また、他人が製作した矢を使用する可能性があることは、一定の鑿の単位の中には異なる型式の鑿が混じっている場合でも、それが混入ではなく実際の所有・保管状況に近い可能性もある。さらに、矢そのものが製作されて交換されている事も見逃してはならない。すなわち、遠く離れた地に住む人間が作った矢も一定数含まれている可能性がある。

しかし、以上のことは逆に、交換関係のない程遠く離れた集団間では矢の形態を区別する必要性はないことも示唆している<sup>(2)</sup>。たとえば、先に述べたサン族の例では、100~200km圏内の例もあるが、割合的にはかなり少ない。それ以上離れた、社会的関係を持たない場合には、形態がもつ意味は小さくなるか、あるいは理解されないことが考えられる。ただし、そのような形態の認識圏は、社会的関係をもつ隣接した各集団によって縁辺で重なりながら展開していると予想される。したがって、広域的な視点で形態分類を行う際に、ある遺跡を中心とする一定の範囲内での形態差には意味が表れやすいが、極端に離れた遺跡間での形態差が持つ意味はそれほど大きくない可能性があることを考慮しなければならない。その範囲が地理的単位によるものなのか、あるいはそれ以外の要因が存在するのか、といった実際の状況については、今後検討する必要があることは言うまでもない。

ところで、以下で紹介する駄小屋遺跡出土石鑿の石材は、その大部分がチャート製であり、報告書によれば702点中625点(89%)に達する。図1~6の写真のように、チャートでも色調が異なるものが存在する。石材の色調が意識されていた可能性もあるが、素材であるチャートの原石自体は複数の色が混じっている場合もあるため、それがどの程度有効かは明らかでない。しかし、縄文時代のチャート製石鑿において、元の石材のように色が混じったものはこれまであまり見たことがないような気がするため、色調も意識している可能性を考慮して、蛮勇をふるって検討を行ってみる。今回、色調については、『新版 標準土色帖』(2008年版)(農林水産省農林水産技術会議事務局監修)を使用した。ところで、言語学における色彩語彙の進化過程(Kay and Maffi 1999)や、現代においても日常的表現として、信号機や海の表現にみるように緑と青の区別があいまいな色彩感覚からは、少なくとも白、黒、赤(黄)、緑・青程度の大区別はあってもよいと思われる。ただし、明度(Value)10の白に近いものはないため白は設定しないが、明度3以下の黒に近いものは存在するため黒は分類の項目に加えたい。なお、赤と黄色の区別は明らかでないが、経験的に太陽を赤や黄色で表現することがあるため、緑と青ほどではないが、



図1 駄小屋遺跡出土石鏃等写真1 (S=約1/2)





図2 駄小屋遺跡出土石鏃等写真2 (S=約 1/2)



図3 駄小屋遺跡出土石鏃等写真3 (S=約 1/2)





図4 駄小屋遺跡出土石鏃等写真4 (S=約1/2)



図5 駄小屋遺跡出土石鏃等写真5 (S=約1/2)



赤と黄色の分化は弱い可能性もある。

## 2 駄小屋遺跡出土の石鏃について

ここでは、駄小屋遺跡から出土した既報告分 242 点（掲載番号 9～11、21～25、27、43～44、46、50、56、59、344～570）を除いた、折損品を中心とする資料 466 点（図 1～図 6、登録番号<sup>(4)</sup> 657～1122）について掲載した。既報告および未報告を合わせた資料数は 708 点となる。この内、951 は石錐状の形態、1032 は二次加工のある剥片（R.F.）と考えられるが、登録番号的に連続しているため合わせて掲載している。したがって、この 2 点を除いた資料は 706 点となる。以下では、主に観察表で用いた分類等について、簡単に説明を行うこととする。

石鏃の状態については、次のように成品、折損品、未製品、未成品、折損修正品、欠損品の 6 種類に分類を行った。

成品：折損・欠損が見られないあるいはあっても極わずかなもの。わずかに折れがあるものは括弧付きで表記している。

折損品：折れによる剥離が古く、使用により一部が折れたと考えられるもの。観察表では「折」と表現。先端部の小破片も折損品として<sup>(5)</sup>いる。

未成品：製作途中のもので、失敗と思われる大きな折れが認められないもの。観察表では「未」と表現。主に、表裏を比較した際に、周縁の加工が一部（1 側辺など）及んでいないものなどが該当する。

失敗品：製作途中で折れたと考えられるもの。観察表では「失」と表現。

折損修正品：製作途中あるいは使用により折れた箇所について、後から再加工を行って整形をしているもの。観察表では「折修」と表現し、先端部を再加工したものは「R」、基部等を再加工したものは「r」で区別している。

欠損品：折れた面の風化が弱く、調査段階で欠失したと考えられるもの。観察表では「欠」と表現。

折損品と失敗品については調整の状態から判断しているが、ほぼ完成に近い場合は失敗品でも折損品としている可能性がある。また、「折れ」について風化等の状況から判断しているが、チャート製は判断が難しいものもあるため、欠損を折損と誤認している可能性はある。

形態については、報告書の分類を元にする予定であったが、今回の試みのように製作者を識別

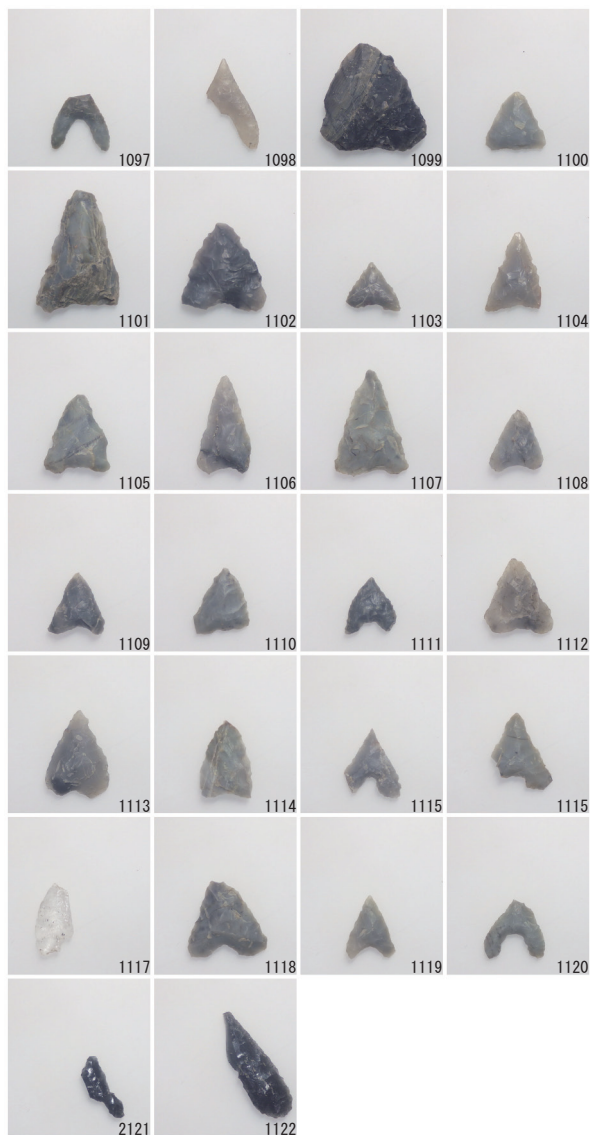


図6 駄小屋遺跡出土石鏃等写真6 (S=約 1/2)



するような分類としては、1つの分類がカバーする範囲が大きすぎる問題点がある。その一方で、このような全体的な形状による分類は、既述の作業仮説をより想像力たくましく働かせると、部族あるいはクランやリネージといった社会的関係をもったより広い単位集団のまとまりを表象している可能性も考えられる。したがって、分類としては、基本的な形状による分類と、さらに各部位の形状による細分を行う必要がある。大分類となる鏃の基本形状は、全体の長さ・幅・厚さと抉りの幅と深さによって数値的に表現が可能である。そして、さらに個別的特徴として、図7のように各部位の形状ごとに細分を行うことを試みた。しかし、実際の観察では、該当しないものも多く、再設定が必要であったが、筆者の怠慢により十分な時間がとれなかったため、ここでは参考として示しておく。<sup>(6)</sup>

側辺形状

- 1類：側辺の途中で外向きに屈曲するもの。どの位置で屈曲するかは項目に含んでいない。一部、2類と区別が難しいものもある。
- 2類：外側に湾曲するもの。
- 3類：直線的なもの。わずかに内・外に湾曲するものを含む。
- 4類：内側に湾曲するもの。

なお、側辺形状については、分類を変更する必要があったが、そこまで至らなかった。加えて脚部付近で屈折するものなどについて、観察段階で形状表現を脚部形状にすべきか迷った部分があり、そのようなものには「r」を付加して表現している。

さらに、側辺形状の下位分類として、いくつかの分類を追加する。676や694のように剥離間隔が非常に細かいものを「f」(fine)、抉りを「n」(notch)、鋸歯状を呈するものを「s」(saw)と、それぞれアルファベットを付加して表現している。このほか、すでに述べたところであるが、折損した後に再加工を行っているものが少数ながらみられた。先端部については刺突能力に影響すると考えられるので、先端付近の折損修正品については「R」(retouch)、その他基部などの縁辺を修正しているものは「r」を付けて区別している。<sup>(7)</sup>

脚端形状

- 1類：端辺が軸におよそ直交しているもの。
- 2類：端辺の外側が上方へ傾斜しているもの。
- 3類：端辺の内側が上方へ傾斜しているもの。
- 4類：明瞭な端辺をもたず、角状を呈するもの。
- 5類：脚自体の作りが不明瞭、あるいは脚を作り出さないもの。

この脚端形状については、方形に近いものをa類、丸みをおびるものをb類として細分を行う。

基部形状

- 1類：抉りが「U」字の直線部分が長いもの。抉りが深いものに多い。
- 2類：抉りが「U」字の途中で屈曲して外に開くもの。一部、脚端形状3類と区別が難しい

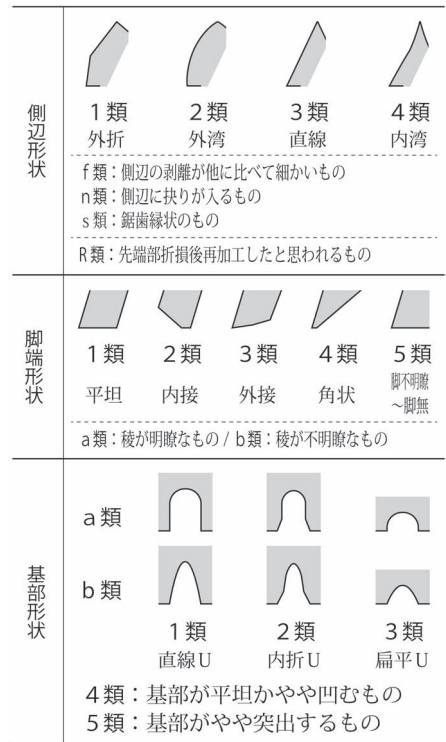


図7 石鏃部位別形態概念図

ものがある。

3類：挟りが扁平な「U」字を呈するもの。挟りが浅いものに多い。

4類：挟りが不明瞭もしくは基部が直線的になるもの。

5類：基部が緩い円弧状に外側に膨らむもの。

さらに、1～3類については、挟り最奥の幅が広く上記分類のように「U」字状になるものa類、最奥の幅が狭く緩い「V」字状になるものをb類としている。今回の形態分類については、この基部形態を採用している。

本稿では、さらに試論的な検討として、大きさや先端角度などの数値や、図7に表れない調整の情報を加えて区分を行いたかったが、紙幅および時間の都合上そこまではできなかった。今後の課題としておきたい。以上の分類はいくらか主観的な部分もあるが、組み合わせによって雰囲気異なるものでも、類似する形態は表現できると考えている。このほか、参考として、観察表には報告書と同じ視点による分類も掲載している。

次に、石材については、既報告分については報告書を元にし、未報告分について肉眼観察により分類を行った<sup>(8)</sup>。結果、石材はチャート(ch)、黒曜石(ob)、頁岩(sh)、安山岩(an)、流紋岩(ry)、千枚岩(pl)、水晶(qt)、緑色岩(gr)という区分となった。この中で、緑色岩(gr)は1点のみであることと、色調的な類似性からチャートの中に入れて検討は行っている。また、全体の9割を占めるチャートについては、色調により細かく分類した後、以下のように系統別に統合を行っている。

チャート<sup>(9)</sup>

YR系統：色相 2.5YR～10YR で、非常に赤みが強い色調を呈するもの。

2.5Y系統：色相 2.5Y で、Y系よりも赤みが強い色調のもの。

5Y・7.5 Y系統：色相 5Y・7.5Y で、やや黄色みがかかった色調を呈するもの。

10Y系統：色相 10Y で、Y系とGY系の中間的色調のもの。GY系に近い色調が多い。

GY系統：色相 2.5GY、5GY で、淡い緑色を呈するもの。

N系統：色相 N (彩度 0) で、灰色を呈するもの。

K系統：明度 2 以下の黒色に近い色を呈するもの。色相 N については、明度 3 のものもこの分類に含む。

### 3 駄小屋遺跡の石鏃に関する若干の検討

駄小屋遺跡では、700点以上の石鏃が出土しているが、旧石器時代を除くと、縄文時代早期以外の時期の土器は出土していないことから、ほとんどの石鏃も当該時期のものであると考えられる。報告書中では、石器の組成比率から狩猟具が卓越していることが指摘されている。他の報告書でも、同様に石器の出土比率を器種ごとの点数比率で示されることが多い。しかし、石鏃をはじめとする狩猟具は消耗品に近い道具であり、1回の使用により紛失したりや破損する割合は磨石等の植物質食料加工具に比べると高いことが予想される。また、同時に複数本所有していることを考慮すれば、なおさらである。「祭祀具」では、使用方法にもよるであろうが、その使用・破損率はさらに低くなるように思われる<sup>(10)</sup>。そのため、狩猟具と植物質食料加工の数量比較の有効性については判断が難しい点は注意しておきたい。私見としては、民族例などを参照した破損率や所有数などの状況から、狩猟具の数になんらかの係数を乗算した数値を算出する方法が比較する場合の妥当な方法であると思われる。ただし、筆者にはその能力がないのでここで示すことが

表 1 色調・石材別にみた石鏃の基部形態比較

色調系統・石材	点数 (%)	1a	1b	2a	2b	3a	3b	4・5	不明
YR n=10	2.5YR	3 (0.42)	0 (0)	1.5 (50.00)	1.0 (33.33)	0.5 (16.67)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
	7.5YR	2 (0.28)	2.0 (100)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
	10YR	3 (0.42)	2.0 (66.67)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1.0 (33.33)	0 (0)
	// (+)	2 (0.28)	1.5 (75.00)	0 (0)	0.5 (25.00)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
2.5Y n=26	2.5Y5-7/	17 (2.41)	4.0 (23.53)	2.5 (14.71)	3.0 (17.65)	2.5 (14.71)	2.0 (11.76)	2.0 (11.76)	1.0 (5.88)
	// (+)	4 (0.57)	1.0 (25.00)	0 (0)	1.0 (25.00)	0 (0)	1.0 (25.00)	1.0 (25.00)	0 (0)
	2.5Y8/	4 (0.57)	1.0 (25.00)	0 (0)	0 (0)	1.0 (25.00)	0 (0)	1.0 (25.00)	1.0 (25.00)
	他 2.5Y	1 (0.14)	0 (0)	1.0 (100)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
5Y・ 7.5Y n=259	5Y3/	5 (0.71)	2.0 (40.00)	0 (0)	0 (0)	1.0 (20.00)	0 (0)	0 (0)	1.0 (20.00)
	5Y5-4/1	27 (3.82)	11.5 (42.59)	4.0 (14.81)	0.5 (1.85)	0 (0)	2.0 (7.41)	4.0 (14.81)	5.0 (18.52)
	// (+)	7 (0.99)	2.0 (28.57)	1.0 (14.29)	0 (0)	0 (0)	1.0 (14.29)	2.0 (28.57)	1.0 (14.29)
	5Y5-7/2	25 (3.54)	5.5 (22.00)	4.0 (16.00)	6.5 (26.00)	1.0 (4.00)	0 (0)	5.0 (20.00)	1.0 (4.00)
	// (+)	11 (1.56)	2.0 (18.18)	4.0 (36.36)	2.0 (18.18)	0 (0)	2.0 (18.18)	0 (0)	0 (0)
	5Y6-7/1	100 (14.16)	18.0 (18)	19.0 (19.00)	16.0 (16.00)	5.0 (5.00)	12.0 (12.00)	14.0 (14.00)	6.0 (6.00)
	// (+)	53 (7.51)	12.5 (23.58)	9.5 (17.92)	5.0 (9.43)	2.5 (4.72)	4.0 (7.55)	9.5 (17.92)	3.0 (5.66)
	5Y8/1	5 (0.71)	3.0 (60)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1.0 (20.00)
	// (+)	2 (0.28)	0 (0)	2.0 (100)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
	7.5Y4-6/	13 (1.84)	3.0 (23.08)	1.0 (7.69)	1.0 (7.69)	1.0 (7.69)	1.0 (7.69)	2.0 (15.38)	1.0 (7.69)
// (+)	7 (0.99)	1.0 (14.29)	1.0 (14.29)	1.5 (21.43)	1.0 (14.29)	1.0 (14.29)	1.5 (21.43)	0 (0)	
他 5Y・7.5Y	4 (0.57)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1.0 (25.00)	1.0 (25.00)	1.0 (25.00)	
10Y n=82	10Y5/1	17 (2.41)	6.0 (35.29)	2.0 (11.76)	1.0 (5.88)	0.5 (2.94)	3.0 (17.65)	1.5 (8.82)	2.0 (11.76)
	// (+)	4 (0.57)	2.0 (50.00)	0 (0)	1.0 (25.00)	1.0 (25.00)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
	10Y6-7/1	37 (5.24)	7.5 (20.27)	4.0 (10.81)	5.5 (14.86)	2.0 (5.41)	2.0 (5.41)	7.0 (18.92)	4.0 (10.81)
	// (+)	17 (2.41)	4.0 (23.53)	1.0 (5.88)	2.0 (11.76)	0 (0)	0 (0)	5.0 (29.41)	3.0 (17.65)
	他 10Y	7 (0.99)	2.0 (28.57)	1.0 (14.29)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1.0 (14.29)
GY n=112	2.5GY5-4/1	35 (4.96)	12.0 (34.29)	6.0 (17.14)	3.0 (8.57)	2.0 (5.71)	0 (0)	5.0 (14.29)	3.0 (8.57)
	// (+)	2 (0.28)	0 (0)	0 (0)	2.0 (100)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
	2.5GY6/1	36 (5.10)	9.0 (25)	7.0 (19.44)	4.5 (12.50)	0 (0)	4.0 (11.11)	3.5 (9.72)	2.0 (5.56)
	// (+)	11 (1.56)	2.0 (18.18)	1.0 (9.09)	3.0 (27.27)	0 (0)	3.0 (27.27)	2.0 (18.18)	0 (0)
	5GY6/1	16 (2.27)	3.5 (21.88)	2.0 (12.50)	0.5 (3.13)	0 (0)	3.5 (21.88)	1.5 (9.38)	3.0 (18.75)
	// (+)	2 (0.28)	0 (0)	0 (0)	1.0 (50.00)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1.0 (50.00)
他 GY	10 (1.42)	1.0 (10.00)	2.0 (20.00)	3.0 (30.00)	0 (0)	0 (0)	1.0 (10.00)	2.0 (20.00)	
BG	1 (0.14)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1.0 (100)	
N n=113	N4-6/	86 (12.18)	18.0 (20.93)	8.0 (9.30)	8.0 (9.30)	0 (0)	8.0 (9.30)	14.0 (16.28)	15.0 (17.44)
	// (+)	27 (3.82)	3.5 (12.96)	4.0 (14.81)	3.5 (12.96)	0.5 (1.85)	2.0 (7.41)	7.5 (27.78)	5.0 (18.52)
K n=36	Value 2	20 (2.83)	4.0 (20.00)	4.0 (20.00)	3.0 (15.00)	1.5 (7.50)	0 (0)	2.5 (12.50)	2.0 (10.00)
	// (+)	16 (2.27)	5.5 (34.38)	0 (0)	2.5 (15.63)	1.0 (6.25)	2.0 (12.50)	3.0 (18.75)	1.0 (6.25)
黒曜石 (ob)	35 (4.96)	9.5 (27.14)	4.0 (11.43)	6.5 (18.57)	2.0 (5.71)	2.0 (5.71)	0 (0)	2.0 (5.71)	
安山岩 (an)	20 (2.83)	5.5 (27.50)	3.5 (17.50)	3.5 (17.50)	2.0 (10.00)	0.5 (2.50)	3.0 (15.00)	2.0 (10.00)	
その他 流紋岩 (ry)	5 (0.71)	2.0 (40.00)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2.0 (40.00)	
石材 他石材	2 (0.28)	0.5 (25.00)	0 (0)	1.5 (75.00)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	
水晶	5 (0.71)	1.0 (20.00)	0 (0)	0 (0)	1.0 (20.00)	1.0 (20.00)	0 (0)	0 (0)	
合計	706 (100)	170.5 (24.15)	100.0 (14.16)	93.0 (13.17)	29 (4.11)	58.0 (8.22)	100.5 (14.24)	73.0 (10.34)	82 (11.61)

できない。

石鏃として今回取り上げた資料 706 点について、最初に全体の様相をみよ（表 1・2、図 8）。これらの中では、チャート製が 637 点（約 90.23%<sup>(11)</sup>）と圧倒的な割合を占めており、チャート製の石鏃が在地品であるといえる。一方、チャート以外でも、黒曜石や安山岩はそれぞれ 35 点（4.96%）、20 点（2.83%）と一定数が出土しているが、それ以外は流紋岩・水晶がそれぞれ 5 点、千枚岩と頁岩および緑色岩が各 1 点ずつとなっている。なお、繰り返しになるが、緑色岩については、色調的な観点からチャートに含んで検討をおこなっている。これらの黒曜石と安山岩を除いた石材の割合は、合わせても 13 点で 1.84%にとどまる。黒曜石や安山岩については、作業仮説からみれば、成品の矢として他の集団からもたらされた可能性もあるが、チャート製の石

表2 色調・石材別にみた石鏝の状態比較

色調系統・石材		点数 (%)	成品	折損品	未成品	失敗品	折損修正品	欠損品
YR n=10	2.5-5YR	3 (0.42)	2 (66.67)	1 (33.33)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
	7.5YR	2 (0.28)	1 (50.00)	1 (50.00)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
	10YR	3 (0.42)	1 (33.33)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (33.33)	1 (33.33)
	〃 (+)	2 (0.28)	1 (50.00)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (50)
2.5Y n=26	2.5Y5-7/	17 (2.41)	6 (35.29)	9 (52.94)	0 (0)	1 (5.88)	0 (0)	1 (5.88)
	〃 (+)	4 (0.57)	0 (0)	2 (50.00)	1 (25.00)	1 (25.00)	0 (0)	0 (0)
	2.5Y8/	4 (0.57)	0 (0)	2 (50.00)	0 (0)	0 (0)	2 (50.00)	0 (0)
	他 2.5Y	1 (0.14)	1 (100)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
5Y・ 7.5Y n=259	5Y3/	5 (0.71)	0 (0)	5 (100)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
	5Y5-4/1	27 (3.82)	1 (3.70)	21 (77.78)	1 (3.70)	2 (7.41)	1 (3.70)	1 (3.70)
	〃 (+)	7 (0.99)	1 (14.29)	5 (71.43)	1 (14.29)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
	5Y5-7/2	25 (3.54)	1 (4)	15 (60.00)	1 (4)	3 (12)	2 (8)	3 (12.00)
	〃 (+)	11 (1.56)	2 (18.18)	6 (54.55)	0 (0)	1 (9.09)	2 (18.18)	0 (0)
	5Y6-7/1	100 (14.16)	12 (12.00)	67 (67.00)	0 (0)	9 (9.00)	2 (2.00)	10 (10)
	〃 (+)	53 (7.51)	9 (16.98)	35 (66.04)	1 (1.89)	4 (7.55)	2 (3.77)	2 (3.77)
	5Y8/1	5 (0.71)	0 (0)	5 (100)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
	〃 (+)	2 (0.28)	0 (0)	2 (100)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
	7.5Y4-6/	13 (1.84)	4 (30.77)	6 (46.15)	1 (7.69)	0 (0)	1 (7.69)	1 (7.69)
〃 (+)	7 (0.99)	1 (14.29)	5 (71.43)	0 (0)	0 (0)	1 (14.29)	0 (0)	
他 5Y・7.5Y	4 (0.57)	0 (0)	2 (50.00)	0 (0)	1 (25.00)	0 (0)	1 (25.00)	
10Y n=82	10Y5/1	17 (2.41)	3 (17.65)	11 (64.71)	0 (0)	3 (17.65)	0 (0)	0 (0)
	〃 (+)	4 (0.57)	1 (25.00)	1 (25.00)	0 (0)	1 (25.00)	1 (25.00)	0 (0)
	10Y6-7/1	37 (5.24)	6 (16.22)	24 (64.86)	0 (0)	2 (5.41)	2 (5.41)	3 (8.11)
	〃 (+)	17 (2.41)	5 (29.41)	8 (47.06)	2 (11.76)	2 (11.76)	0 (0)	0 (0)
	他 10Y	7 (0.99)	0 (0)	6 (85.71)	1 (14.29)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
GY n=112	2.5GY5-4/1	35 (4.96)	4 (11.43)	20 (57.14)	1 (2.86)	5 (14.29)	0 (0)	5 (14.29)
	〃 (+)	2 (0.28)	1 (50.00)	1 (50.00)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
	2.5GY6/1	36 (5.10)	6 (16.67)	25 (69.44)	1 (2.78)	1 (2.78)	1 (2.78)	2 (5.56)
	〃 (+)	11 (1.56)	5 (45.45)	5 (45.45)	1 (9.09)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
	5GY6/1	16 (2.27)	1 (6.25)	6 (37.50)	4 (25.00)	4 (25.00)	1 (6.25)	0 (0)
	〃 (+)	2 (0.28)	0 (0)	0 (0)	1 (50.00)	0 (0)	1 (50.00)	0 (0)
他 GY	10 (1.42)	2 (20.00)	5 (50.00)	0 (0)	3 (30.00)	0 (0)	0 (0)	
BG	1 (0.14)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (100)	
N n=113	N4-6/	86 (12.18)	6 (6.98)	52 (60.47)	9 (10.47)	9 (10.47)	4 (4.65)	6 (6.98)
	〃 (+)	27 (3.82)	9 (33.33)	15 (55.56)	1 (3.70)	1 (3.70)	0 (0)	1 (3.70)
K n=36	Value 2	20 (2.83)	2 (10.00)	13 (65.00)	1 (5)	3 (15.00)	0 (0)	1 (5.00)
	〃 (+)	16 (2.27)	3 (18.75)	9 (56.25)	1 (6.25)	0 (0)	1 (6.25)	2 (12.5)
黒曜石 (ob)	35 (4.96)	7 (20.00)	22 (62.86)	1 (2.86)	3 (8.57)	1 (2.86)	1 (2.86)	
安山岩 (an)	20 (2.83)	3 (15.00)	12 (60.00)	1 (5.00)	1 (5)	0 (0)	3 (15.00)	
その他 流紋岩 (ry)	5 (0.71)	0 (0)	4 (80.00)	1 (20.00)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	
石材 他石材	2 (0.28)	1 (50.00)	1 (50.00)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	
水晶	5 (0.71)	0 (0)	3 (60.00)	0 (0)	1 (20.00)	0 (0)	1 (20)	
合計	706 (100)	108 (15.30)	432 (61.18)	32 (4.53)	61 (8.64)	26 (3.68)	47 (6.66)	

鏝と同様に、未成品や失敗品と考えられるものを含むことや、複数の形態が存在することから、石材を入手して在地の人間が製作したと考えた方がよいようである。他の石材については、数が少なく、また折損品が多いため、判断が困難である。一方、チャートについて色調で細かく見てみると、その数にはバラツキがみられる。表1・2や、図8にみるように、やや黄色が入る「5Y・7.5Y系統」の色調が突出して多く、中でも5Y6/1～5Y7/1は100点と非常に多い。その次に灰色がかかった「N系統」、「GY系統」、「10Y系統」と続く。その後、黒色の「K系統」をはさんで、最も少なくなるのが赤みの強い「YR系統」・「2.5Y系統」である。この状況から、数の順にみると、やや黄色みがかかった白→緑色→黒・赤といった順で数量が減少しており、色調が濃いものになるほど数が少なくなっているとみることができる。

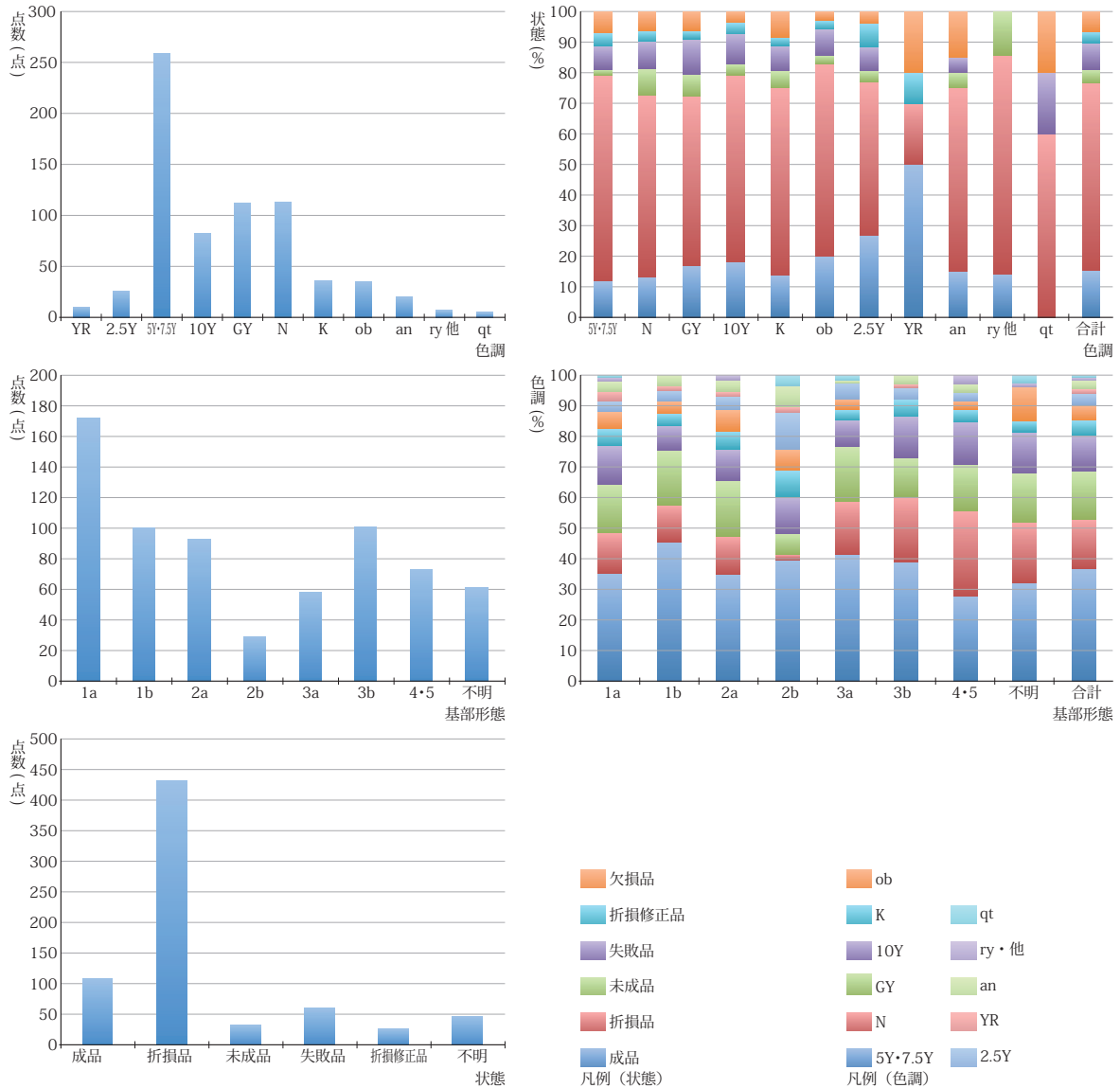


図8 駄小屋遺跡出土石鏃の様相

次に基部の形態別にみると、1a類が最も多くなっており、早期の特徴といえる鋏形鏃が多いことを示している。そのほかでは、2b類の数が著しく低いほかは、それほど大きな数の差はないといえる。抉りが発達せずに、明確な脚を持たない4・5類も一定数出土している点は興味深い。一方、石鏃の状態については、折損品が432点（61.19%）と突出しており、どこか折れた石鏃が非常に多くなっている。ただし、一部が折損した資料だけでなく、先端部のみの資料など多くの状態のものも含んでいる点には注意が必要で、今後残存状態で分けてみることも必要と思われる。成品を含むと、大部分は完成したものであると予想されるが、未成品や失敗品も一定数出土しており、遺跡内で石鏃を製作していたことは確かであるようだ。また、数は少ないが、折れた部分を修正再加工したものも出土している。中には692のように、先端が大きく折れた後に剥離を加えて形を整えているものもあり、折損後即廃棄という流れでは必ずしもないようである。

さらに色調と状態、色調と基部形態の関係について検討を行ってみる（図8右）。色調と状態については、合計の割合（＝平均的比率）と比較してもそれほど大きな差はないといえる。その中で、赤みが強い「YR系統」は、成品の割合が他と比べて高くなっているだけで



なく、「YR 系統」の石鏃では未成品・失敗品がみられないのも特徴の一つである。その逆に、水晶製石鏃では成品がみられないのも特徴である。一方の色調と基部形態では、2b 類が「N 系統」と「GY 系統」が低い他は、やはり合計値と似たような比率となっているが、「N 系統」については、1 類と 2 類の比率がやや低いのに対して、3 類、4・5 類では逆にやや比率が高くなっている違いがある。そのほか、4・5 類については、「N 系統」と「5Y・7.5Y 系統」の合計比率は他とあまり変わらないが、「5Y・7.5Y 系統」が少ない分「N 系統」が他よりも多くなっている。また、表 8 をみても、「YR 系統」など赤色が強い色調で 1 類に多くなる傾向がみられるものの、各色調で全体的には分散している様子を見ることができる。

以上のような状況から、色調と基部形態および状態の関係については、およそ各色調の出土数に応じた比率となっているとみることができる。このことは、一見自然で何の傾向もないように見えるが、作業仮説でみたように、石鏃の色調や形態等が様々な意味を持っているという前提で考えると、実際には面白い状況といえる。つまり、各形態において各色調が似たような比率の状況を呈しているこの状況は、各形態で各色調のチャートが同様な比率になるような社会的背景が存在したということである。このような状況となりえる社会的な要素としては、年齢・世代によ

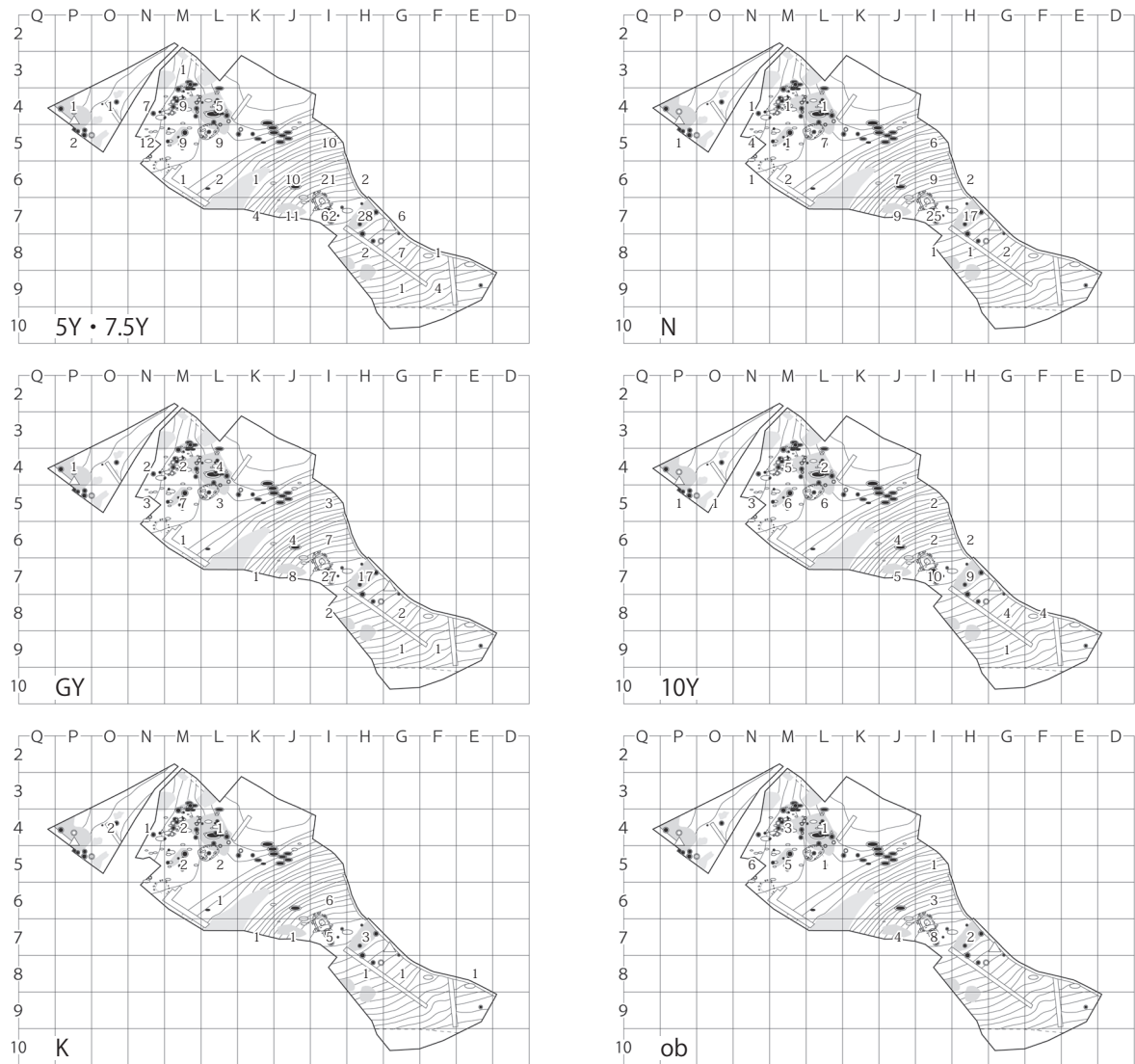


図9 調査区内における石鏃の出土状況 1 (色調 1) (調査区 S=1/2,000)

る区分がもっとも容易に想起される。つまり、出土数が多い色調が若い世代、出土数が低い色調が高い年齢の世代が使用する色調と解釈できる。主観的な意見であるが、石鏝の観察をする中で、「GY 系統」や「YR 系統」のものは比較的細かな剥離をしたものや、整形が丁寧なものが多い印象を受けたことを考えると納得できる。

次に、調査区内における石鏝の出土状況の検討を行う。図9・10は、調査区のグリッド単位でみた各色調・石材の出土数である。最も数が多い「5Y・7.5Y 系統」の石鏝は、I7Gr が62点と突出しており、同系統中の23.93%と約1/4の石鏝が集中している。I7Grは他の色調でも同様に数が多く、「N 系統」が25点（22.13%）、「GY 系統」が27点（23.21%）、黒曜石（ob）が8点（22.86%）、「2.5Y 系統」が8点（23.08%）となっており、全体の比率（157点、22.23%）とほぼ同じである。この他では、「YR 系統」が5点（50.00%）、安山岩（an）が6点（30.00%）と高くなっているのに対して、「10Y 系統」が10点（12.20%）、「K 系統」が5点（13.89%）と逆に低くなっているものもある。比率が低い「10Y 系統」と「K 系統」はI7Grの周辺でも同程度の数が出土しているため、やや比率が低くなっているようである。また、I7Gr周辺と比較しても、H7Grが86点（12.18%）、I6Grが52点（7.37%）、J7Grが40点（5.67%）となって

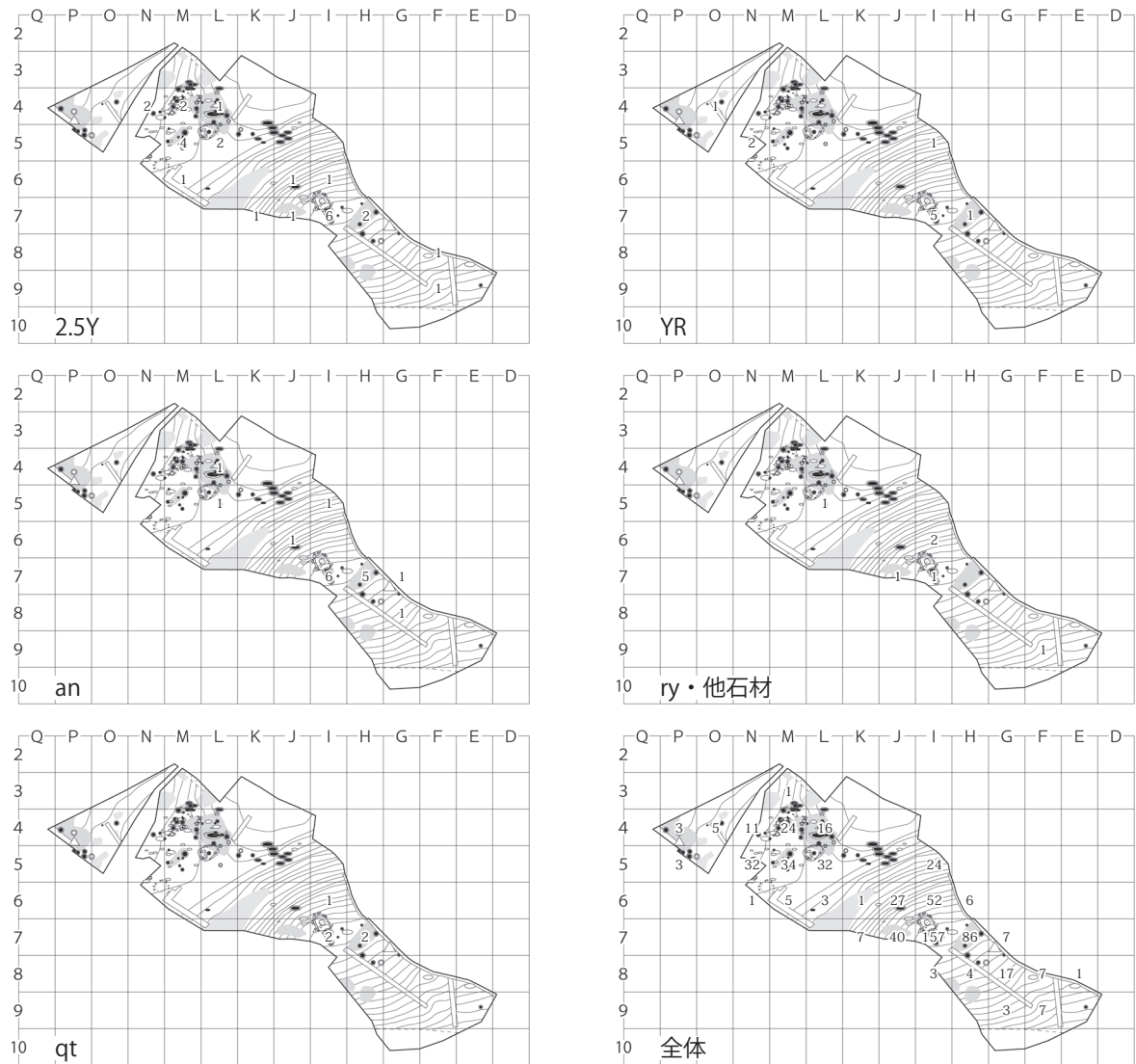


図10 調査区内における石鏝の出土状況2（色調2）（調査区 S=1/2,000）

おり、I7Grが突出している。I7Gr付近でこのような集中した状態がみられる一方、丘陵頂部でも各色調がやや集中して出土している。ただし、全体の出土量をみてもわかるように、丘陵頂部付近では、主にL～N・4～5Grで出土しているが、1グリッドに集中することなく各グリッドで比較的近い出土数となっている特徴がある。いずれの色調でも5Gr列で多く出土しており、I7Gr周辺の出土状況とは様相を異にしている。ただし、各色調でこまかくみると、色調によって出土数が多いグリッドが異なる特徴がある。一方、チャートと黒曜石を除いた石材では、いず

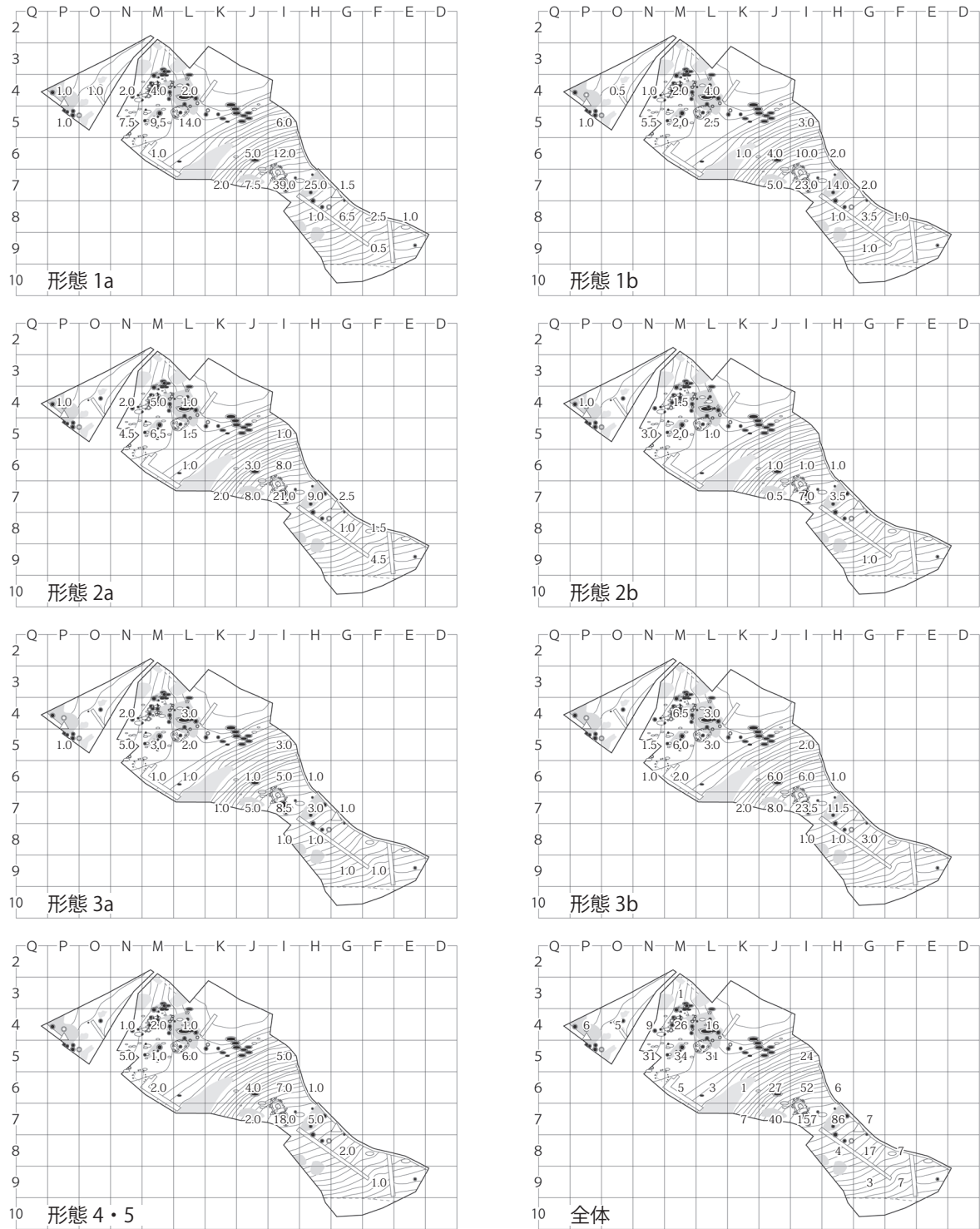


図11 調査区内における石鏃の出土状況4 (形態別) (調査区 S=1/2,000)



れも東側の調査区にかたよる傾向がみられる。

続いて、各基部形態についてグリッドごとの出土数をみる（図 11）と、色調とほぼ同じで、I7Gr に集中する状況と、丘陵頂部に分散して出土している状況を読み取ることができる。I7Gr の出土数は、1a 類が 39.0 点（22.87%）、1b 類が 23.0 点（23.00%）、2a 類が 21.0 点（22.58%）、2b 類が 7.0 点（24.14%）、3a 類が 8.5 点（14.66%）、3b 類が 23.5 点（23.38%）、4・5 類が 18.0 点（24.66%）と、3a 類を除くと 20% 前半でまとまっており、各形態の約 1/4 が I7Gr に集中している。3a 類は I7Gr 周辺の I6Gr と J6Gr でそれぞれ 5 点（8.62%）出土しており、やや散らばった状態を呈している。

一方、調査区西側では、L～N・4～5Gr に集中しているが、出土数の多いグリッドはバラバラであり、1a・2b・4・5 類は L5Gr [1a 類 14.0 点（8.21%）、2b 類 3.0 点（10.34%）、4・5 類 6.0 点（8.22%）、1b・3a 類は N5Gr [1b 類 5.5 点（5.50%）、3a 類 5.0 点（8.62%）、2a 類は M5Gr、3b 類は M4Gr [6.5 点（6.47%）] が最も多くなっている。これらのグリッドの各形態における比率は 5～10% 程度である。

さらに、各状態についてグリッドごとの出土数をみたのが図 12 である。基本的には色調や形

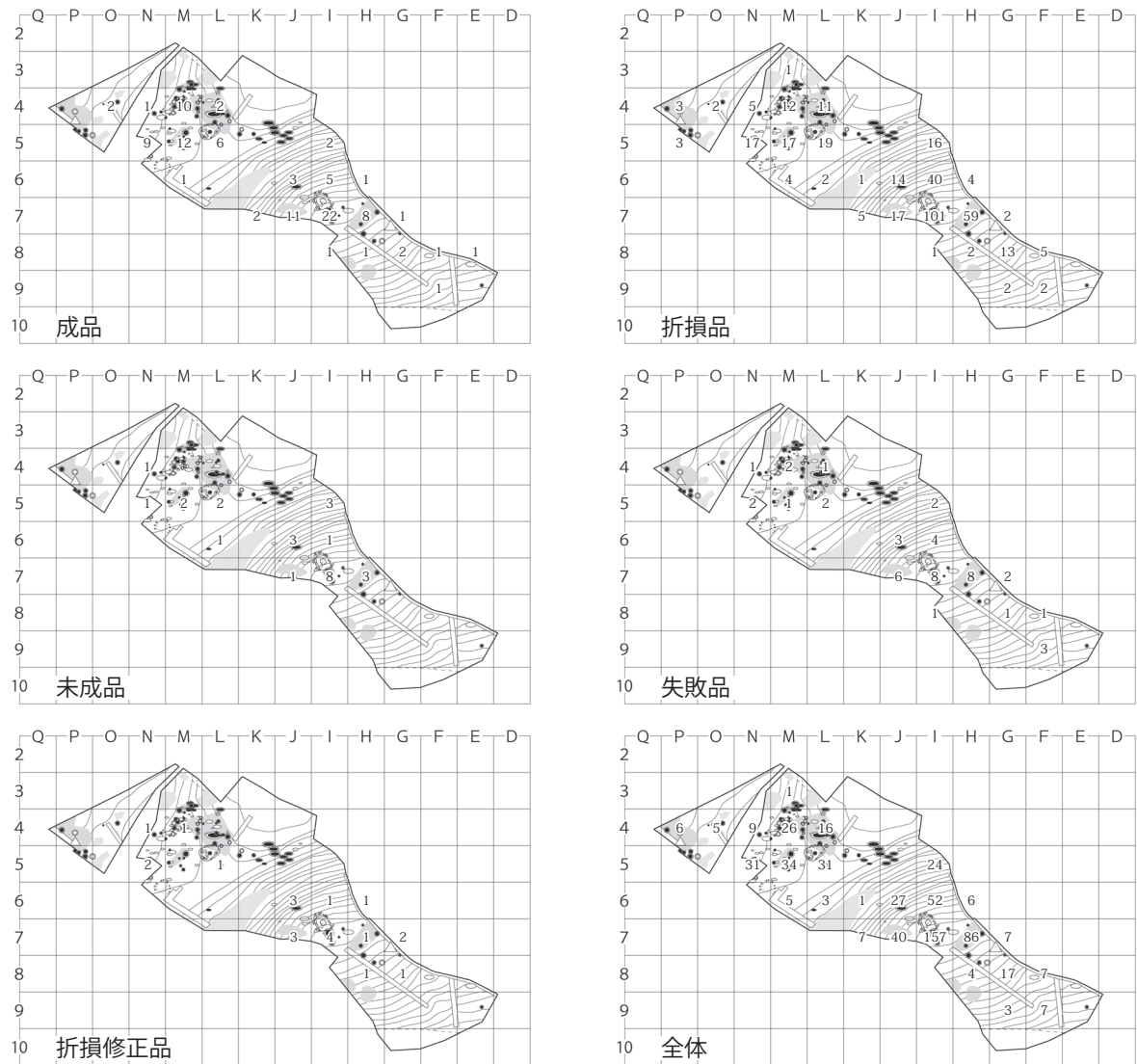


図 12 調査区内における石鏃の出土状況 3（状態別）（調査区 S=1/2,000）

態と同じく、I7Gr 付近と丘陵頂部 L ~ M・4 ~ 5Gr に集中した状況がわかる。I7Gr の出土数は、成品が 22 点 (20.37%)、折損品が 101 点 (23.38%)、未成品が 8 点 (25.00%)、失敗品が 8 点 (13.11%)、折損修正品が 4 点 (15.38%) となっている。このように、成品・折損品・未成品は I7Gr の出土比率が 20% 台で、点数も周辺の 2 倍近くに達するが、失敗品と折損修正品は比率が 10% 台で、失敗品では H8Gr が 8 点と最も多くなっている。このように失敗品と折損修正品では、他の状態のものとは出土傾向が異なり、周辺グリッドとそれほど差が大きい状況がみられる。一方の丘陵頂部でも、成品・折損品は 10 点を越えるグリッドが複数みられるが、未成品・失敗品・折損修正品は各グリッドとも 1 ~ 2 点で、成品・折損品の数とは差が大きくなっている。

以上のようなグリッドごとの出土状況をふまえて、さらに各要素を東西に分けてその状況の検討を行っていく。最初に、調査区の東西で各項目がどのような状況にあるのかをみている。図 13 にみるように、色調・形態・状態それぞれで調査区東側の方が出土数は多くなっている点は共通しているが、各内容ではそれぞれ出土傾向に特徴がみられる。色調では、「5Y・7.5Y 系統」から「2.5Y」系統にむかって、西側での出土点数の

比率が高くなっている。濃い色調の方が西側で出土する割合が高いが、「YR」系統は「2.5Y 系統」に比べて割合が低くなっており、黒曜石を除くその他の石材では、さらに低くなっており、西側では 1 ~ 2 点程度の出土となっている。色調の系統を年齢・世代による違いとみれば、丘陵頂部の方がより高い年齢の世代が所有あるいは使用した石鏃が出土しているということが出来る。次に、形態でみると、大きな差は見られないが、全体的な出土数が少なかった 2b・3a 類では西側丘陵頂部での出土数が若干多くなっている特徴がみられる。状態についてみると、やはり形態と同様に大きな差は見られないが、成品の割合が他の状態のものより 10% 程度高い状況がみられる。

さらに、図 14 に示すように、調査区の東西で各要素の比率を細かく検討を行っていく。色調と形態についてみると、各色調の比率は東西で大きく異なっている。東側では合計値 (= 平均的比率) とほぼ類似した傾向を示しており、2b 類が「N 系統」と「GY 系統」が少ないなど、最初に全体でみた傾向をほぼ踏襲している。ただ、4・5 類については、色調の割合の差が他に比べると小さくなっている点が特徴的といえるかもしれない。それに対して、西側の状況は、色調の比率が各形態で大きく異なっており、必ずしも「5Y・7.5Y 系統」が多く成らない場合もあるのが特徴となっている。ここでの状況は、

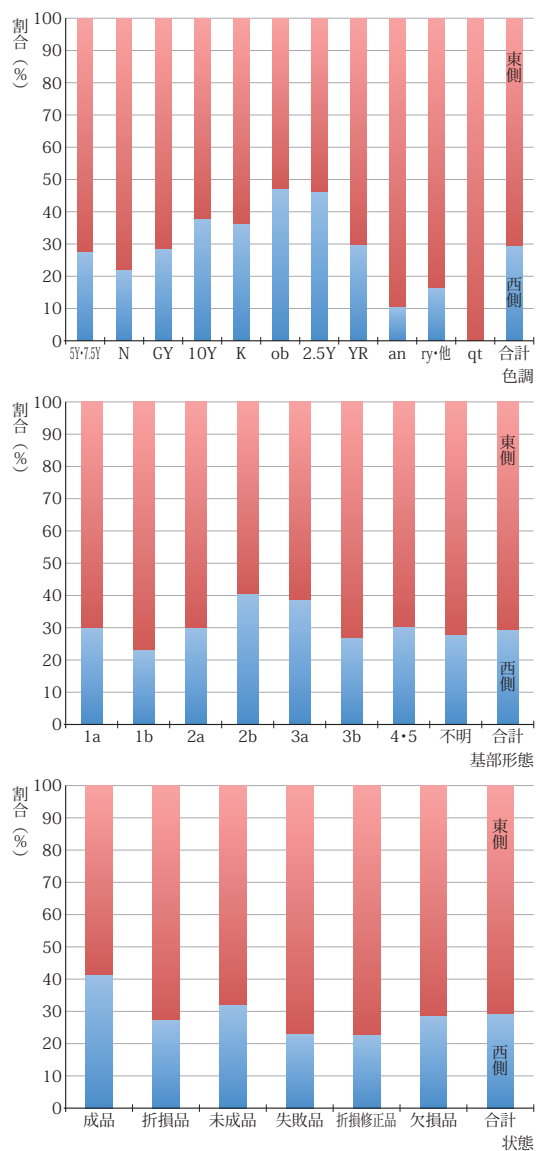


図 13 調査区内の東西地区出土比率の状況

各形態によって所有・使用する年齢・世代がバラバラと解釈することができる。次に色調と状態をみてみると、やはり東側が平均的であるのに対して、西側は差が大きくなっている。西側では、「K系統」や黒曜石のような黒系の色調を除くと、薄い色調から濃い色調に向かって成品の割合が増加しているとみることができる。「K系統」と黒曜石については、東側とほぼ同じ状況である。

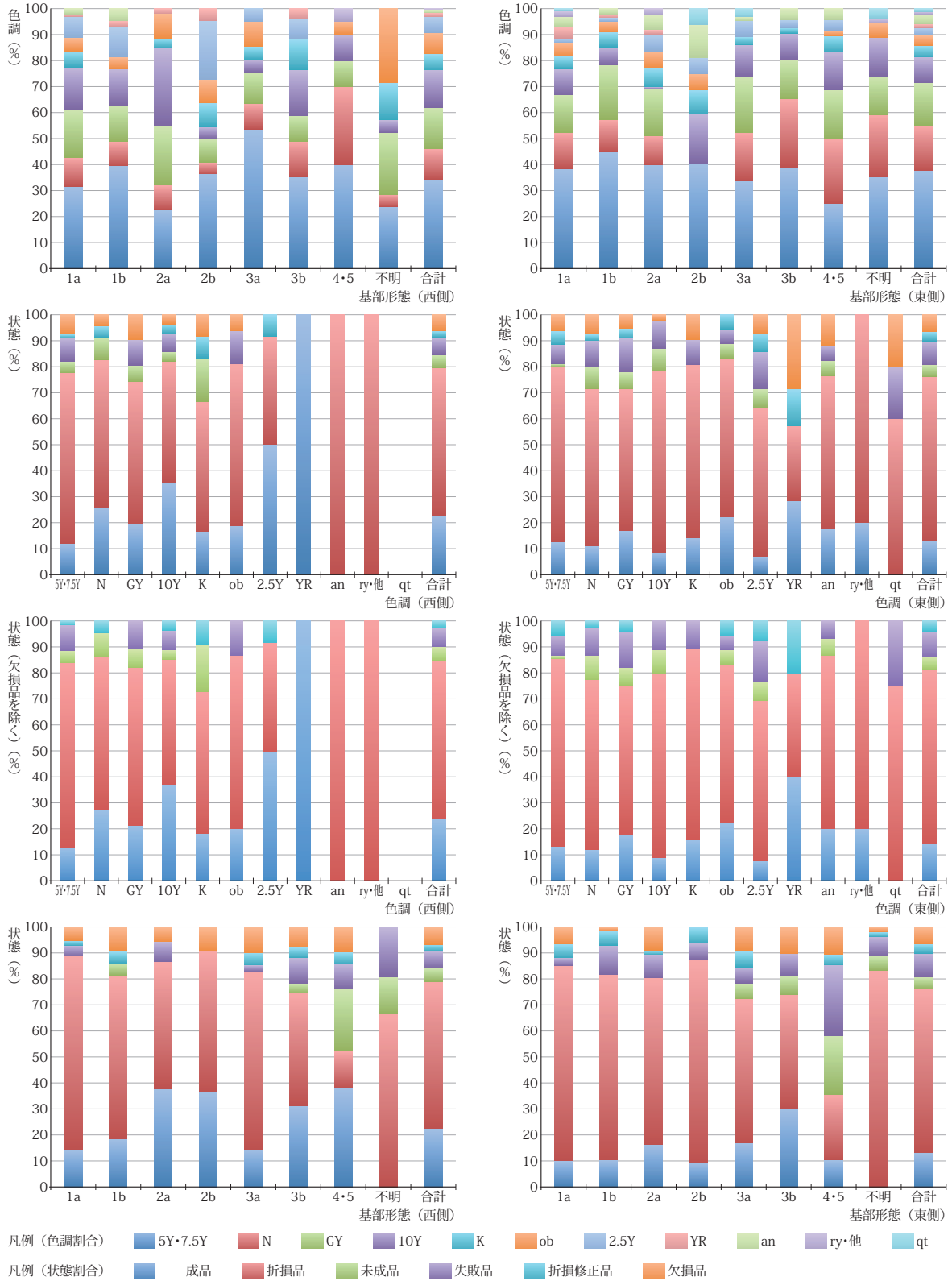


図 14 調査区東側 (E~K Gr) 出土石鏃の様相

表3 調査区西側 (N~P Gr) 出土石鏝の様相

①色調・石材と形態											
	点数	1a	1b	2a	2b	3a	3b	4・5	不明		
5Y・7.5Y	67 (39.41)	15.5 (23.13)	8.5 (12.69)	6.0 (8.96)	4.0 (5.97)	11.0 (16.42)	9.0 (13.43)	8.0 (11.94)	5 (7.46)		
N	23 (13.53)	5.5 (23.91)	2.0 (8.70)	2.5 (10.87)	0.5 (2.17)	2.0 (8.70)	3.5 (15.22)	6.0 (26.09)	1 (4.35)		
GY	31 (18.24)	9.0 (29.03)	3.0 (9.68)	6.0 (19.35)	1.0 (3.23)	2.5 (8.06)	2.5 (8.06)	2.0 (6.45)	5 (16.13)		
10Y	28 (16.47)	8.0 (28.57)	3.0 (10.71)	8.0 (28.57)	0.5 (1.79)	1.0 (3.57)	4.5 (16.07)	2.0 (7.14)	1 (3.57)		
K	12 (7.06)	3.0 (25.00)	0.0 (0)	1.0 (8.33)	1.0 (8.33)	1.0 (8.33)	3.0 (25.00)	0 (0)	3 (25.00)		
ob	16 (9.41)	2.5 (15.63)	1.0 (6.25)	2.5 (15.63)	1.0 (6.25)	2.0 (12.5)	0 (0)	1.0 (6.25)	6 (37.5)		
2.5Y	12 (7.06)	4.0 (33.33)	2.5 (20.83)	0 (0)	2.5 (20.83)	1.0 (8.33)	2.0 (16.67)	0 (0)	0 (0)		
YR	3 (1.76)	0.5 (16.67)	0.5 (16.67)	0.5 (16.67)	0.5 (16.67)	0 (0)	1.0 (33.33)	0 (0)	0 (0)		
an	2 (1.18)	1.0 (50.00)	1.0 (50.00)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
ry・他	1 (0.59)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1.0 (100)	0 (0)		
qt	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
合計	195 (100)	49.0 (25.13)	21.5 (11.03)	26.5 (13.59)	11.0 (5.64)	20.5 (10.51)	25.5 (13.08)	20.0 (10.26)	21 (10.77)		

②色調・石材と状態											
	点数	成品	折損品	未成品	失敗品	折損修正品	欠損品				
5Y・7.5Y	67 (39.41)	8 (11.94)	44 (65.67)	3 (4.48)	6 (8.96)	1 (1.49)	5 (7.46)				
N	23 (13.53)	6 (26.09)	13 (56.52)	2 (8.70)	0 (0)	1 (4.35)	1 (4.35)				
GY	31 (18.24)	6 (19.35)	17 (54.84)	2 (6.45)	3 (9.68)	0 (0)	3 (9.68)				
10Y	28 (16.47)	10 (35.71)	13 (46.43)	1 (3.57)	2 (7.14)	1 (3.57)	1 (3.57)				
K	12 (7.06)	2 (16.67)	6 (50.00)	2 (16.67)	0 (0)	1 (8.33)	1 (8.33)				
ob	16 (9.41)	3 (18.75)	10 (62.5)	0 (0)	2 (12.50)	0 (0)	1 (6.25)				
2.5Y	12 (7.06)	6 (50.00)	5 (41.67)	0 (0)	0 (0)	1 (8.33)	0 (0)				
YR	3 (1.76)	3 (100)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
an	2 (1.18)	0 (0)	2 (100)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
ry・他	1 (0.59)	0 (0)	1 (100)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
qt	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
合計	195 (100)	44 (22.56)	111 (56.92)	10 (5.13)	13 (6.67)	5 (2.56)	12 (6.15)				

③形態と状態											
	点数	成品	折損品	未成品	失敗品	折損修正品	欠損品				
1a	49.0 (28.82)	7.0 (14.29)	36.5 (74.49)	0 (0)	2.0 (4.08)	1.0 (2.04)	2.5 (5.10)				
1b	21.5 (12.65)	4.0 (18.60)	13.5 (62.79)	1.0 (4.65)	0 (0)	1.0 (4.65)	2.0 (9.30)				
2a	26.5 (15.59)	10.0 (37.74)	13.0 (49.06)	0 (0)	2.0 (7.55)	0 (0)	1.5 (5.66)				
2b	11.0 (6.47)	4.0 (36.36)	6.0 (54.55)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1.0 (9.09)				
3a	20.5 (12.06)	3.0 (14.63)	14.0 (68.29)	0 (0)	0.5 (2.44)	1.0 (4.88)	2.0 (9.76)				
3b	25.5 (15.00)	8.0 (31.37)	11.0 (43.14)	1.0 (3.92)	2.5 (9.80)	1.0 (3.92)	2.0 (7.84)				
4・5	21.0 (12.35)	8.0 (38.10)	3.0 (14.29)	5.0 (23.81)	2.0 (9.52)	1.0 (4.76)	2.0 (9.52)				
不明	21.0 (12.35)	0 (0)	14.0 (66.67)	3.0 (14.29)	4.0 (19.05)	0 (0)	0 (0)				
合計	196.0 (100)	44.0 (22.45)	111.0 (56.63)	10 (5.10)	13.0 (6.63)	5.0 (2.55)	13.0 (6.63)				

黒曜石以外の石材については、繰り返しになるが、数が1~2点ということもあり、ほぼ折損品という状況となっている。一方の東側では、「YR系統」が成品と折損修正品の比率が他よりも比較的高くなっている。また、図14からはわかりにくいですが、表4から、折損修正品の割合が色調が濃い方がやや高くなっている状況を確認することができる。最後に、形態と状態についてであるが、成品の割合は、2類と4・5類で西側出土品の比率が高めである以外は、東側とそれほど大きな差はみられない。ここでもっとも特徴的なのは、4・5類における未成品の割合の高さと、東側出土品の失敗品の割合の高さである。調査区東側で出土している4・5類は、先にみたように各色調の比率が比較的近いこと、失敗品や未成品の割合が高いことを考えると、他の形態を作る原形的な形態を多く含んでいるのかもしれない。

### 3 駄小屋遺跡の石鏝に関する若干の考察

以上、簡単なが駄小屋遺跡出土の石鏝について検討を行ってきたが、結果として次のような

表 4 調査区東側（E～K Gr）出土石鏝の様相

## ①色調・石材と形態

	点数	1a	1b	2a	2b	3a	3b	4・5	不明
5Y・7.5Y	176 (37.69)	44.0 (25.00)	32.0 (18.18)	24.5 (13.92)	6.5 (3.69)	11.0 (6.25)	27.0 (15.34)	12.0 (6.82)	19 (10.80)
N	81 (17.34)	16.0 (19.75)	9.0 (11.11)	7.0 (8.64)	0 (0)	6.0 (7.41)	18.0 (22.22)	12.0 (14.81)	13 (16.05)
GY	77 (16.49)	16.5 (21.43)	15.0 (19.48)	11.0 (14.29)	0 (0)	7.0 (9.09)	10.5 (13.64)	9.0 (11.69)	8 (10.39)
10Y	46 (9.85)	11.5 (25.00)	5.0 (10.87)	0.5 (1.09)	3.0 (6.52)	4.0 (8.70)	7.0 (15.22)	7.0 (15.22)	8 (17.39)
K	21 (4.50)	5.5 (26.19)	4.0 (19.05)	4.5 (21.43)	1.5 (7.14)	1.0 (4.76)	1.5 (7.14)	3.0 (14.29)	0 (0)
ob	18 (3.85)	6.0 (33.33)	3.0 (16.67)	4.0 (22.22)	1.0 (5.56)	0 (0)	0 (0)	1.0 (5.56)	3 (16.67)
2.5Y	14 (3.00)	2.0 (14.29)	1.0 (7.14)	4.0 (28.57)	1.0 (7.14)	2.0 (14.29)	2.0 (14.29)	2.0 (14.29)	0 (0)
YR	7 (1.50)	5.0 (71.43)	1.0 (14.29)	1.0 (14.29)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
an	17 (3.64)	4.5 (26.47)	1.5 (8.82)	3.5 (20.59)	2.0 (11.76)	0.5 (2.94)	3.0 (17.65)	2.0 (11.76)	0 (0)
ry・他	5 (1.07)	2.5 (50.00)	0 (0)	1.5 (30.00)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (20.00)
qt	5 (1.07)	1.0 (20.00)	0 (0)	0 (0)	1.0 (20.00)	1.0 (20.00)	0 (0)	0 (0)	2 (40.00)
合計	467 (100)	114.5 (24.52)	71.5 (15.31)	60.5 (13.17)	16.0 (3.43)	32.5 (6.96)	69.0 (14.78)	48.0 (10.28)	54 (11.56)

## ②色調・石材と状態

	点数	成品	折損品	未成品	失敗品	折損修正品	欠損品
5Y・7.5Y	176 (37.69)	22 (12.5)	119 (67.61)	2 (1.14)	13 (7.39)	9 (5.11)	11 (6.25)
N	81 (17.34)	9 (11.11)	49 (60.49)	7 (8.64)	8 (9.88)	2 (2.47)	6 (7.41)
GY	77 (16.49)	13 (16.88)	42 (54.55)	5 (6.49)	10 (12.99)	3 (3.90)	4 (5.19)
10Y	46 (9.85)	4 (8.70)	32 (69.57)	4 (8.70)	5 (10.87)	0 (0)	1 (2.17)
K	21 (4.50)	3 (14.29)	14 (66.67)	0 (0)	2 (9.52)	0 (0)	2 (9.52)
ob	18 (3.85)	4 (22.22)	11 (61.11)	1 (5.56)	1 (5.56)	1 (5.56)	0 (0)
2.5Y	14 (3.00)	1 (7.14)	8 (57.14)	1 (7.14)	2 (14.29)	1 (7.14)	1 (7.14)
YR	7 (1.50)	2 (28.57)	2 (28.57)	0 (0)	0 (0)	1 (14.29)	2 (28.57)
an	17 (3.64)	3 (17.65)	10 (58.82)	1 (5.88)	1 (5.88)	0 (0)	2 (11.76)
ry・他	5 (1.07)	1 (20.00)	4 (80.00)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
qt	5 (1.07)	0 (0)	3 (60.00)	0 (0)	1 (20.00)	0 (0)	1 (20.00)
合計	467 (100)	62 (13.28)	294 (62.96)	21 (4.50)	43 (9.21)	17 (3.64)	30 (6.42)

## ②形態と状態

	点数	成品	折損品	未成品	失敗品	折損修正品	欠損品
1a	114.5 (24.52)	11.5 (10.04)	86.0 (75.11)	0 (0)	3.5 (3.06)	6.0 (5.24)	7.5 (6.55)
1b	71.5 (15.31)	7.5 (10.49)	51.0 (71.33)	0 (0)	8.0 (11.19)	4.0 (5.59)	1.0 (1.40)
2a	61.5 (13.17)	10.0 (16.26)	39.5 (64.23)	0 (0)	5.5 (8.94)	1.0 (1.63)	5.5 (8.94)
2b	16.0 (3.43)	1.5 (9.38)	12.5 (78.13)	0 (0)	1.0 (6.25)	1.0 (6.25)	0 (0)
3a	32.5 (6.96)	5.5 (16.92)	18.0 (55.38)	2.0 (6.15)	2.0 (6.15)	2.0 (6.15)	3.0 (9.23)
3b	69.0 (14.78)	21.0 (30.43)	30.0 (43.48)	5.0 (7.25)	6.0 (8.70)	0 (0)	7.0 (10.14)
4・5	48.0 (10.28)	5.0 (10.42)	12.0 (25.00)	11.0 (22.92)	13.0 (27.08)	2.0 (4.17)	5.0 (10.42)
不明	54.0 (11.56)	0 (0)	45.0 (83.33)	3.0 (5.56)	4.0 (7.41)	1.0 (1.85)	1.0 (1.85)
合計	467.0 (100)	62 (13.28)	294.0 (62.96)	21 (4.50)	43.0 (9.21)	17.0 (3.65)	30.0 (6.42)

特徴を挙げることができる。

## 全体的な傾向

- ・色調の出土数と、各形態における色調の比率は同じような傾向をしており、色が濃いものが少なくなる傾向にある。2b類のみ「N系統」と「GY系統」が少ない。
- ・基部形態は出土数のバラツキが大きく、鍬形鏝となる1a類等が多いが、挟りが浅い、あるいはあまりない3類、4・5類も出土している。
- ・色調と状態では、色調の濃いもののほうがやや成品の率が高くなる傾向にある。
- ・濃い色調の比率は西側ではだんだん高くなる。＝東側では濃い色調の比率が低くなる。

## 調査区西側の特徴

- ・L～N・4～5Grに集中しているが、1つのグリッドに集中することは少なく分散的に出土している。
- ・成品・折損品の出土数に比べると、未成品・失敗品・折損品の出土数が少ない。



- ・チャートと黒曜石以外の石材の出土数が非常に低い。
- ・各形態における色調の比率は、バラツキが大きく形態ごとに様相が異なる。
- ・各色調における状態の比率は、色調が濃いものの方が成品の比率が高くなる傾向にある。

調査区東側の特徴

- ・I7Gr に出土数が集中しており、多くの要素で全体の 1/4 程度を占めている。
- ・各形態における色調の比率は、それほど大きな差はないが、4・5 類は「5Y・7.5Y 系統」以外の比率がやや高い。
- ・各形態における状態の比率は、それほど大きな差は無いが、4・5 類のみは他に比べると、折損品の割合がひくく、未成品と失敗品の割合が高い。
- ・チャートと黒曜石以外の石材の数が多い。

以上のように調査区西側と東側では出土傾向が異なることから、その社会的背景も異なることが考えられる。その背景を考えるために、ここでは東西地区別に各遺構別に石鏃の出土状況をみている。表5に示すように、予想されたとおり東西地区では石鏃が出土する傾向に差異がみられる。西側地区では、2号竪穴建物跡だけでなく集石遺構からも一定数の出土がみられるのに対して、東側地区では遺構出土石鏃の8割以上が1号竪穴建物跡から出土している。次に色調についてみると、東西地区いずれも「5Y・7.5Y 系統」が43%前後、「N 系統」が17%とほぼ同じ比率で出土している。ただし、出土する遺構は西側が分散的であるのに対して、東側では竪穴建物跡に集中しているように、両地区で大きく異なっている。また、形態については、東西でやや様相が異なる。西側地区では、1a類と4・5類に偏っているのに対して、東側地区では1a類がやや多くなっているほかはそれほど西側地区のような大きな差はみられない。石鏃の状態については、東西地区で似た状況である。こ

表5 調査区東西別にみた遺構内出土石鏃の様相

遺構種別	合計(※)	5Y・7.5Y	N	GY	10Y	K	ob	2.5Y	YR	an	ny・他	qt	1a	1b	2a	2b	3a	3b	4・5	不明	成	折	未	失	折修	欠	
調査区西側																											
2号竪穴	13 (46.43)	3	4	2	2	1	1	1	1	1	1	1	6.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	3.0	2.0	1	9	1	1	1	2	
平地式	1 (3.57)		1																1.0							1	
集石	8 (28.57)	5	1	1	1	1	1	1	1			2.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	3.0	1	6					1	
炉穴	1 (3.57)	1																	1.0		1					1	
土坑	5 (17.86)	3	2	2	2	1	1	1	0	1	1	0	1.0	2.0	1.0	2.0	1.0	1.0	1.0	1.0	3	1	1	1	1	1	
西側合計	28 (100)	12	5	2	2	1	1	1	0	1	1	0	9.0	2.0	2.0	1.0	2.0	1.0	6.0	6.0	6	15	4	1	0	3	
調査区東側																											
1号竪穴	19 (82.61)	8	4	2	2	1	1	1	1				5.0	4.0	2.0	1.0	2.0	3.0	1.0	1.0	1	15				2	
集石	1 (4.35)	1																1.0								1	
炉穴	1 (4.35)	1																	1.0		1					1	
土坑	2 (8.7)					1							1.0		1.0						1	1				1	
東側合計	23 (100)	10	4	2	2	2	2	1	1	0	1	0	6.0	4.0	2.0	1.0	1.0	3.0	3.0	2.0	3	16	0	0	0	3	
合計	51 (100)	22	9	5	4	3	2	3	0	2	1	0	15.0	6.0	4.0	2.0	3.0	4.0	9.0	8.0	9	31	4	1	0	6	
各項目の割合		(43.14)	(17.65)	(9.8)	(7.84)	(5.88)	(3.92)	(5.88)	(0)	(3.92)	(1.96)	(0)	(29.41)	(11.76)	(7.84)	(3.92)	(5.88)	(7.84)	(17.65)	(15.69)	(17.65)	(60.78)	(7.84)	(1.96)	(0)	(11.76)	
(上：遺構内出土数、下：各項目全体数)		(8.49)	(7.96)	(4.5)	(4.88)	(8.33)	(5.71)	(11.54)	(0)	(10)	(14.29)	(0)	(8.80)	(6.00)	(4.35)	(6.90)	(5.17)	(3.98)	(12.33)	(9.76)	(8.33)	(7.18)	(12.5)	(1.67)	(0)	(12.77)	

※合計欄の括弧内の数値は、左が遺構内出土点数に対する割合、右が東西各地区の出土点数に対する割合である。

表6 調査区西側グリッドにおける石器・遺構の分布状況

種類	Gr 調査区 合計	調査区西側																	不明		
		小計(比率)	P4	P5	O3	O4	O5	N4	N5	M3	M4	M5	M6	L3	L4	L5	L6	C-D区	B区	不明	
<b>石器</b>																					
異形石器(570~575)	5	1 (20.00)								1										1	
異形石器(他)	13	7 (53.85)	1	1	1			2			1			1							
尖頭状石器	3	3 (100)								1				1					1		
石錐	2	1 (50.00)						1												1	
楔形石器	2	1 (50.00)									1										
石核(ch)	6	2 (33.33)								1	1										
石核(他石材)	5	1 (20.00)	1																		
打製石斧	3	1 (33.33)												1							
スクレイパー	7	3 (42.86)	1					1											1		
礫器	7	2 (28.57)	1					1												1	
刃器	2	1 (50.00)												1							
磨石	20	6 (30.00)						1		4				1						1	
敲石	5	2 (40.00)	1							1											
石棒	1	0 (0)																			
磨製石斧	1	1 (100)									1										
凹石	1	0 (0)																			
有孔石製品	1	0 (0)																			
<b>遺構</b>																					
集石	76	59 (77.63)	1	4		4	1	3	1	1	23	7		12	2						
炉穴	18	8 (44.44)								3	2			1	1		1				
土坑	47	37 (78.72)						2	4	1	18	7		5							

表7 調査区東側グリッドにおける石器・遺構の分布状況

種類	Gr 調査区 合計	調査区東側																		
		小計(比率)	K4	K5	K6	K7	J4	J5	J6	J7	I5	I6	I7	H6	H7	H8	G7	E9	F8	E8
<b>石器</b>																				
異形石器(570~575)	5	3 (60.00)												2		1				
異形石器(他)	13	6 (46.15)									1	5								
尖頭状石器	3	0 (0)																		
石錐	2	0 (0)																		
楔形石器	2	1 (50.00)										1								
石核(ch)	6	4 (66.67)							1				2	1						
石核(他石材)	5	4 (80.00)				1				1	1	1								
打製石斧	3	2 (66.67)									1	1								
スクレイパー	7	4 (57.14)									1	2		1						
礫器	7	4 (57.14)								1				3						
刃器	2	1 (50.00)								1										
磨石	20	13 (65.00)							3	3			1		6					
敲石	5	3 (60.00)								1		1	1							
石棒	1	1 (100)										1								
磨製石斧	1	0 (0)																		
凹石	1	1 (100)									1									
有孔石製品	1	1 (100)								1										
<b>遺構</b>																				
集石	76	17 (22.37)		3									5		4	2	2	1		
炉穴	18	10 (55.56)	1	3				5	1											
土坑	47	10 (21.28)			1		1	1	1	3			1						1	1

れまでと同じように折損が多くなっているが、失敗品と折損修正品の数が少なくなっている<sup>(12)</sup>。項目全体でもて遺構内出土の失敗品は1%台と非常に少なくなっている。グリッド別にみた出土数においても住居が位置するI7Gr以外からも多く出土していたことを考えると、失敗品は廃棄されたのかもしれない。以上のような状況から、西側地区では竪穴建物だけでなく集石など複数の遺構が、東側地区では竪穴建物跡が主に出土状況に影響を与えている可能性が考えられる。

次に、他の石器が調査区内でどのような出土状況にあるのかを検討してみる。表6・7は、報告されている石器について各グリッドにおける出土点数を示したものであるが、石鏃と同様に西側と東側ではその出土傾向が大きく異なる。西側地区では広い範囲に散らばっているのに対して、東側地区はIGr付近に集まっている。一方で、東西地区での器種の違いをみると、ほとんどの器種が両方でそれほど大きな差がなく出土していることがわかる。偏りがあるのは、尖頭状石器と磨製石斧が西側地区のみ、石棒・凹石・有孔石製品が東側地区のみで出土している。さらに各遺構の状況を見ると、東西地区において遺物とは逆の分布状況を呈している。すなわち、西側地区ではM・NGrに集中するのに対して、東側地区ではIGrを避けるように広い範囲に分散しており、集石と土坑でも分布範囲が異なっている。このような遺構と遺物の分布状況を考えると、西側地区では遺構が遺物の分布に与える影響が小さいのに対して、東側地区ではI7Grに位置する竪穴建物跡の存在が遺物の分布状況に影響を及ぼしていると考えられる。ところで、図9～12でみたように、石鏃の分布状況はL～N・4～5Grに多く成っているが、これは集石遺構・炉穴・土坑が集中している区画と重なっているといえる。そのため、西側地区の石鏃については、他の石器とは異なり、これらの遺構の影響が大きいものと考えたい。ただし、報告書によれば、「本報告分として遺跡から抽出した石器1107点の内訳は(中略)石鏃702点(63.4%)、尖頭状石器4点(0.4%)などの狩猟具が63.8%、磨石73点(6.6%)、敲石19点(1.7%)などの植物調理用石器が9%、スクレイパー9点(0.8%)、凹石6点(0.5%)などの加工具が1.5%、石棒1点(0.1%)、異形石器13点(1.2%)などの祭祀具が1.3%」であり、磨石や敲石では未報告分が多い点には注意が必要であるものの、おおよその傾向を示していると解釈しておく。

以上、他の石器も含めた検討から、西側地区では石鏃の分布に集石遺構・炉穴・土坑などの遺構が影響していることと、東側地区では1号竪穴建物跡の存在が遺物の分布に大きな影響を与えていることを指摘することができた。東側地区については、斜面であるため、流れ混みの可能性も考えられるが、地形的にさらに低い方向への移動が少ないことから、数十mといった大きな移動はないものと解釈できる。このような状況から、石鏃の意味を考えると、西側地区については集石遺構や炉穴で調理する対象となる動物の狩猟に使用された残骸ではないかと考えられる。未成品や失敗品もあるため、石鏃をある程度製作していたことは間違いないと思われるが、成品や折損品が比較的多いこともそのことを裏付けていると思われる。一方の東側地区については、解釈が難しいが、居住環境には不適な斜面上の建物であることや、付近から300点近くの非常に多い石鏃が出土していることなどがヒントとなりそうである。色調を年代・世代と解釈したので、一つの集落の全ての世代の人間が集まって石鏃を製作したとも考えられなくはないが、現実的ではないと思われる。色調が年代や世代で異なる、すなわち社会的に規制されていると仮定すれば、世代が変わる際の通過儀礼として、この場所で最初に新しい色調の石材を使用して石鏃を作成したと解釈できないだろうか。世代毎に社会的集団が分離されており、年齢階梯の上昇にともなって通過儀礼が執り行われることがあることは、民族例でも知られており(ファン・ヘネップ1999)、それほど特殊な事例ではないと思われる。また、このような住みにくい斜面地に1



軒のみ竪穴建物跡が存在することも、通過儀礼の特徴として、日常からの分離が存在することを考えれば納得ができる。さらにマツリの道具とされる石棒が、1号竪穴建物跡に隣接するI6Grで出土している理由も理解しやすい。

ところで、主にチャート製石鏃における色調が年齢と関係しているとすれば、最も若い世代が使用する「5Y・7.5Y系統」の使用にも制限があると解釈できるので、一定の年齢までは狩猟活動には参加できなかったことを示していると解釈できる。狩猟活動には恐らく社会的な“オトナ”のみが参加できたのであろう。狩猟活動への参加が“オトナ”としての最初の一步であった可能性も考えられる。東側地区における石鏃の出土背景をこのように解釈すると、先にみた西側地区のそれを通過儀礼後の初狩猟による饗宴の痕跡と考えてみるのも、また面白いのではないだろうか。

以上、推測に推測を重ねた大胆な解釈であるが、駄小屋遺跡出土の石鏃は、社会的な“オトナ”の階段を上るための最初の一步としての、石鏃製作におけるその知識および技術の伝承と、さらに年齢階梯を上昇する際の通過儀礼の結果であり、その後の丘陵上における饗宴の結果ではないかと考えた。報告書中でも述べられているが、付近には早日渡遺跡（宮崎県教育委員会 1995）のように300㎡強の調査面積で250点以上の石鏃が出土した遺跡もある。どのような違いがあるか興味があるところであり、今後は今回断念した形態の詳細な観察・分類とともに、周辺遺跡の様相について検討を行っていきたい。

最後になったが、駄小屋遺跡の整理作業および報告書を担当した野崎一人主査には、事実確認や形態分類などにおいて、業務の間をみて協力していただいた。さらに石器や石材の知識に乏しい筆者は、赤崎広志主幹と日高広人主査から多くの教示と協力をいただいた。各職員が忙しい中、筆者の煩雑なお願いについていつも快諾していただき、文末ではあるが記して感謝の意を表したい。また、編集担当の吉本正典主幹には、規定数を大幅に越える页数となってしまい大変ご迷惑をかけたことをお詫びしたい。

#### 註

- (1) 直訳的には、「主張の様式」といった言葉が当てはまるであろう。しかし、“紋章的”に対する意味や、個人のアイデンティティーを反映させるという意味的な内容から、「個人様式」と意識した。
- (2) 構造主義的に考えれば、隣接するモノの区別や関係に意味があるのであり、そのモノ自体には特別な意味がない可能性もある。したがって、石鏃によって個人や集団を区別していると仮定した場合、関係性のない集団間で形態の比較を行ってもその意味は少ないという考え方も可能である。
- (3) 弥生時代や古墳時代の玉類でも青と緑が混在していることはあるように思われるので一定程度は有効であると考えられる。筆者としては、検討はしていないものの、弥生時代や古墳時代社会では、より力がある人間はより当時の焦点色に近い色調で揃えているのではないかと予想している。
- (4) 登録番号は、当センターが遺物の管理を行う上で付加している番号であり、報告書掲載分は掲載番号が登録番号となる。
- (5) 当初、先端部や脚部の小さな破片は「小破片」としていたが、どの程度までの大きさを小破片とするか定義が困難だったため、折損品に含めることにした。
- (6) ここでの意図としては、側辺形態 - 脚端形態 - 基部形態の組み合わせにより、異なる組み合わせによって類似する形態の微妙な違いを表現しようとしたものである。たとえば、側辺 - 脚端 - 基部が「3-3-1a」、「3-4-2a」は似た形状になるが、微妙に脚部の雰囲気が違うことを表すような感じである。
- (7) 左右で形態が異なる場合はそれぞれ「0.5」でカウントしている。ただし、数は少なく、左右で同じ形態のものが基本となることから、破片のみの場合でも「1.0」としている。

- (8) 石材について判別が難しいものについては赤崎主幹に意見をいただいたが、間違いがあればそれは筆者の知識と理解力不足によるものである。
- (9) 記号化していない、分類および本文中の色調表現（「淡い緑色」など）については、イメージをしやすくするための筆者の主観的な表現であり、『土色帖』の表現とは異なる。
- (10) 儀礼行為の研究（Moor and Myerhoff 1977、今村<sup>仁</sup>・今村<sup>真</sup> 2007）を参照すると、祭祀の特徴の一つとして、一定の秩序・規則性をもった行為（祭祀の場合は非日常的な行為・道具か）が、一定の間隔・頻度・契機で反復される点にあるといえる。したがって、使用する間隔・頻度・契機によって使用率、使用方法によって破損率は変化すると考えられる。
- (11) 本文中および表中で使用している割合の須地は、少数第三位を四捨五入した数値である。
- (12) 表中の各項目の割合における下段の割合である「各項目全体数」とは、状態であれば「成品」や「折損品」といったそれぞれの項目における割合を示している。たとえば「失敗品」の場合、失敗品全 60 点中における割合（1.67%）を示している。
- (12) 報告書の図でみるかぎり、斜面方向では床面が 1 m 近い南北方向で高低差がある。

#### 引用・参考文献

- 市川光雄 1991 「平等主義の進化史的考察」『ヒトの自然史』、平凡社、12～34 頁。
- 今村仁司・今村真介 2007 『交易する人間 贈与と交換の人間学』、講談社。
- 北村光一 1996 「「平等主義社会」というノスタルジア - ブッシュマンは平等主義者ではない - 」『アメリカ研究』第 48 号、19～34 頁。
- ファン・ヘネップ、アルノルド 1999 『通過儀礼』（綾部恒雄・綾部祐子訳）、弘文堂。
- 宮崎県教育委員会 1995 『打扇遺跡・早日渡遺跡・矢野原遺跡・蔵田遺跡』一般国道 218 号椎畑バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、21～72 頁。
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2014 『駄小屋遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 233 集。
- Weissner, Polly 1983 Style and social information in Kalahari San projectile points. *American Antiquity*. vol.48 No.2, pp253-276.
- Kay, Paul and Luisa Maffi 1999 Colour Appearance and the Emergence and Evolution of Basic Colour Lexicons. *American Anthropologist*. vol.101 No.4, pp.743-760.
- Moor, Sally F., and Barbara G. Myerhoff 1977 Introduction: Secular ritual. *Secular Ritual*. Van Gorcum & Comp. pp.3-24.

付表 駄小屋遺跡出土石鏝形態等分類一覧

登録 番号	点上 番号	出土位置		状態	細部形態				報告書 分類	石材	色調 (『土色帖』)	備考
		Gr 番号	層位等		側辺	脚端	脚端	基部				
報告書掲載遺構内出土資料												
0009	-	I7(SA1 b-2)		成	3'	5	5	5	I B	ch	5Y6/1	1号竪穴建物跡
0010	-	I7(SA1-9)		折	3'	1b	▲	1a	IVAb	ch	5Y8/1	1号竪穴建物跡
0011	-	I7(SA1-13)		折	2f	4	△	2a	IVBa	ch	2.5Y6/2	1号竪穴建物跡
0021	-	L5(SA3-6)		欠	1(3')	5	5	4	I B	ch	N4+7.5Y6/1	2号竪穴建物跡
0022	-	L5(SA3-a5)		(折)	1	4	4	4	II A	ry	-	2号竪穴建物跡
0023	-	L5(SA3-96)		欠	3f	▲	4	1b	IVBa	ch	7.5Y5/1	2号竪穴建物跡
0024	-	L5(SA3-9)		折	3	1a	△	(1a)	IVBc	an	-	2号竪穴建物跡
0025	-	L5(SA3-60)		成	3'(2)	1a	1a	1a	IVBc	ch	5Y7/1+N4/	2号竪穴建物跡
0027	-	N6(SA2-43)		未	(3・4)	4	5	4	II A	ch	N4/(+5Y6/2)	平地式建物
0043	-	P5(SI14)		折	4?	3a	△	3a	III Bc	ch	7.5Y4/1+5Y6/1	12号集石
0044	-	M4(SI7-1)		成	3	2b	1b	3b	III Bc	ch	2/5Y6/2	58号集石
0046	-	L4(SC8)		成(未?)	3	2b	▲	4	II B	ch	5Y6/1+5Y7/2	12号竪穴
0050	-	N4(SC19)		折	4(f)	△	4	2a	IVBa	ch	5Y6/1	15号土坑
0056	-	E8(SC4)		成(折)	3s	3a	△	1a	IVBb	ch	5Y2/1+5Y6/1	37号土坑
0059	-	I7(SC5-1)		折	3(n)	△	3a	2b	III Bc	an	-	38号土坑
報告書掲載包含層出土資料												
0344	-	I7	-	成	1・2	4	r5	3b	I A	ch	5Y6/1+2N/	
0345	-	D区	-	成	3	5	5	5	I A	ch	N4/	
0346	-	I6	-	成(折)	3	5	(△)	4	I A	ch	N5/+2.5GY4/1	
0347	-	I6	-	成	1・2	5	5	4	I A	ch	2.5GY4/1	
0348	8940	N5	VI層	折修	3・1	5	(r)	4	I A	ch	N4/	
0349	1853	G8	V層	折	3'	5	(△)	4	I A	ch	5Y7/1	
0350	-	A区	VIa層	欠	4	4	▲	4	I B	ch	5Y6/2	
0351	-	H7	VIb層	欠	(3)	5	5	5	I B	ch	7.5Y8/1	
0352	6399	M5	IV層	成	3・2	5	5	4	I B	ch	(10Y6/1)	
0353	-	-	表土	未?	3・4	5	5	4	I B	ch	N6/-N5/	
0354	-	I5	-	折	(3・4)	(5)	5	5	I B	ch	N5/	
0355	4112	H6	VI層	折	3	5	5	(4)	I B	ch	N5/-N2/	
0356	-	D区	-	欠	3'	5	5	4	I B	ch	(10BG5/1)	
0357	-	I7	-	成	3・2	4	2b	3b	II A	ch	2.5GY5/1-2.5GY4/1	
0358	-	I7	-	折	3	2a	1a	3b	II A	ch	5Y5/1+5Y2/1	
0359	3612	K7	V層	成	3	2b	2a	3b	II A	ch	5Y7/1	
0360	3002	I7	V層	成	3	2a	2a	3b	II A	ch	5GY6/1	
0361	7170	I7	VI層	失	2	4	△	3b	II A	ch	5Y4/2	
0362	-	I7	-	成	2	4	4	3b	II A	ch	N4/+5Y7/1	
0363	-	I6	-	成	4	5	5	4	II A	ch	5Y6/1	
0364	-	M6	-	折	2・3	4	▲	3b	II A	ch	N5/+5Y6/1	
0365	-	I7	VIb層	折	(3・4)	(2b)	▲	3b	II B	an	-	
0366	-	I7	-	成(欠)	2(s)	4	(4)	3b	II B	ch	2.5GY6/1+10YR3/2	
0367	3129	J7	V層	成	3	4	2a	3b・2a	II B	ch	2.5GY6/1	
0368	-	H7	-	成	4・3	4	4	3b	II B	ch	5Y4/1-5Y3/1	
0369	6657	M5	IV層	成	3	4	4	3b	II B	ch	2.5GY6/1	
0370	5434	L5	VI層	成	4	2a	2a	4b	II B	ch	N4/+5Y6/1	
0371	-	N5(SA4)	-	成	4・1	4	4	3b	II B	ch	10YR4/1	
0372	-	A区	IV層	折	3・4	4	△	3b	II B	an	-	
0373	-	I5	-	成	3'	1a	3a	3b	II B	ch	N5/	
0374	-	I7	-	折	3	(5)	(5)	(5)	II B	an	5Y6/1	
0375	8620	M4	VI層	欠	3(f)	1a	1a	3b	II B	ch	5Y6/1	
0376	9171	M4	VI層	失	1or3'	1a	1b	3b	II B	ch	5Y6/1	
0377	3793	I7	VI層	成	3・2	1a	4	3b	II B	ch	2.5GY5/1	
0378	-	N5(SA4)	-	折	(3)	△	(1a)	(3a)	II B	ob	-	
0379	6954	M5	V層	折	(3)	4	▲	3b	II B	ch	N3/+5Y6/1	
0380	5767	H7	VI層	未	(2)	5	(4)	3b	II B	ch	2.5Y6/1+2.5Y5/1	
0381	9371	M4	VI層	成	3	1b	1b	3b	II B	ch	N6/-N5/	
0382	-	C区	-	折	(4)	(5)	(5)	(4)	II B	ch	5Y8/1-5Y7/1	
0383	3925	J7	VI層	折	3	4	(4)	3b	III Aa	ch	N4/	
0384	4407	I7	VI層	成	3	1b	1b	3a	III Aa	ch	2.5GY6/1	
0385	4764	J6	V層	欠	3'	4	2b	3b	III Aa	ch	10Y6/1	
0386	4358	I7	VI層	成	3	4	2a	3b・2a	III Aa	ch	7.5Y6/2(+5Y4/1)	
0387	7267	I7	VI層	成	(1・)3'	4	1a	3b	III Aa	ch	N5/+N4/	
0388	3519	J6	V層	成	2	2a	2a	3b	III Aa	ch	7.5Y6/2-10Y6/1	
0389	5511	H7	VI層	成	2・3	4	1a	3b	III Aa	ch	5Y6/1+5Y3/1	
0390	6924	L4	V層	欠	3	1a	(1a)	3b	III Aa	ch	5Y7/1-5Y6/1	
0391	4645	H7	VI層	失	2	4	△	2b	III Aa	qt	-	
0392	3164	J6	V層	折	3	1a	4	2a	III Aa	ch	5Y7/2	
0393	-	B区	-	失	4・1	4	4	(3b)	III Aa	ch	5Y6/1-5Y5/1	
0394	8581	N5	V層	成	1	2a	2a	1a	III Ab	ob	-	

## 宮崎県埋蔵文化財センター研究紀要 第3集 (2015)

0395	7353	J7	Ⅵ層	折修?	(4)	1b	2a	2a	ⅢAb	ch	5GY6/1+5GY2/1	
0396	8169	I6	Ⅵ層	折	3・1	2a	(2a)	2a	ⅢAb	ch	5Y7/1	
0397	7062	L4	Ⅴ層	成	3'	(2b)	2b	2a	ⅢAb	ch	10Y7/1-10Y6/1	
0398	1577	H7	Ⅵ層	成	3'	1b	(r1b)	1a	ⅢAb	ch	10Y6/1	
0399	-	L6	-	折	1	1b	△	2a	ⅢAb	ch	5Y7/1+5Y2/1	
0400	0057	O4	Ⅳ層	欠	2	▲	2b	(2b)	ⅢAb	ch	N3/	
0401	3605	K7	Ⅴ層	折	1	△	1b	2a	ⅢAb	ch	2.5Y7/2-2.5Y6/2	
0402	3149	I6	Ⅴ層	折	3'	△	2b	1a	ⅢAb	qt	-	
0403	-	A区	Ⅳ層	折	3	△	▲	(1a)	ⅢAc	ch	5GY6/1+5GY4/1	
0404	-	I8	-	成	3・1	1a	2a	3a	ⅢAc	ch	2.5GY6/1+N4+10YR4/2	
0405	3509	J7	Ⅴ層	折?	2	1a	2a	3a	ⅢAc	ch	2.5GY6/2(+N4/)	
0406	3553	J7	Ⅴ層	成	1・3	1b	1a	3a	ⅢAc	ch	5Y7/1	
0407	1963	F9	Ⅴ層	成(欠)	3'	(1a)	1a	2a	ⅢAc	ch	7.5Y6/1	
0408	1988	F8	Ⅴ層	成	3'	3a	1a	1a・2a	ⅢAc	ch	10Y6/1+N5/	
0409	8978	N5	Ⅵ層	成	3	1a	1a	2a	ⅢAc	ch	N5/-N3/	
0410	2816	I7	Ⅴ層	成	2	1a	1a	1a	ⅢAc	ob	-	
0411	8565	N5	Ⅵ層	成(欠)	3'	1a	1a	3a	ⅢAc	ob	-	
0412	6827	L4	Ⅴ層	欠	3	▲	1a	1b	ⅢAc	ch	2.5GY5/1	
0413	7033	L5	Ⅵ層	折	3	△	2a	1a	ⅢAc	ch	5Y6/1-7.5Y6/1	
0414	2185	G9	Ⅵ層	欠?	1or4	1a	2a	3a	ⅢAc	ch	5Y6/1-5Y5/1	
0415	2929	I7	Ⅴ層	折	3	△	2a	1a	ⅢAc	ch	2.5GY5/1	
0416	7074	N5	Ⅵ層	欠	3(s)	2a	▲	3a?	ⅢAc	ch	2.5GY6/1	
0417	6475	M5	Ⅳ層	成	3	1a	1a	2a・1a	ⅢAc	ch	10Y6/1+N4/(+5Y6/1)	
0418	-	J7	-	成?	3・3	3a	2a	1a	ⅢAc	ob	-	
0419	7388	I7	Ⅵ層	折	1	▲	△	(a)	ⅢAc	qt	-	
0420	-	I6	-	折	3	2a	△	(1a)	ⅢAc	ch	5Y7/1	
0421	3465	I7	Ⅴ層	折?	(1)	△	(2a)	(3a)	ⅢAc	ch	2.5Y6/1-2.5Y5/1	
0422	4540	K7	Ⅵ層	成	3'(R?)	1a	1a	3b	ⅢBa	ch	2.5GY6/1	
0423	1921	G8	Ⅴ層	成	4	4	4	3b	ⅢBa	ch	10Y6/1	
0424	5339	L5	Ⅴ層	成	3'	4	4	2b	ⅢBa	ch	2.5GY4/1	
0425	7296	J7	Ⅵ層	成	3	4	4	3b・2b	ⅢBa	ch	N3/	
0426	8504	I7	Ⅵ層	折	3()	4	4	2b	ⅢBa	ch	5Y7/1	
0427	8188	I6	Ⅵ層	折	3	△	4	2a	ⅢBa	ch	2.5GY6/1+N3/	
0428	7246	I7	Ⅵ層	折	3・2	△	1b	2b・1b	ⅢBa	ch	5Y7/1	
0429	2453	O4	Ⅵ層	成	3'	4	4	2b?	ⅢBa	ch	5Y6/1+N5/	
0430	9005	M4	Ⅵ層	成	3	2b	4	3b	ⅢBa	ch	N2/+5Y6/1	
0431	6066	I7	Ⅵ層	成	3・3	2a	4	2a	ⅢBa	ch	N6/-N4/	
0432	7404	J7	Ⅵ層	成	3	3a	2a	3b	ⅢBa	ch	5Y7/1	
0433	-	L5	Ⅵ層	折修	3R	2b	2a	3b	ⅢBa	ch	2.5Y8/3	
0434	3001	I7	Ⅴ層	成	3'	4	4	2a	ⅢBa	ch	5Y6/1	
0435	7832	N5	Ⅵ層	成	4	3a	1a	2b・1b	ⅢBa	ch	2.5Y6/1	
0436	5642	H7	Ⅵ層	成	3・3	3a	3a	2a	ⅢBa	an	-	
0437	1152	O4	Ⅴ層	折	2	△	4	3b	ⅢBa	ch	N3/-N6/	
0438	2488	H7	Ⅴ層	成	1	4	4	2b・3b	ⅢBb	ch	5Y6/1+2.5GY6/1	
0439	-	I7	-	成	2・1	2b	4	2b・1b	ⅢBb	ch	5Y6/1-5Y5/1	
0440	-	I5	-	未?	(2)	(1a)	▲	3b	ⅢBb	ch	N6/	
0441	8010	J7	Ⅵ層	成?	2	2a	3a	2a・1a	ⅢBb	pl	-	
0442	2038	G7	Ⅵ層	失	3'	△	(2a)	2a	ⅢBb	ch	5Y7/2	
0443	2366	F9	Ⅵ層	欠	3	▲	2a	2a	ⅢBb	ch	5Y6/2+2.5GY5/1	
0444	0878	H7	Ⅴ層	成	3	2b	2b	1b	ⅢBb	ch	5Y7/2	
0445	6815	L4	Ⅴ層	折	2	4	△	1a	ⅢBb	ch	2.5Y6/2+N4/	
0446	7773	I7	-	欠	4	1b	▲	3a	ⅢBb	ch	5Y6/1-5Y6/2	
0447	-	I7	-	折	(2)	4	4	3b	ⅢBb	ch	N4/-N3/(+5Y6/3)	
0448	7867	M5	Ⅵ層	成	2	1b	2	3b	ⅢBb	ch	10Y7/1-10Y6/1+N5/	
0449	6372	M5	Ⅳ層	成	2	1a	1a	3a	ⅢBc	ch	5Y6/2+N2/	
0450	1268	G8	Ⅴ層	成	2'	(1b)	3a	3b	ⅢBc	ch	N5/-N4/(+5Y5/2)	
0451	3876	I7	Ⅵ層	欠	3	2a	2a	1b	ⅢBc	ch	5Y6/1-5Y6/2	
0452	0477	G7	Ⅴ層	成	1	1a	3a	1b	ⅢBc	ch	5Y5/2+N4	
0453	8639	M5	Ⅴ層	成(折)	3	(1b)	1a	1a	ⅢBc	ch	10Y5/1+7.5Y4/1	
0454	4776	I7	Ⅵ層	成(折)	3	1a	(1a)	1b	ⅢBc	ch	5YR3/3	
0455	3855	H7	Ⅵ層	欠	3	▲	2a	2a	ⅢBc	an	-	
0456	7352	J7	Ⅵ層	成	1・3	1a	1a	3a	ⅢBc	ch	10Y5/1	
0457	7210	I7	Ⅵ層	成	3	1b	1a	3a・1a	ⅢBc	an	-	
0458	2013	G8	Ⅵ層	折	3	2a	1a	1a・1b	ⅢBc	an	-	
0459	2531	J6	Ⅵ層	成	2・4	2a	2a	2a	ⅢBc	ch	N4/	
0460	1953	F9	Ⅴ層	失?	(3)	(2b)	(3)	3a	ⅢBc	ch	2.5Y6/3-2.5Y5/3+2.5YR4/3	
0461	5149	J6	Ⅵ層	折	4	2b	△	1a	ⅢBc	an	-	
0462	-	-	-	折	(3)	△	△	(1a)	ⅢBc	ob	-	
0463	-	L4	-	折	2	△	3a	3a	ⅢBc	ch	N4/+5Y6/1	
0464	7914	I7	Ⅵ層	欠	3	1a	▲	1a	ⅢBc	ch	10YR6/1+N2/	
0465	-	H7	-	折	2	1a	△	1a	ⅢBc	ch	5Y8/1	
0466	1292	G8	Ⅴ層	折修	2	2a	r?	1a	ⅢBc	ch	5GY6/1	

## 延岡市駄小屋遺跡出土石鐮の紹介と若干の考察(加藤)

0467	7853	M5	Ⅵ層	折	2	△	4	2a	ⅢBc	ob	-	
0468	7334	I7	Ⅵ層	成	2(s)	1a	1a	1a	ⅢBc	ob	-	
0469	9389	N4	Ⅵ層	折修?	2(R)	1a	1a	3a	ⅢBc	ch	N2/+5Y6/1	
0470	2402	H7	Ⅵ層	失・折	2	△	△	1b	ⅢBc	ch	N6/-2.5GY6/1	
0471	4283	I7	Ⅵ層	成	4・2	(2a)	1a	3a	ⅢBc	ch	N4/+5Y6/1	
0472	3747	H6	Ⅵ層	折修	1R	4	4	2b	ⅣAa	ch	5Y6/1	
0473	-	-	-	折	3fs	4	△	2a	ⅣAa	ch	10Y6/1	
0474	2464	I7	V層	折	2f	4	4	2b	ⅣAa	ch	7.5Y6/1	
0475	9047	N5	Ⅵ層	成	2f	3a	4	1b	ⅣAa	ch	2.5Y3/3	
0476	7273	I7	Ⅵ層	折	2(f)	4	4	2a	ⅣAa	ch	2.5Y6/2+3N/	
0477	6857	M5	V層	成	2f	4	4	2a	ⅣAa	ch	2.5GY5/1+5Y3/2	
0478	7783	I7	Ⅵ層	折	(4)f	4	4	2a	ⅣAa	ch	5Y6/1	
0479	5302	L5	V層	折	(4)	4	4	2a・1a	ⅣAa	ch	10Y6/1-N4/	
0480	0543	H7	V層	欠	2・4	4	2a	2a	ⅣAa	an	-	
0481	6835	M5	V層	成	3'	4	4	2a	ⅣAa	ch	10Y6/1+N4	
0482	7119	M5	Ⅵ層	折	1	△	1a	2a	ⅣAb	ch	2.5GY5/1	
0483	4292	I7	Ⅵ層	折	3'	3a	2b	4b	ⅣAb	ch	5Y7/1+5Y2/1	
0484	8987	N5	Ⅵ層	欠	3	2a	2a	1a・2a	ⅣAb	ob	-	
0485	-	Tr1	-	折?	2	1b	△	1a	ⅣAb	ch	N3/	
0486	6781	M5	V層	成	1	4	4	2b	ⅣAb	ch	2.5Y7/2	
0487	3926	J7	Ⅵ層	成	1f	1b	1a	1b	ⅣAb	ch	5Y7/1-5Y7/2+N4/	
0488	-	N5(SA4-55-2)	-	折	4	4	4	2b	ⅣAb	ch	5Y6/1	
0489	5428	L5	Ⅵ層	成(折)	3(s)	1b	2b	1a・2a	ⅣAb	ch	N4/+2.5Y6/1	
0490	8595	N5	V層	折	3	1b	△	(1b)	ⅣAb	ob	-	
0491	-	A区	Ⅳ層	折	4	△	(1a)	(2b)	ⅣAb	an	-	
0492	5674	H7	Ⅵ層	折	(4)	△	1b	(1a)	ⅣAb	an	-	
0493	-	I6	-	折	4a	1a	△	(1b)	ⅣAb	ch	5Y7/1	
0494	6383	M5	V層	折	3	△	2b	(2a)	ⅣAb	ob	-	
0495	2278	P5	Ⅵ層	折	1(or4)	3b	△	1a	ⅣAb	ch	N4/+5Y6/1-5Y5/2	
0496	-	C区	-	折	4	1b	△	2a	ⅣAb	ch	N4/+5Y7/1	
0497	8609	M4	Ⅵ層	折	2	3a	△	?	ⅣAb	ch	5Y7/1	
0498	8683	M4	Ⅵ層	成	2	2a	2a	2a	ⅣAb	ch	10Y5/1	
0499	7879	M4	V層	成	2	2b	2b	2a	ⅣAb	ch	5Y7/1	
0500	3937	J6	Ⅵ層	折	2(s)	2b	△	2a	ⅣAb	ch	5Y7/1	
0501	2024	F8	Ⅵ層	折	2	3b	△	1a	ⅣAb	ch	5Y7/1+3N/	
0502	6214	L5	Ⅵ層	折	4	△	2b	1b・1a	ⅣAc	ch	5Y6/1+7.5Y2/1	
0503	3573	J6	V層	成	3(f)	1b	2a	3b	ⅣAc	ch	2.5GY6/1+3N/	
0504	2545	J7	V層	成	3	3a	3a	2a	ⅣAc	ch	5GY3/1	
0505	0706	H7	V層	折修	3(R)	(1a)	1b	1a	ⅣAc	ch	2.5GY6/1	
0506	9266	M4	Ⅵ層	成	3(s)	2a	1b	2a	ⅣAc	ch	N3/	
0507	5147	J6	Ⅵ層	折	3f	1a	△	1a	ⅣAc	ch	N4/+5Y6/1	
0508	4220	I7	Ⅵ層	折	3	3a	△	(3a)	ⅣAc	ch	N5/-N3/	
0509	1919	F8	V層	折	3	1a	1a	1b	ⅣAc	ch	10Y6/2+2.5Y5/1	
0510	7868	M5	Ⅵ層	成	2	1a	1a	1b	ⅣAc	ch	5Y6/1+3N/	
0511	7230	I7	Ⅵ層	成	3	2a	2a	1a	ⅣAc	ch	7.5Y3/2	
0512	3718	I7	Ⅵ層	折修	2R(s)	3b	3b	1a	ⅣAc	ch	10YR6/1	
0513	4361	I5	Ⅵ層	成	1	3b	3a	1a	ⅣAc	ch	7.5YR7/3-7.5YR4/3	
0514	7348	J7	Ⅵ層	成	4(R?)	3a	1a	1a	ⅣAc	ch	2.5GY6/1+2.5Y8/3	
0515	4432	I7	Ⅵ層	欠	3s	1a	1a	2a	ⅣAc	ch	2.5GY6/1	
0516	8191	I6	Ⅵ層	折	3	3a	△	3a	ⅣAc	ch	5Y7/1+7.5GY5/1	
0517	5985	G7	Ⅵ層	失	(3')	△	(1b)	(2a・1a)	ⅣAc	an	-	
0518	-	-	表土	折	3	△	1a	(2a)	ⅣAc	ch	N5/・5Y6/1	
0519	-	I7	-	折	2	2a	△	(2a)	ⅣAc	ch	5Y7/1+N2/	
0520	-	-	-	成	3	4	4	3b	ⅣBa	ch	10Y7/1-10Y6/2+5Y7/2	
0521	9407	M5	Ⅵ層	成(折)	3	4	(4)	3b	ⅣBa	ch	5GY5/1+2.5YR3/2	
0522	-	J7	-	欠	3	4	4	3b	ⅣBa	ch	5Y6/1	
0523	2406	H7	Ⅵ層	成	4・3'	1a	4'	2a	ⅣBa	ch	2.5GY6/1	
0524	1068	G8	V層	折	4	△	(3a)	1a	ⅣBa	ch	5Y7/1	
0525	5929	H6	Ⅵ層	折	1or3'	2b	△	1b	ⅣBa	ch	5Y5/2+5Y2/2	
0526	3661	H7	Ⅵ層	折	1(n)	4	4	2a	ⅣBb	ch	2.5YR2/2	
0527	9252	M4	Ⅵ層	折	3	2a	△	2b	ⅣBb	ob	-	
0528	3625	J7	V層	成	3'	2b	2a	1b	ⅣBb	ob	-	
0529	8567	N5	Ⅵ層	折	4	4	△	2b	ⅣBb	ch	5Y7/1	
0530	2021	F8	Ⅵ層	折	(3)	△	2b	1a	ⅣBb	ch	2.5Y6/2	
0531	2152	F9	Ⅵ層	折	3・4	4	△	2a・1a	ⅣBb	ch	2.5GY6/1+2.5GY4/1	
0532	8966	N5	Ⅵ層	成(折)	4f	1a	△	2a・1a	ⅣBb	ch	10YR5/1+N2/	
0533	-	J6	-	折	4(f)	△	4	2b	ⅣBb	ch	2.5Y8/2	
0534	-	I7	-	折	3(s)	△	1a	2a	ⅣBb	ch	5Y7/1	
0535	-	A区	Ⅳ層	失	(1)	△	3a	1a	ⅣBb	ch	N4/-N3/	
0536	2765	I7	V層	折	4	△	1b	2b	ⅣBb	ch	7.5Y5/2+5Y6/1	
0537	8255	I7	Ⅵ層	折	3	3b	△	(1a)	ⅣBb	ch	2.5Y8/2	
0538	3210	I6	Ⅵ層	折	3'	2b	△	1b	ⅣBb	ch	2.5Y6/2	

宮崎県埋蔵文化財センター研究紀要 第3集 (2015)

0539	9228	M4	Ⅵ層	折	3	2b	△	2a	IVBb	ch	5Y7/2+N3/	
0540	3391	I7	V層	折	3	2b	△	(2a)	IVBb	ob	-	
0541	2871	H7	V層	折	(1)	2b	△	1a	IVBb	ob	-	
0542	-	N5(SA4-5)	-	折	3	△	1a	2a	IVBb	ch	5Y6/2	
0543	-	B区	-	折	1	△	1b	1a	IVBb	ch	N2/+N6/	
0544	-	I7	-	成	4f	2b	2b	2a	IVBb	ch	N3/+5Y7/1	
0545	-	J7	-	折	3	(2b)	△	1a	IVBb	ch	10Y5/2-10Y4/2	
0546	7157	M5	Ⅵ層	折	2	1b	△	1a	IVBb	ch	2.5Y4/1-2.5Y7/2	
0547	-	I6・I7	-	欠	2	1b	1b	1a・2a	IVBb	ch	N3/+5Y6/1	本文中ではI7扱い
0548	4785	I6	Ⅵ層	失	(2)	△	(1b)	(2a)	IVBb	ob	-	
0549	2522	J6	V層	折修	3R(f)	3a	3a	1b	IVBc	ch	5Y6/1+N2/	
0550	3231	I6	Ⅵ層	成	4・3	1b	2a	1b	IVBc	ch	5Y7/1-5Y6/1	
0551	0450	H8	V層	成(折)	3	△	2b	1b	IVBc	ch	5Y6/1	
0552	8855	N4	Ⅵ層	成	3'	1a	3b	1b	IVBc	ch	N5/+5Y7/3	
0553	8099	L5	Ⅵ層	成	3'(s)	1a	1a	2a・1a	IVBc	ch	2.5GY6/1+N3	
0554	3458	I7	V層	成	2	1a	1a	1a	IVBc	an	-	
0555	7125	M4	V層	成	3'	3a	3a	2a	IVBc	ch	10Y6/1	
0556	-	N5(SA4-55-1)	-	成	3	2b	2a	1a	IVBc	ch	10Y6/1	
0557	4463	J7	Ⅵ層	折修	3'	2b	r	1b	IVBc	ob	-	
0558	9244	M5	Ⅵ層	折	3'f	△	1b	1a	IVBc	ob	-	
0559	4495	J7	Ⅵ層	折	3'	1b	3a	2a	IVBc	ch	2.5GY6/1+7.5Y5/3	
0560	6770	M5	V層	折	3f	1a	4	2b	IVBc	ch	2.5Y7/3	
0561	-	M6	-	成	3・4	1b	2a	1a	IVBc	ch	2.5Y6/2	
0562	6886	L4	V層	折	3	2a	2a	1b	IVBc	an	-	
0563	-	I7	-	欠	1	1a	▲	1a	IVBc	ch	5Y7/1	
0564	3213	I7	Ⅵ層	折	3	△	3a	1b	IVBc	an	-	
0565	7542	O4	Ⅵ層	成	3f	2a	2a	1b・2b	IVBc	ch	2.5YR3/2	
0566	-	I7	Ⅵ層	欠	3'	1a	▲	(1a)	IVBc	ch	10YR6/2	
0567	2000	F9	V層	折?	(2)	△	△	(2a)	IVBc	sh	-	
0568	-	I7	-	折?	3	1b	△	1a	IVBc	ch	7.5YR6/1	
0569	7363	I7	Ⅵ層	成	3(n)	1b	1b	1a	IVBc	ch	5Y6/1+N2/	
0570	7360	I6	Ⅵ層	折	(4)	1b	1b	1b	IVBc	ch	5Y6/2	
報告書未掲載資料												
0657	-	A区	Ⅲ層	折	4	△	2b	1b	ⅢBa	ch	N3/	
0658	-	H7	Ⅵ層	折	3	2a	△	3b	ⅢB	ch	2.5GY5/1	失敗品?
0659	-	C区	-	失	3	1a	4	3a・3b	ⅡBa	ch	5GY6/1	
0660	-	B区	-	失	1	2a	4	3b	ⅡBa	ch	N3/	
0661	-	I7	-	失	2	△	2a	1b	ⅢB	ch	N4/	
0662	-	I7	-	欠	1	▲	3a	1a	IVBa	ch	2.5GY5/1	
0663	-	J6	Ⅵ層	折	3	2a	2a	3b	ⅢBb	ch	N6/	
0664	-	I7	-	失	2	4	▲	3b	ⅡBb	ch	5Y7/1-6/1	
0665	-	H7	-	折	2	△	1a	1a	ⅢAc	ch	5Y5/1	
0666	-	I5	-	失	2	4	4	1b	ⅢBa	ch	N6/-4/	
0667	-	A区	V層	折	2,3	4	2b	3b	ⅢBa	ch	5Y6/1	失敗品?
0668	9242	N4	Ⅵ層	折	2	△	1a	3a	ⅡBb	ch	5Y7/1-6/1	
0669	-	L5	-	失	1	1?	△	1a	ⅢBb	ch	5Y6/1	
0670	-	D区	-	失	3	△	4	2a	ⅢBa	ch	2.5GY6/1	
0671	6037	H7	Ⅵ層	折	1	△	1a	1a	ⅢBc	ch	N3/-2/	
0672	-	-	-	失	3	△	1a	3a	ⅢBc	ch	N7/-3/	
0673	-	H7	-	折	3	2b	△	1a	ⅢBc	ch	5Y6/1	
0674	-	L5(SA3)	-	折	1	1a	△	1a	ⅢBc	ch	10Y6/1+N4/	2号竪穴建物跡
0675	-	L5(SA3-57)	-	折	3	△	2a	1a	ⅢBc	ch	N6/	2号竪穴建物跡
0676	2425	H7	Ⅵ層	折	3f	▲	△	1b	ⅢB	ch	2.5GY6/1	
0677	-	I6	Ⅵ層	折	2	1a	△	1a	ⅢBc	ch	N5/	
0678	6925	L4	V層	折	3	3a	△	3a	ⅢBc	ch	5Y6/1-N5/	
0679	-	L5(SA3)	V層	折	1	1b	△	3a	ⅡBc	ch	5Y6/1-N4/	2号竪穴建物跡
0680	2110	P5	V層	折	3	△	△	1b	ⅢBc	ch	5Y5/1	
0681	-	D区	-	折	2	△	1a	3a	ⅢBc	ch	N5/	
0682	2490	H7	V層	折	3	△	2a	1a	ⅢBc	ch	N4/	
0683	-	J7	-	折	3	△	3?	1a	ⅢBc	ch	N6/-4/	
0684	-	I7(SA1)	7c 3	折	3	△	1a	2a	ⅢBc	ch	5Y6/1	1号竪穴建物跡
0685	-	I7	-	折	4f	△	△	1a	ⅢBc	ch	5Y6/1	
0686	-	B区	-	折修	3R	1b	1b	3a	ⅡBa	ch	N5/-3/	
0687	8727	N5	V層	折	3	△	3a	1b	ⅢBc	ch	5Y5/2	
0688	-	I6	-	折	3	△	2a	2a	ⅢBc	ch	N5/-3/	
0689	-	H7	-	折	3	1b	△	1b	ⅢBc	ch	N5/	
0690	-	H7	-	折	3	△	2a	3a	ⅢBc	ch	2.5GY6/1-N5/	
0691	1084	G8	V層	折	3	2b	△	3b	ⅢB	ch	N4/	失敗品?
0692	4681	I6	Ⅵ層	折修	1R	1a	△	3a	ⅢBc	ch	5Y6/1	
0693	3619	J7	V層	失	1	△	4	1b	ⅢBc	ch	5Y6/1-5/1	
0694	6649	L4	Ⅳ層	折	2f	4	△	1b	IVBa	ch	5Y5/1	
0695	-	H7	-	折	2	△	2a	1b	IVAa	ch	N7/-5/	



## 延岡市駄小屋遺跡出土石鏝の紹介と若干の考察(加藤)

0696	-	N4(SC19)	-	折	2	3b △	2a	IVAa	ch	2.5GY6/1	15号土坑
0697	-	I6	-	折	3	△? △	3b	IIAa	ch	5Y5/1	
0698	-	H7	-	折	2f	4 △	1b	IVBa	ch	2.5GY6/1	
0699	-	C区	表土	欠	2	▲ 4a	2a	IVAa	ch	10Y6/1	
0700	-	I7	VIb層	折	2(f)	△ 4a	1b	IVAa	ch	5Y6/1	
0701	-	-	表土	折	2(f)	△ 4a	2a	IVAa	ch	5Y6/1	
0702	-	B区	表土	折	3	△ △	1b	IIIBa	ch	5Y8/1+N3/	
0703	-	I5	-	折	1	1b △	3a	IIIBb	ch	10Y6/1	
0704	-	I7	-	折	2	2b △	1b	IVBb	ch	5Y7/1+N3/	
0705	6795	L4	V層	折	4	2b △	3a	IVBb	ch	2.5GY6/1	
0706	3903	I7	VI層	折	2	2a △	1a	IVBc	ch	5Y7/1-6/1	
0707	-	I5	-	折	1?	1b △	3a	IIIBb	ch	5Y6/1	
0708	-	J7	-	折	3	2a △	2a	IVBb	ch	5Y7/1+N3/	
0709	-	M5(SC5-2)	-	欠	2	3b 1b	1a	IVBa	ch	5Y7/1	5号土坑
0710	-	I7	VIb層	失	2	△ 2b	2a	IVAa	ch	2.5GY3/1-2/1	
0711	1331	G8	V層	折	3	△ 2b	1b	IVAa	ch	10Y5/1	
0712	-	I7	-	折	1	△ 1b	1a	IVAc	ch	5Y5/1	
0713	-	L6	-	折	1	3a △	3a	IIIBb	ch	5Y5/1+N3/	
0714	9353	M5	VI層	折	3	1b △	2a	IVBb	ch	10Y6/1	
0715	0992	G7	V層	折修	3	2a r5	1b	IVBb	ch	5Y6/1+N3/	
0716	1923	F8	V層	折	1	△ 1b	2a	IIIBb	ch	5Y7/2+N3/	
0717	-	A区	IV層	折	3	2b △	1a	IVBb	ch	5Y7/1-6/1	
0718	-	I7	-	折	1	△ 1b	1a	IVAb	ch	2.5GY6/1	
0719	-	N4(SI64)	-	折	1	△ 1b 並	1a	IIIBb	ch	5Y7/1-6/1	52号集石
0720	-	I7	-	折	2	1b △	1b	IVAb	ch	5Y7/1	
0721	-	-	-	折	?	△ △	?	B	ch	N5/	
0722	-	A区	IV層	折	1?	△ △	?	I A	ch	5GY7/1-5GY6/1	
0723	-	J6	V層	折	?	△ △	?	?	ch	5Y7/2	
0724	-	I5	-	欠	2?	5 5	4	A	ch	5Y7/1	
0725	1797	G8	VI層	折	?	△ △	?	B	ch	5Y7/1+N3/	
0726	0513	H7	V層	折	?	△ △	?	A	ch	10Y6/1	
0727	-	-	-	折	?	△ △	?	B	ch	10Y6/1	
0728	0439	H7	V層	折	?	△ △	?	A	ch	5Y7/1	
0729	-	I7	VIb層	折	?	△ △	?	?	ch	10Y7/1	
0730	-	I5	-	折	2?	△ △	?	A	ch	N6/-N2/	
0731	-	I7	-	折	4?	△ △	?	A	ch	2.5GY6/1	
0732	-	A区	層	折	f	△ △	?	B	ch	10Y5/2	
0733	-	I5	-	折	?	△ △	?	B	ch	N6/-3/	
0734	6086	I7	VI層	折	?	△ △	?	B	ch	5Y6/3	
0735	-	I7	-	折	?	△ △	?	B	ch	N5/-4/	
0736	-	Tr3	-	失	?	△ △	?	B	ch	2.5GY4/1	
0737	5848	I7	VI層	折	3f	△ △	?	B	ch	2.5GY6/1	
0738	-	B区	-	折	?	△ △	?	B	ch	5Y6/2+N3/	
0739	-	I7	-	折	?	△ △	?	B	ch	N6/-5/	
0740	-	D区	-	失	3(f)	△ △	?	B	ch	2.5GY5/1	
0741	-	B区	-	失	2?	△ △	?	B	ch	10Y5/1	
0742	0880	H7	V層	折	3?	△ △	?	A	ch	10Y6/1+N4/	
0743	-	N4(SC19)	-	折	2?	△ △	?	B	ch	2.5GY6/1	15号土坑
0744	-	H7	-	折	2?	△ △	?	A	ch	N5/+N2	
0745	-	I7	-	折	?	△ △	?	B	ch	5Y6/1+N3/	
0746	-	I7	-	折	?	△ △	?	A	ch	5Y6/1	
0747	5279	M6	VI層	折	?	△ △	?	B	ch	2.5GY6/1	
0748	-	H7	-	折	?	△ △	?	B	ch	5Y7/1	
0749	-	D区	-	失	3?	△ △	?	II B	ch	5Y5/2-4/2	
0750	7289	I7	VI層	折	3?	△ △	?	B	ch	5Y8/1	
0751	3089	I6	V層	折	?	△ △	?	B	ch	5Y7/1-6/1	
0752	-	I5	-	折	?	△ △	?	A	ch	5Y7/1+N3/	
0753	2797	I7	V層	折	3?	△ △	?	IIIBa	ch	2.5GY6/1	
0754	2793	I7	V層	折	?	△ △	?	B	ch	N5/-N3	
0755	-	M4(SI86)	-	折	?	△ △	?	A	ch	7.5Y5/1+7.5Y3/1	72号集石
0756	-	J7	-	欠	2	▲ ▲	?	A	ch	N4/-5/	
0757	-	-	-	折	3(f)	2a △	1b	IVa	ch	N5/	
0758	-	I7	-	折	3	△ 2a	1b	IVb	ch	10Y6/1	
0759	-	(SA c-2)	-	折	3?	2b △	1b	b	ch	5Y6/1	
0760	-	H7	-	折	2	2a △	3b	IIIAc	ch	N4/-3/	
0761	-	I7	-	折	2	△ 1a	3b	IIIBb	ch	5Y5/1	
0762	-	I7	VIb層	折	3	1b △	1b	IVb	ch	5Y5/1-4/1	
0763	-	-	VIb層	折	4	△ 1b	2b	IVAb	ch	5Y7/1+N3/	
0764	-	-	-	折	2	△ 4	3b	IIIB?	ch	10Y6/1	
0765	-	H7	-	折	2	△ 1a	1a	c	ch	5Y6/1	
0766	-	I7	-	折	?	△ 1a	1a	b	ch	2.5GY5/1	
0767	-	I7	-	折	2	△ 4	2a	b	ch	N5/	



宮崎県埋蔵文化財センター研究紀要 第3集 (2015)

0768	0308	H7	V層	折	3	△	1a	1b	a	ch	5Y7/1	
0769	^	I7(SA1-g3)	-	折	2	3b	△	1b	IVb	ch	2.5GY7/1-2.5GY6/1	1号竪穴建物跡
0770	-	I7	-	折	3	4	△	3b	IVAb	ch	2.5GY6/1	
0771	-	I7	-	折	2	△	2a	2a	III	ch	5Y7/1	
0772	-	SA1	7c 3	折	2f	4	△	2b	IVb	ch	5Y3/1	
0773	-	I7	-	折	2f	△	3b	1b	IVb	ch	2.5GY5/1	
0774	-	H7	-	折	2	2a	△	1a	IVa	ch	5Y6/2	
0775	-	I7(SA1 d-2)	-	折	2	△	△	?	IVb	ch	5Y6/1	1号竪穴建物跡
0776	-	H7	-	折	?	△	2b	?	b	ch	5Y6/1	
0777	-	H7	-	折	3	2b	△	?	IVBb	ch	N6/-5/	
0778	-	J7	-	折	3	△	1a	?	c	ch	2.5GY5/1	
0779	5534	H7	VI層	折	(2)	△	3	1a	IV	ch	2.5GY5/1	
0780	-	D区	-	折	2	2b	△	1b	IVAb	ch	10Y6/1	
0781	1871	G8	V層	折	(1or)2	1b	△	1b	b	ch	5Y6/2+5Y3/1	
0782	-	J6	-	折	3	1a	1a	1a	IVBc	ch	5Y6/1	
0783	-	D区	-	折	3	3b	△	1a	IVBc	ch	2.5GY6/1	
0784	3263	I6	V層	折	3	2a	△	2a	IVBb	ch	N3/+5Y6/1	
0785	1856	G8	V層	折	1	△	1a	1a	IIIb	ch	5Y5/2	
0786	-	-	-	折	3	1a	△	1a	IIIAc	ch	2.5GY5/1	
0787	3241	I6	VI層	折	2	△	1b	1a	IVAb	ch	5Y5/1	
0788	-	B区	-	欠	1	▲	2b	1b	IVBb	ch	5Y6/1	
0789	5777	H7	VI層	折	3	4	△	1a	IVBa	ch	5Y6/1+N4/	
0790	1859	G8	V層	折	3	△	2a	1b	IVAc	ch	N3/	
0791	-	I6	V層	折	3	△	2a	1a	IVBc	ch	(5Y7/1)+7.5Y2/1	
0792	1659	H7	IV層	折	2	1a	△	1a	IVBc	ch	N6/	
0793	-	H7	-	折	3	1b	△	2a	IVBc	ch	N5/-3/	
0794	-	D区	-	折	4	△	▲	1a	IVBc	ch	N3/+5Y4/1	
0795	8507	I7	VI層	折	2	△	1a	1a	IVBc	ch	5Y5/1	
0796	0131	H7	IV層	折	2	1a	△	2a	IVAc	ch	5Y5/2-5Y4/1	
0797	-	I6	-	折	3	1b	△	(2a)	IVBb	ch	N5/	
0798	7294	I7	VI層	折	2	△	4	1b	IVBa	ch	N5/-4/	
0799	-	J6	VI層	失	(2)	(2)	△	(1b)	IVBa	ch	7.5GY5/1	
0800	-	D区	-	折	3	△	△	?	IIIb	ch	5Y6/1	
0801	2904	H7	V層	折	4	△	△	1b	IVBa	ch	5GY6/1	
0802	-	H7	-	折	2or3f	△	4	2b	IVBa	ch	10Y5/1+7.5Y3/1	
0803	-	I7	-	折	3	(3a)	△	1(b)	IVBa	ch	10Y6/1	
0804	-	D区	-	折	3	(3a)	△	1b	IVBa	ch	2.5GY5/1	
0805	-	I6	-	折	3(f)	1b	△	1b	IVba	ch	5Y6/1+3N	
0806	-	B区	-	折	4	1b	△	2b	IVBa	ch	2.5GY5/1	
0807	3816	I7	VI層	折	3	3a	4	2a	IIIb	ch	2.5GY5/1+3N/	
0808	-	I7	-	折	3	1b	△	2a	IIIb	ch	5Y7/1+5Y4/1	
0809	7225	I7	VI層	折	4	2a	△	1a	IVBa	ch	5Y6/1+4N/	
0810	1107	P4	V層	折	3	△	(r)1a	2a	IVBa	ch	2.5GY5/1	
0811	3247	I6	V層	折	2	△	4	1b	IVBa	ch	2.5GY6/1	
0812	1906	G9	V層	折	3	4	△	2b	IVBa	ch	10Y6/1	
0813	4009	I6	VI層	折	3・4	(2)	△	1b	IVBa	ch	N6/	
0814	0653	H7	V層	折	3'	△	2b	2b	IVBa	ch	10Y6/1	
0815	-	H7	-	失	2	△	2b	2a	IVBa	ch	5Y6/1-5Y5/1	
0816	0968	G7	V層	折	3	△	1b	2a	IVBa	ch	5Y6/1-5Y5/1	
0817	4668	I6	VI層	折	2	△	1a	1a	IVBb	ch	10Y6/1	
0818	0836	H7	V層	折	3'	△	1a	1b	IVBb	ch	5Y7/1	
0819	-	M4(SI71-2)	-	折	3	(3)	△	1b	IVBb	ch	5Y7/1-5Y6/1	58号竪穴建物跡
0820	4415	I7	VI層	折	1	3b	△	1b	IVBb	ch	5Y4/1	
0821	3469	I7	V層	折	3	(3)	△	1b	IVBb	ch	5Y6/1+N2/	
0822	-	-	表土	折	3	△	2a	2a	IIIb	ch	N4/	
0823	5583	H7	VI層	折	4	2b	△	1(b)	IVBc	ch	5GY5/1	
0824	-	I7	-	折	3	△	2a	1(a)	IVBc	ch	N4/	
0825	-	H7	-	折	3	1b	△	1b	IVBc	ch	2.5GY6/1	
0826	0577	H7	V層	折	3	1b	△	1b	IIIb	ch	2.5GY6/1	
0827	7017	M5	VI層	折	3	2a	△	1b	IIIb	ch	5Y6/1	
0828	-	-	-	折	3(f)	△	1a	1b	IIIb	ch	5Y6/1	
0829	2028	G9	VI層	折	3	△	2a	1b	IIIb	ch	2.5GY6/1-5GY5/1	
0830	2885	H7	V層	折	3	△	2a	1(a)	IIIb	ch	2.5GY6/1	
0831	1048	G8	V層	折	3	▲	△	1a	IIIb	ch	5Y6/1	
0832	-	B区	-	折	3	△	1a	1a	IVc	ch	10Y5/1	
0833	-	I5	-	折	3	△	2a	1a	IVBc	ch	5Y7/1	
0834	8157	J6	VI層	折修	1R	1a	△	1a	IIIb	ch	N6/-N5/	
0835	8372	I6	VI層	折	1	1b	△	1b	IVBa	ch	2.5GY6/1+N3/	
0836	3073	I6	V層	折	3・4	△	1a	1a	IVBc	ch	5Y5/1	
0837	3598	J7	VI層	折	3(f)	1a	1b	1a	IVBc	ch	10Y6/1	
0838	2855	I7	V層	折	3	1a	(r)2a	1a	IVBc	ch	N3/	
0839	-	Tr3	-	折	3'(f)	1a	△	1a	IVBc	ch	10Y6/1	

## 延岡市駄小屋遺跡出土石鏃の紹介と若干の考察(加藤)

0840	1308	G8	V層	折	(4)	△ 1a	1a	IVBc	ch	10Y4/1	
0841	7274	I7	VI層	折	3'f	1a △	1a	IVBc	ch	10Y5/1	
0842	-	M5	VI層	折	3'	3a △	1(a)	IVBc	ch	5Y7/1+N3/	
0843	1050	G8	V層	折	4f	1a △	1a	IVBc	ch	10Y5/1	
0844	6152	I6	VI層	折	3(f)	1a △	2a	IVBc	ch	5Y6/1	
0845	-	J7	-	折修	2	1a △	1a	IVBc	ch	N5-/N4/	
0846	-	I7	-	折	3	2a △	1a	IVBc	ch	5Y6/1+N3/	
0847	-	M5	-	折	2	1b △	1a	IVBc	ch	N5-/N4/	
0848	2452	O4	VI層	折	3'(f)	(1a) △	1a	IVBc	ch	10Y6/1-10Y5/1+10Y3/1	
0849	7012	M5	V層	折	3	△ 1a	1a	IVBc	ch	5Y6/1	
0850	-	D区	-	失	3	1a △	2a	IVBc	ch	10Y5/1+5Y5/1	
0851	3518	J7	V層	折	1	1a △	1a	IVAc	ch	5Y7/1+N3/	
0852	-	-	-	折	3'	1a 1b	1a・2a	IVBb	ch	5Y5/1	
0853	-	I7(SA1-f2)	-	折	3'	△ 1a	1a	IVBa	ch	2.5GY6/1-2.5GY5/1	1号竪穴建物跡
0854	3681	I7	VI層	折	4	1b △	1a	IVBc	ch	N4/	
0855	-	I5	-	折	3	△ 4	1b	IVBc	ch	5GY6/1	
0856	-	I7(SA1 d-2)	-	折	3	2a △	1a	IVBc	ch	N5/	1号竪穴建物跡
0857	2889	H7	V層	折	4	1a △	1a	IVBc	ch	2.5GY5/1	
0858	4032	I5	VI層	折	(2)	2b △	2a	IVBb	ch	5Y6/1	
0859	-	I6	-	失	3	5 5	4	I B	ch	N3-/N4/	
0860	-	B区	-	折	2	5 5	(3a)	II B	ch	5Y6/1	
0861	-	I6	-	折	?	5 5	(3a)	I B	ch	N4/	
0862	-	N5(SA4)	-	失	1'	5 5	4	I B	ch	5Y5/1	
0863	8733	N5	V層	折	1	5 5	(4)	I B	ch	5Y5/1	
0864	8249	I7	VI層	失	3	5 5	5	I B	ch	5GY5/1	
0865	3274	I6	VI層	折	1	5 5	4	II A	ch	N5/+N3/	
0866	-	I7	-	折	3	5 5	4	I B	ch	10Y6/1+10Y3/1	
0867	-	M6	-	折	3	5 5	(3b)	II B	ch	N5/	
0868	1975	F8	V層	失	(3?)	5 5	(4)	I B	ch	10Y5/1	
0869	3044	I6	V層	失	(2)	4 (2)	3b	II B	ch	5Y6/1-5Y5/1	
0870	-	J6	-	失?	3・1	5 5	(4)	I B	ch	10Y6/1	
0871	-	J7	V層	折	3	5 5	?	B	ch	N5/	
0872	-	H7	-	折	(3)	5 5	(3b)	II	ch	5Y6/1+N3/	
0873	-	I7	-	折	2	1a △	3b	II B	ch	5Y5/1-5Y6/1	
0874	-	D区	-	折	1	5 5	(3b)	II A	ch	5Y6/2	
0875	-	I6	-	折	3or4	△ 4	3b	II B	ch	N5/	
0876	-	J6(SP5)	-	折修	3'	5 2a	?	II B	ch	7.5Y5/1-7.5Y4/1	1号竪穴
0877	-	-	-	折	2	5 5	(4)	I B	ch	5Y6/1+N3/	
0878	-	I5	-	折	2	1b △	1b	IIIAb	ch	5Y6/1+N4/	
0879	0205	H7	IV層	折	2	2b △	1b	III Bb	ch	2.5GY4/1-2.5GY3/1	
0880	-	M6	-	折	1	△ 1a	3a	IIIAb	ch	7.5Y7/1+N3/	
0881	-	D区	-	折	2	1b △	3a	IIIAb	ch	5Y6/1	
0882	-	I5	-	失	(3)	△ 2a	1a	III Aa	ch	5GY6/1	
0883	1952	F9	V層	失	2	(4?) △	2a	IIIAb	ch	5Y6/1+7.5Y2/1	
0884	1860	G8	V層	折	3'	1a △	2a	III Bb	ch	5Y6/2	
0885	-	I7	-	折	1	1a △	2a	IIIAb	ch	5Y7/1	
0886	-	J7	-	折	3	△ 2a	2a	IIIAb	ch	N4/+5Y6/1	
0887	-	J7	-	折	1	△ 1b	1b	III Bb	ch	5Y6/1	
0888	-	I7	-	折	(3?)	2a 2a	3b	IIIAb	ch	5Y6/1	
0889	-	-	-	折	3	1a △	1a	III Ac	ch	2.5GY6/1	
0890	5421	M5	VI層	折	3	1a △	1a	IVBc	ch	7.5GY6/1	
0891	-	I7	VIb層	折	3	2b △	1b	III Bc	ch	5Y8/1+7.5Y3/1	
0892	-	J7	-	折	3	1a △	3b	III Ac	ch	N5/	
0893	5453	H7	VI層	失	3	△ r 1a	1a	III Bc	ch	10Y5/1	
0894	1530	H8	VI層	折	3'	△ 2a	3a	III Bc	ch	N5-/N4/	
0895	-	D区	-	折	3	△ 1a	1a	III Ac	ch	5Y4/1	
0896	2542	K7	V層	折	3	△ 1a	3a	III Ac	ch	5Y4/1	
0897	4524	J7	VI層	失	(3)	△ △	3a	III Ac	ch	N4/	
0898	-	H7	-	失	3'	5	?	III Ac	ch	10Y6/1+N3/	
0899	5206	L5	V層	折	3	△ 2a	3a	II Ac	ch	5Y6/1+N3/	
0900	-	D区	-	折	3'	2b △	1a	III Bc	ch	N4/+5Y6/1	
0901	-	I5	-	折	3	△ 1a	3a	III Bc	ch	5Y7/1	
0902	4159	I6	VI層	折	3	1a 2a	3a	III Ac	ch	5GY5/1	
0903	-	I7	-	折	3	2a r2	3b	III Bc	ch	10Y6/1	
0904	-	L5	-	折	3	△ 1a	1a	III Ac	ch	N3/	
0905	-	I7	VIb層	折	3	2a △	1a	III Ac	ch	5Y4/1	
0906	-	I5	-	折	2	2a △	1(a)	III Ac	ch	5Y5/1+5Y3/1	
0907	1969	F8	V層	折	(2)	- -	?	III Ac	ch	10Y4/-10Y3/2	
0908	-	J6	-	失	1	△ 1b	(1b)	III Ac	ch	2.5GY4/1-2.5GY6/1	
0909	-	J6	-	折	1	△ △	?	I A	ch	7.5Y5/2-7.5Y4/2	
0910	-	-	表土	欠	2	△ 4	3b	II B	ch	5Y7/1+5Y3/1	
0911	-	J6	VI層	折	2	△ 2b	3b	III B	ch	7.5Y6/1+N3/	

宮崎県埋蔵文化財センター研究紀要 第3集 (2015)

0912	-	B区	-	折	3	△ △	(1b)	III Ba	ch	5Y7/1	
0913	-	I6	-	折	1	△ 4	3b	IV Ba	ch	10Y6/1+10Y3/1	
0914	-	I5	-	折	3'	△ 5	?	III Ab	ch	5Y6/1	
0915	-	H7	-	折	(3)	△ △	?	III Ba	ch	N6/	
0916	-	I7(SA1-i5)	-	折	2	△ 1a	3a	IV Ac	ch	10Y5/1	1号竪穴建物跡
0917	-	I7	-	折	2	△ 2a	(3a)	III Ac	ch	N5/	
0918	-	-	表土	失	3	(1a) △	△	III Ba	ch	5Y6/1+5Y3/1	
0919	-	M5	-	失?	(2)	(5) △	(3b)	III B	ch	5Y7/1+5Y3/2	
0920	-	M4(SI71-3)	-	折	3f	△ △	△	III B	ch	2.5GY6/1	58号集石
0921	-	L5(SA3)	-	折	(3)	△ △	(1a)	III Bc	ch	2.5Y7/2	2号竪穴建物跡
0922	-	I7(SA1)	7 <sup>+</sup> IV	折	3	r2a △	3b	III A	ch	N6/-N5/	1号竪穴建物跡
0923	1243	H8	VI層	折	3	△ (2a)	(3b)	II A	ch	N3/+5Y7/1	
0924	-	I7	-	欠	3'	△ (1a)	(3b)	II Bb	ch	2.5GY5/1	
0925	-	I7	-	折	(1)	△ (4)	?	III B	ch	5GY5/1+5Y7/3	
0926	2493	H7	VI層	折	?	△ △	?	B	ch	5Y3/2	
0927	-	L5(SA3)	-	折	(3f)	△ △	?	III Ba	ch	10Y6/1	2号竪穴建物跡
0928	0130	H7	IV層	折	(4)	△ △	?	B	ch	N4/	
0929	-	-	-	折	(4)	△ △	?	B	ch	N5/	
0930	1008	H7	V層	折	(3f)	△ △	?	III Bc	ch	5Y6/1+5Y5/1	
0931	0859	H7	V層	折	(3)	△ △	?	B	ch	5Y5/2+7.5Y3/1	
0932	-	J7	-	折	2	△ 2a	3b	III Ac	ch	2.5GY5/1	
0933	-	-	表土	欠	(3')	3a ▲	(3a)	II A	ch	5Y6/1+5Y3/1	
0934	-	L5(SA3)	V層	折	(3)	▲ △	?	B	ch	N6/	2号竪穴建物跡
0935	5809	H7	VI層	失	(1n)	△ 1b	3b	III Ba	ch	5Y7/1	
0936	9026	N5	VI層	折	(4)	△ △	1a	III B	ch	10Y6/1+5Y4/2	
0937	-	H7	-	折	4	△ △	3b	III Ac	ch	5Y6/1+N3/	
0938	9191	M3	VI層	折	(3)	△ △	?	III B	ch	5Y6/1+N3/	
0939	2332	G7	VI層	折	(4)	△ △	1a	III B	ch	5Y6/1+5Y3/1	
0940	-	I7	-	失	(2(f))	△ △	1b	III Ac	ch	5Y6/1	
0941	3971	H6	VI層	折	(?f)	△ △	(1b)	IV A	ch	10Y5/1	
0942	7464	I7	VI層	失	(1・3)	r4 △	(1b)	III Ba	ch	N4/-7.5Y6/1	
0943	-	I7	-	折	(2)	△ △	△	?	qt	-	
0944	3675	I7	VI層	折	(3'(s))	1b △	2a	III Ab	ob	-	
0945	6401	M5	IV層	折	(3)	(1a) △	?	?	ob	-	
0946	-	M5	-	折	(3)	△ (3a)	?	?	ob	-	
0947	3008	I7	V層	折	(3)	4 △	2b	III Ab	ob	-	
0948	-	M4(SI67)	-	失	(2)	△ (5)	?	?	ob	-	55号集石
0949	9229	M4	VI層	折	(4)	△ ▲	?	B	ob	-	
0950	2809	I7	V層	折	(3)	△ △	1a	III B	ob	-	
0951	-	D区	-	?				II B	ob	-	石錐状?
0952	-	N5(SA4)	-	折	(3)	△ △	?	III B	ob	-	
0953	2517	I6	V層	折	(3f)	△ △	?	IV B	ob	-	
0954	8185	I6	VI層	折	?	△ △	?	B	ob	-	
0955	2547	J7	V層	折	(2)	△ 2a	2a	III b	ob	-	
0956	5744	H7	VI層	折	3	2b △	?	III a	ob	-	
0957	-	-	表土	折	(3)	△ △	?	III a	ch	N3/	
0958	-	I7	-	折	?	△ △	?	III A	ch	N4/	
0959	2526	I6	V層	折	(1)	△ ▲	1a	III ba	ry	-	
0960	7799	I6	VI層	折	(3)	△ △	(1a)	B	ry	-	
0961	4387	I7	VI層	折	(3)	△ △	(a)	III B	ry	-	
0962	-	K7	-	折	(3)	2b △	2a	III b	ch	N3/	
0963	2775	I7	V層	折	(2)	(1) △	2a	IV Ab	gr	-	
0964	5130	J6	VI層	折	?	△ △	1a	III B	ch	N4/	
0965	0150	H7	IV層	折	(4)	△ △	(3b)	III B	an	-	
0966	-	L4	-	折	?	△ △	?	B	ch	N3/	
0967	6818	L4	V層	折	4'	△ 1b	1b	IV Bb	ch	2.5GY5/1-5GY3/1	
0968	8144	J6	VI層	折	3'	△ 1b	(1b)	IV Bb	ch	5Y6/1	
0969	5433	L5	VI層	折	3	△ 1b	1a	IV Bc	ch	5Y5/1	
0970	-	I7(SA1)	-	折	3	△ 1a	1b	IV Bb	ob	筋状	1号竪穴建物跡
0971	7821	N5	VI層	折	(4)	1b 1b	1a+2a	IV Bb	ch	5GY6/1	
0972	7588	P4	VI層	折	3	1a △	1a	III Bc	ch	10Y5/1	
0973	-	-	表土	欠?	3f	1a ▲	1a	IV Bc	ch	10Y6/1	
0974	1635	H7	VI層	折	3(s)	1a △	1a	IV Bb	ch	2.5GY5/1	
0975	4940	K6	VI層	折	3	△ 1a	1b	III Bc	ch	7.5Y6/1+N3/	
0976	0636	H7	V層	折	3f	1a △	1a	IV Bc	ch	5Y5/1	
0977	1648	H7	VI層	折	3	1a △	1a	IV Bc	ch	5Y6/1-5Y2/1	
0978	6597	M4	IV層	折	(1)	1a △	1a	IV Bb	ch	5Y5/1+N3/	
0979	3289	I6	VI層	折	3(f)	△ △	1a	IV Bc	ch	5Y6/1+5Y3/1	
0980	8687	M4	V層	折修	4'・3	1a r1b	1a	III Bc	ch	10Y5/1+10Y3/1	
0981	2544	K7	V層	折	3'	1a 1a	1a	IV Bc	ch	5Y5/1	
0982	5935	I6	VI層	折	(3')	1a 3a	1a	IV Bc	ch	5Y7/2+N4/	
0983	-	L5(SA3-J2)	-	折	3	1b △	1a	IV Bb	ch	7.5Y2/1+5Y4/1	2号竪穴建物跡

## 延岡市駄小屋遺跡出土石鏝の紹介と若干の考察 (加藤)

0984	5440	L5	Ⅵ層	折	3	△ △	1a	ⅢBc	ch	2.5GY5/1	
0985	8840	N5	Ⅵ層	折	(2(f))	3a 3a	1a	ⅣBc	ch	5Y6/2	
0986	3204	I7	Ⅵ層	折	3	△ 1b	1a	ⅣBa	ch	5Y5/2-5Y4/2	
0987	-	I5	-	折	3	3a △	(1a)	Bc	ch	5Y8/1+5Y7/1	
0988	8539	N5	Ⅵ層	折	3	3a △	(1a)	ⅣBc	ch	2.5GY6/1	
0989	5545	H7	Ⅵ層	欠	(4)	3b 3b	1a	ⅣAb	ch	2.5GY5/1-2.5GY4/1	
0990	5445	L4	Ⅵ層	折	2	3b △	1a	ⅣAb	ch	2.5GY5/1	
0991	8998	N4	Ⅵ層	失	(3'(s))	△ 1b	1a	ⅣBb	ch	5Y6/2+5Y3/1	
0992	8322	I7	Ⅵ層	折修	(3')	4 r1b	1b	ⅣAa	ch	5Y5/2+5Y2/1	
0993	2876	H7	V層	折	2(f)	1b △	1b	ⅣBb	ch	N4/+10Y6/1	
0994	-	-	表土	折	3'	△ 2b	3b	ⅣAb	ch	5Y6/1+N2/	
0995	-	N5(SA4)	-	折	2	△ 2b	(3b+)2b	ⅣAa	ch	N4/+10Y6/1	
0996	2728	I7	V層	折	(3(f))	2b △	1a	ⅢAb	ch	5Y5/1	
0997	9043	N5	Ⅵ層	折	3(f)R	△ 1b	2a	ⅣAb	ch	7.5Y5/1+N2/	
0998	6921	L5	V層	折	2	3a △	(3b)	ⅣAb	ch	10Y7/1+10Y3/1	
0999	-	D区	-	折	3	△ 1a	1a	ⅣAc	ch	2.5GY6/1	
1000	5265	M5	Ⅵ層	折	3	(1a) △	3a	ⅣAc	ch	5Y6/1+N3/	
1001	5540	H7	Ⅵ層	折	2(f)	(3a) 1a	1a	ⅣBc	ch	10Y5/1	
1002	8853	N5	Ⅵ層	折	3'(f)	△ 1a	1a	ⅣBc	ch	5Y5/2	
1003	8744	N4	V層	折	3	1a △	1a	ⅢBc	ch	5Y3/1	
1004	-	I7	-	折	3	△ 3a	1a	ⅢBa	ch	7.5Y2/1+7.5Y6/1	
1005	-	H7	-	折	3	1a △	1a	ⅢAc	ch	5Y3/1(+5Y6/1)	
1006	-	-	表土	折修	3	2a 5r	2a+1a	ⅢBb	ch	5Y6/2	
1007	8413	J6	-	折	3	△ 4	3b	ⅢBa	ch	10Y6/1	
1008	0107	H8	Ⅳ層	折修	(3')	(1b) r4a	1a	ⅢBa	ch	7.5Y6/1+N3/	
1009	6036	H7	Ⅵ層	折	1'	(1a) △	(1a)	ⅢBa	ch	N4/	
1010	-	D区	-	未	(3)	(5) (5)	5	I B	ch	2.5GY6/1-2.5GY5/1	
1011	3119	J6	V層	未	(3)	(5) (5)	4	I B	ch	N4/	
1012	-	I8	-	折	3	2a △	3b	ⅡB	ch	N6-N5/+2.5GY4/1	
1013	7770	I7	Ⅵ層	未	(3)	(5) (5)	(3b)	ⅡB	ch	5Y7/1+3N/	
1014	-	I7	-	未	(4)	(5) (5)	(4)	ⅡB	ch	N4/	
1015	0646	H7	V層	未	(3n)	(5) (5)	(5)	I B	ch	N4/	
1016	-	I7	-	未	(2-3)	(5) (5)	(4)	ⅡB	ob	N3/	
1017	-	I7	-	折	(3)	(5) △	(5)	ⅡA	ch	10Y4/1+7.5Y5/2	
1018	6256	L5	Ⅵ層	未?	(1)	(5) △	3b	ⅡB	ch	5Y7/2	
1019	-	-	表土	失	(1)	(5) △	(4)	ⅡB	ch	N5-N3/	
1020	-	I7	-	未	3*3	(5) (5)	(5)	I B	ch	5Y4/1	
1021	-	I5	-	未	3	(5) (5)	(5)	ⅡB	ch	5GY6/1+(2.5GY5/1-4/1)	
1022	-	I7	-	未	2*3	(5) (5)	5	I B	ch	N6-N4/	
1023	-	D区	-	未	(4?)	(5) (5)	(4)	ⅡA	ch	5Y5/1+N2/	
1024	1861	G8	V層	失	1	△ 5	5	I A	ch	2.5GY5/1	
1025	2001	F9	V層	失	(3')	5 5	5	ⅡB	ch	5Y5/1	
1026	-	I7(SA1)	7t*2	欠	1	5 ▲	5	I A	ch	N4-N5/	1号竪穴建物跡
1027	-	-	表土	未	(2)	(5) (5)	4	I A	ry	-	
1028	5702	H7	Ⅵ層	失	(2)	5 5	5	I A	ch	-	
1029	5331	L5	V層	失	(4)	5 5	4	I B	ch	10Y6/1	
1030	-	I7	-	折	(3-4)	5 5	4	ⅡB	ch	5GY5/1+5GY3/1	
1031	-	H7	Ⅵb層	成	1	5 (5)	5	I B	ch	2.5Y7/2	
1032	-	I8	-	RF?				ⅡA	ch	N3-N5/	
1033	-	J6	-	未	(2)	(2a) (未)	(3a)	ⅡA	ch	5GY6/1	
1034	5374	L5	Ⅵ層	成(未)	1'	4 4	4	I A	ob	-	
1035	-	J6	-	未	(3-1)	(5) (5)	5	I A	ch	N5/	
1036	-	Tr3	-	未	3'	(2a) △	3b	I B	ch	10Y6/1+10Y3/1	
1037	3560	J7	V層	失	(2)	(5) ?	(5)	ⅡB	ch	10Y6/1+10Y2/1	
1038	-	I5	-	未	(2)	(5) (5)	(4)	I A	an?	-	
1039	-	I7	-	折修	(3'R)	5 (5)	(5)	I A	ch	2.5Y8/2	
1040	-	L5(SA3-J6)	-	未	(3')	(5) (5)	(5)	I B	ch	N4/	2号竪穴建物跡
1041	-	L6	-	未	?	? ?	?	I A	ch	N2/	
1042	-	A区	Ⅵ層	未	?	? ?	?	I B	ch	N5/	
1043	8556	M5	Ⅵ層	未	?	? ?	?	I B	ch	2.5GY2/1+2.5GY6/1	
1044	6442	M5	Ⅵ層	未	?	? ?	?	I B	ch	5GY6/1	
1045	4210	H7	Ⅵ層	未	?	(5) (5)	(5)	I B	ch	10Y4/1	
1046	-	N4(SC19)	-	未	(1-2)	(5) (5)	(5)	I B	ch	7.5Y6/1	15号土坑
1047	4438	J7	Ⅵ層	未	?	? △	?	I B	ch	10Y6/1	失敗品?
1048	8244	I6	Ⅵ層	失	2	△ (5)	(5)	I A	ch	N2/	
1049	-	Tr3	-	失	(3)	△ (5)	(4)	I A	ch	5GY6/1	
1050	-	I7	-	未	(3)	(5) (5)	(5)	I A	ch	5GY6/1	
1051	0914	H7	V層	失	(3)	5 5	(4)	ⅡA	ch	5Y6/1-5Y5/1	
1052	-	J7	-	失	(1)	△ (5)	4	ⅡB	ch	N4-N3/	
1053	-	I7	-	失	1	r5 △	(4)	ⅡB	ch	5GY6/1	
1054	-	I7(SA1-f1)	-	未	3*2	2a (5)	3b	I A	ch	10Y7/1-10Y6/1	1号竪穴建物跡
1055	-	I7	-	折修	3R	5 5	5	I B	ch	5Y5/1	

宮崎県埋蔵文化財センター研究紀要 第3集 (2015)

1056	-	I7(SA1 b-2)	-	折	3	5	5	4	II B	ch	5Y3/1-5Y2/1	1号竪穴建物跡
1057	6988	L4	V層	折	3	1b	△	3b	II B	ch	10Y6/1	
1058	-	I7	-	折	1	4	4	3b	II B	ch	5Y6/1	
1059	-	H7	VIb層	折	3	1a	△	(3a)	II B	ch	N2/(+5Y4/1)	
1060	2259	P4	VI層	折	3	(4)	△	2b	III Aa	ch	5Y5/2	
1061	-	I7(SA1 a-2)	-	欠	3(4)	3b	▲?	1a	IVAc	ch	N4/	1号竪穴建物跡
1062	8424	I6	VI層	折	3	2b	△	1b	III Ab	ch	5Y6/1	
1063	3273	I6	VI層	未	(1・4)	3b	(未)	3a	III Ab	ch	2.5GY6/1+N3/	
1064	-	L5	VI層	折	3	1b	△	1a	III Ab	ch	N4/-7.5Y6/1	
1065	7375	I7	VI層	折	1	△	△	1a	III Bc	ch	10Y6/1	
1066	-	J7	-	折	(2)	△	4	2a	III Ac	ch	5Y7/1	
1067	-	N4(SI64)	-	折	(3・2)	△	3a	1a	III Ac	ch	5Y6/1+N3/	52号集石
1068	5427	L5	VI層	折	3	2a	△	1b	III Ac	ch	10Y6/1	
1069	-	I7(SA1 c-2)	-	折	3	2a	△	1b	III Ac	ch	N1.5/	1号竪穴建物跡
1070	9236	M4	VI層	折	(4)	1a	△	1b	IV Bc	ch	2.5Y5/2	
1071	-	H7	-	欠	4'	1a	▲	3b	III Ac	ch	N5/-N4/	
1072	3240	I6	V層	折	4'	△	4	3b	II B	ch	N5/-N4/	
1073	-	I7(SA1 溝)	-	折	3	△	4	1b	III Ba	ch	5Y4/1+5Y6/1	1号竪穴建物跡
1074	8846	N5	VI層	折修	3R	4	r2b	1b	III Ba	ch	5Y7/2	
1075	2509	I6	V層	折?	(4・3)	4	(4)	2b	III Ba	ch	N3/+10Y6/1	
1076	-	I7(SI91)	-	欠	3'	4	▲	3b	III Ba	ch	5Y6/2	76号集石
1077	-	I7(SA1 i5)	-	折	3(s)	r2a	△	1a	III Ba	ch	7.5Y6/1	1号竪穴建物跡
1078	1187	I8	V層	失	(2)	△	(5)	?	B	ch	2.5GY4/1	
1079	5344	M5	V層	欠	3	2b	▲	1a	III Ac	ch	2.5GY4/1	
1080	7869	M5	VI層	成	3	1b	2a	3a	III Ac	ch	2.5Y6/2	
1081	-	D区	-	未?	(1?)	△	(1b)	1b	III Aa	ch	10Y6/1+N3/	
1082	-	D区	-	折	4'	△	1a	1a	III Bc	ch	2.5GY6/1	
1083	2832	H6	V層	成	3	2a	2a	3b	III Ba	ch	N4/+5Y5/1	
1084	-	J7	-	失	3	▲	(2b)	(3b)	II B	ch	7.5Y7/1	
1085	-	-	-	欠	3	▲	▲	(1b)	III Ba	an	-	
1086	6698	M5	V層	折	(3)	△	▲	3b	III B	ch	5Y5/2	
1087	7835	N5	VI層	欠	3	2a	2a	3a	III Bc	ch	5Y5/1	
1088	-	K7	-	折	3	△	2a	1a	III Bc	ch	7.5Y6/1	
1089	0171	G7	IV層	折修	(3)	▲	r2a	(3a)	III Bb	ch	5Y7/3	
1090	-	I7	-	折	(4・3)	2b	△	1a	III Bb	ch	N5/	
1091	4619	J7	VI層	折	(4)	△	▲	(3a)	III bb	ch	5Y6/1	
1092	4699	I6	VI層	折	2	2	△	1a	III B	ch	5Y6/1-5Y5/1	
1093	9248	N5	VI層	折	3'	2a	△	1b	III Bc	ch	N4/+2.5Y6/2	
1094	-	J7	-	失	3'	△	▲(2a)	3b	III B	ch	2.5Y5/2-2.5Y3/2	
1095	2835	H6	V層	折	3	△	2b	3a	III Ac	ch	10Y6/1-10Y5/1	
1096	3161	I6	V層	折	3'	△	1a	1b	III Bc	ch	N2/-N5/	
1097	8435	I6	VI層	折	2or4	4	4	2a	IV Ba	ch	2.5GY5/1-2.5GY4/1	
1098	-	I7	-	欠	4(or1)	▲	4	2a	IV Ba	ch	2.5Y5/2	
1099	-	I6	-	欠	(1)	5	5	5	II A	ch	N2/+5Y4/1	未成品?
1100	-	J6	V層	折	3'	5	5	4	I A	ch	10Y6/1	
1101	-	-	表土	折	3・1	2a	5	4	II B	ch	10Y5/1	未成品?
1102	-	H7	-	欠	3'	▲	4	3b	II A	ch	N5/-N4/	
1103	6122	I7	VI層	折	3	3a	(3a)	3a	III Ac	ch	7.5Y5/1	
1104	7871	M4	VI層	成	3・1	4	4	4	II B	ch	5Y6/1	
1105	-	B区	-	未	(3)	(2a)	(2b)	(3a)	II B	ch	5GY6/1	
1106	7061	L4	V層	折	3	2a	△(2a)	3b	II B	ch	5Y6/1+5Y2/1	
1107	6968	M4	V層	成	3	2a	2a	4	II B	ch	2.5GY6/1	
1108	-	C区	-	折	3	2a	△	3b	II B	ch	5Y6/1	
1109	3040	I6	V層	成	3	2a	2b	3b	II A	ch	7.5Y4/1	
1110	-	I7	-	未	(3)	未?	4	4	II A	ch	2.5GY5/1	
1111	-	H7	-	折	2	4	△	(2a)	III Aa	ch	7.5Y2/1	
1112	8589	N5	V層	成	3'	1b	2b	4	II A	ch	5Y6/1	
1113	-	B区	-	成	3'	4	4	3b	II B	ch	5Y5/1+5Y2/1	
1114	-	I5	-	折	2	5	4	4	II B	ch	10Y6/1+10Y5/1	
1115	2752	I7	V層	欠	1	▲	2b	1a	III Aa	ch	N5/	
1116	8731	N5	V層	折	3	△	△(1a)	3a	III Ac	ch	10Y5/1	
1117	0295	H7	IV層	欠	2	1a	▲	(3a)	II B	qt	-	
1118	7129	M4	VI層	折	3'	1a	2a	3b・2b	III Ba	ch	10Y5/1	
1119	6929	M4	V層	成	3'	4	2b	3b	III Ba	ch	10Y5/1	
1120	2687	H7	V層	折	4	3a	3a	1a	IV Aq	ch	2.5GY5/1	
1121	-	I5	-	折	(4)	△	1b	(1a)	IV Aa	ob	-	
1122	6243	L4	VI層	失	3	△	1b	?	IV Ab	ob	-	

・点番号は、トータルステーションでXYZの各座標を記録して取り上げた際の番号を示す。

・0059の「SC5-1」、0079の「SC5-2」について、「-」後の数字は、他のものとは異なり遺構番号の枝番である。

・側辺形態・脚端形態の左右2つの数値については、それぞれ実測図・写真の左右に対応している。また、脚端形態の「△」は折損、「▲」は欠損を示す。

・細部形態(特に側辺形態と脚端形態)については暫定的分類であり、統一されていない部分がある。特に側辺形態については「」が付いている資料は他分類になる可能性がある。

# 「高速交通網を整備せよ ～東九州自動車道の発掘調査～ 人が動く、モノも動く、古代日向への『道』」

講師 長津 宗重  
(宮崎県埋蔵文化財センター)

日時：2013 年 11 月 10 日(日) 13:30～15:00

場所：宮崎県総合博物館

今回は、旧石器時代から近代まで、東九州自動車道関連で調査を行った主な遺跡について、細かくは資料を読んで頂ければわかるような仕組みにしました。前回の岩永哲夫さんの話しを引き継ぐ形で、私も「道」についてお話しします。

岩永さんの話の中で、宮崎大学で田中熊雄先生と知り合うことによって考古学の世界に入られたとありました。その岩永さんが宮崎県の埋文行政の最初の一人として宮崎を引っばっていくことになったのです。

岩永さんが師事された田中熊雄先生は、私が考古学を進んで行く上の一つのつながり、絆になっております。

ちょうど私の家に、後藤守一先生という明治大学の考古学の主任教授が書かれた『日本古代史の考古学的検討』という本がありまして、これを何気なく見ていったときに、その中に父親の名前が書いてありました。私の父は日南の農家の三男坊です。農家であれば長男でないとな家を継げないので、父は家を出ねばならない、ということで宮崎師範、今の宮崎大学教育学部に進みます。そのときに田中熊雄先生から考古学という学問があるということを知って、宮崎大学のあとに明治大学に編入し、岩宿遺跡の調査や登呂遺跡の調査に参加しています。ただし私の父が宮崎に戻ったときにはまだこういう埋蔵文化財の仕事がなかったもので、父は高校の先生をしていくわけですけど、そういうなかで家にこういう本があったり、あるいは父に連れられて西都原古墳群に行ったりして、そういう話を父から聞いていました。

もう一つは、ちょうど小学校 6 年の時の担任の先生が多田武利先生という方で、歴史クラブで夏休みに土を運んできて校庭の中に前方後円墳を作るとか、あるいは竪穴住居を作るなどしてありまして、小学校 6 年生の時に、作文で将来は考古学の道に進みたいということを書きました。最終的に大学で考古学を専攻して宮崎に戻ってくるときに、岩永さんに相談して宮崎県で考古学をやろうと思うのですがどうしたらいいですかと聞いて、埋蔵文化財の専門職の採用がなかったもので、先生になりなさい、ということで教員試験を受けて宮崎に戻りました。やはり宮崎で育った以上宮崎県で考古学を学びながら宮崎の歴史を解明したいということで戻ってきました。ちょうどその頃、北郷さんも専門職で採用されて、若い世代が宮崎を引っ張っていくときに前回の話



の中で岩永さんが「日本一の埋文になれ」ということを言われたと思います。

最初に、前回の岩永さんの話にはなかったところですけど、宮崎学園都市遺跡、略して「学園都市」としますが、その成果が、これからお話しする東九州自動車道につながっていきます。20代後半から30代前半の職員が8人で、学園都市の発掘調査を行いました。いま考えると非常に恐ろしいというか、20代で調査をして良かったのかと思うのですが、当時は北郷さん、岩永さんの後をついて、とにかく宮崎の歴史を明らかにするという意気込みで調査に入ったわけです。

それが東九州自動車道の調査と、どのようにつながっていくのかといいますと、学園都市の発掘調査でわからなかったことが東九州自動車道で明らかになったということであり、基本的な調査の方法として、自然科学分析の導入などは学園都市の時に体制作りはなされました。昭和55年から調査に入って23箇所うちの21遺跡の調査を行うということでした。

現在の宮崎大学農学部が建っている辺りが平畑遺跡という縄文時代の遺跡です。この学園都市発掘の大きな成果が、ATという28,000～29,000年前の始良カルデラが爆発した火山灰の上から剥片尖頭器、朝鮮半島系統の石器が出てくるということで、はじめて宮崎でも旧石器が発掘調査によって明らかになったという点があります。それからもう一つは、縄文時代早期の集石遺構、これは石蒸し料理の場に相当するのですが、そういった遺構が20～30基みついています。さらに大きいのは、竪穴住居が全部で66軒からなる縄文時代後期から晩期の集落跡がみついていることです。基本的に縄文時代の家というのは四角い形から円形の住居に変わってきました。縄文時代後期から晩期の集落の様相として、だいたい2軒から3軒で1つの集落を形成していた。そういった縄文時代後期の段階の集落の様子が明らかにされ、その中では石刀、それから岩偶という祭りの道具も出てきています。

弥生時代に入りますと、いわゆる瀬戸内系の土器が入ってくる。それから、上から見ると花びらの形をした、おもしろい形の住居跡があるということを学園都市の調査にきて初めて経験することができました。4本柱があって飛び出し部がある、ということは基本的に柱と柱の間を外側に広げていくような住居です。こういう竪穴住居跡を花卉状住居といいます。

それから周りに溝を巡らせる遺構があり、真ん中に遺体を入れる場所があれば周溝墓、墓になると考えたのですが、残念なことに宮崎学園都市では村と近接してあるということで、どうも祭りに使う遺構らしい。結局、弥生時代の墓は学園都市の中ではみつかりませんでした。

平安時代の土器では、製塩土器、塩を作る土器か塩を運ぶ土器というものが出てきました。

また、山内石塔群という中世の詣墓については、山の斜面に石塔の石がいくつか見えていて、これを全部剥ぐと、全面に五輪塔などがたくさん出てきました。最初、私が宮崎学園都市に入ったときに調査したのがこの山内石塔群です。

このように、宮崎学園都市の調査では様々な時代のものが出てきたわけです。ただし、学園都市の時にはATの下の調査も行ったのですが、29,000年より古い段階の人の営みは残念ながら捉えることはできませんでした。

そういった成果を受けて、今度は東九州自動車道の成果を述べます。東九州自動車道の遺跡はどういうふうに変わっていったのでしょうか。

発掘調査をするときには、時代・年代を決める上で火山灰が重要です。まず、平成7年から



西都～清武間の調査に入り、西都市の別府原遺跡で A T の下から礫群がみつかりまして、人の生活の営みがわかりました。

さらに平成 12 年から都農～西都間の調査に入っていくのですが、そのときから、この旧石器時代の調査をどうしたらいいのか、ということを検討しなくてはいけなくなりました。東九州自動車道の遺跡間は、都農から西都まで車で 30 分以上かかる。ですから隣の遺跡で「石器が出た」と言っても、それが A T の上なのか下なのか、あるいは小林軽石の下なのかというのをすぐに行ってみることができない。ということで東九州自動車道(都農～西都間)の調査をする上で、火山灰の上下に順番をつけようということにしたわけです。たとえばこれが A T やアカホヤの間に黒い土があれば「MB 0」・・・として、ローム層は「ML 1」とか「ML 2」とか、そういう形で上から順番に振りました。ローム層なのかブラックバンドなのか、土層に一つの基準番号をつけました。そうすることによって、たとえば AT の上から角錐状石器とかナイフ形石器が出てきて、下からはナイフ形石器が出てくるとか、古いところは霧島アワオコシとかイワオコシ。一番古いのは阿蘇 4 と呼ばれる 9 万年前の火山灰。そういうところまで掘って、人がいったいどこまで住んでいるのかということまで調査していったわけです。

東九州自動車道の路線が決まったとき、私たちはこの路線上をくまなく歩きました。縄文時代の土器が落ちていればその畑の下には縄文時代のムラがある、あるいは旧石器が落ちていればその下には旧石器のムラがある。そういう形で宮崎から大分県境までずっと歩いていき、東九州自動車道の路線沿いに印をつけて行って、用地買収が終わったところから発掘調査に入る。仕事を急ぐところについては、通常は一つの遺跡を 2 人で調査するところを 2 パーティー、4 人で行う。1 パーティー 2 人の調査員だとすれば作業員 30 人ですから、2 パーティーであれば 60 人です。一番多いときには川南町の尾花 A 遺跡の調査するときは 3 パーティーで調査員 14 名が尾花 A 遺跡を担当して、作業員さんも 100 人を超える人たちが調査にあたりました。

それまで、県内で一番古い遺跡は川南町の後牟田遺跡というところで、霧島イワオコシの火山灰、だいたい 40,000～45,000 年前よりも古い段階の石器が出ています。東九州自動車道の調査の中で、旧石器がどこまで出てくるのかを調べてきました。とくに旧石器時代の遺跡は西都～清武間はあまりなかったのですが、都農～西都間に入ると遺跡のうち 9 割近くは必ず旧石器が出てきて、そのうち 7 割くらいは必ず AT の下から旧石器が出てくる状況でした。

ちょうど都農インターチェンジの近くでは、旧石器時代の尾立第 2 遺跡や尾立第 3 遺跡、立野第 5 遺跡など、標高の高いところから旧石器が見つかっています。特に面白いのは、調査すると AT を除去した後に石器のかけらがたくさん集まってくる点です。これを私たちは石器ブロックと呼んでいます。この石器ブロック間にはナイフ形石器などが出てきています。立野第 5 遺跡では、AT の下から礫群が出ていますが、まわりに石器のブロックが回っていく状況が認められたのです。これは調査された日高優子さんが指摘されたのですが、礫群が真ん中であってその周囲に石器ブロックが集まって周りを囲む。だいたい直径 18 m 位で真ん中に何も無い広場がある。これをどういう風に考えていくかということで、ブロックがドーナツ状に囲んで入り口もある。これは人が石器ブロックで何人か作業をした跡で、一つのブロックには一つの家、テントが立っていると想定すると、真ん中に広場があって周りにテント状の建物があるといった景観が復元できるのではないかと思います。

立野第5遺跡の近くの尾立第2遺跡では、局部磨製石斧が出てきています。ただし立野第5遺跡ではATのすぐ下で出てきたのですが、尾立第2遺跡ではそれよりも下の層から出てきています。ちょっと時期差があるようです。そのあと俵石第2遺跡、これは都農町の北の方にあり、その調査を行う中で、同じく局部磨製石斧が出ており、それから俵石第1遺跡では水晶を使った石器も出ています。

それから、今度はAT火山灰が降った後になりますと、その頃には基本的には台地の上で旧石器時代のいろんな営みがあったのですが、下の方、現在の水田面などで人の営みが見えてきます。その中には尖頭器や国府型ナイフ、これは大阪や瀬戸内で頻繁に使われるサヌカイトを割って横長の剥片から作ったナイフ形石器ですが、こういうものが佐土原町、新富町、高鍋町、川南町、都農町など東九州自動車道沿線から出てくる。ただしサヌカイトではなくて五ヶ瀬川流域の流紋岩を利用して宮崎の人が作っているようです。

それからもう一つ、さきほど述べた学園都市でも出てきた剥片尖頭器が高鍋町、川南町などで出てくるようになっていきます。さらに、剥片尖頭器以外には角錐状石器が出てきています。剥片尖頭器と角錐状石器でどちらが古いかというと、前ノ田村上第2遺跡などをみると剥片尖頭器の方が古くて角錐状石器に変わっていくといった移り変わりも見えるようです。

旧石器時代の最後の段階には細石器と言いまして、鹿などの骨角に小さな黒曜石の破片をつけて一つの槍にする、細石刃と呼ばれるものが東九州自動車道の遺跡でたくさん出てきています。その中には鹿児島県の日東や熊本県の小国、大分県の姫島などいろんな地域の黒曜石を手に入れて細石刃を使っているということがわかってきました。

縄文時代になってくると照葉樹林の景観に変わってきています。学園都市の堂地西遺跡で草創期の隆帯文土器が出てきたのですが、東九州自動車道関連でも川南町の尾花A遺跡や国光原遺跡でみつかってきています。ただし遺跡の数としてはあまり数は多くないようです。その中で、塚原遺跡では草創期の土器に、ちょうど内側に粘土紐のつなぎ目に赤い顔料を塗るような祀りの器も出てきています。国光原遺跡では爪形文土器が出ています。草創期の住居跡としては、清武町の上猪ノ原遺跡で14軒ほど竪穴住居跡が見つかって県指定史跡となって非常に注目されています。縄文時代になって定住してくると竪穴住居跡がたくさん見つかるのですが、東九州自動車道の中では草創期の竪穴住居は見つかっていません。一つだけ、尾花A遺跡に竪穴状遺構と呼ばれている竪穴に近いものが一基見つかるくらいです。

縄文時代早期は石鏃が多数みつかります。それから野首第2遺跡では桑ノ木津留産の黒曜石がかなりたくさん出てきていますので、ここで石鏃を作っていたということがわかるかと思いません。

普通、縄文土器といえば縄目の文様という形で説明されますけど、南九州では貝殻で文様をつける土器が多いです。東九州自動車道でも、早期の遺跡ではどこでも貝殻の文様を付けた土器が出てきております。その中には全形のわかるような土器もあり、縄文時代早期の土器はいわゆるバケツ形をしている底部が平らな土器ということが分かっています。

それから、表面に楕円形の文様とか山形の文様をつけるような押型文という土器も入ってきています。これは基本的には日本全国にみられる土器です。こういうものが基本的には県北を中心として入ってきている。貝殻文が南九州の土器だとすればこういう押型文は北の土器だと考えて頂ければいいかと思いません。

あと東九州自動車道の成果の中で興味深いのは、柱穴を円形状にめぐらして 石を置く、環状ピット群が出ていることです。テント状の建物が旧石器時代の終わりから縄文時代の初めに見ついています。これは数が少ないです。

それから一番目立つのは、早期の貝殻文土器の時代、アカホヤを剥いだ後に礫が全面にでてる。この礫を取ると石の集まりが何箇所も出てくるわけです。尾花 A 遺跡ではこの集石遺構の跡が 243 基ということで、県内でもダントツの出方をしています。最初に穴を掘って行って下に平らな石を置いて、たとえば葉っぱでくるんだ肉を置いて焼けた礫を上置いて蒸し焼きにする。そういう料理の跡と考えられます。こういう料理法は北の方にいくと日向市の岡遺跡でも出ています。それから大分県境～北川間では、延岡市北浦町の森ノ上遺跡でも集石遺構が出てきており、全体で 168 基ありました。県北では最大規模で、さきほどの尾花 A 遺跡に次ぐ多さです。ここで面白いのは尾花 A 遺跡と違って千枚岩の平らな石を斜めに立てていく。調査者の方は花びら形の集石遺構と呼ぶほどで、県北の方では千枚岩が産出しますので、そういう近くの石を使うからそのような集石遺構になったと考えられます。

もう一つ注目されるのは、炉穴と呼ばれる遺構です。よく見ますと赤く焼けたところが出てきており、そこで火をたいて煙出しをする。これは岡遺跡や野首第 2 遺跡や尾花 A 遺跡でも出てきています。興味深いのは、小丸川を挟んで集石遺構と炉穴の分布がやや違っておまして、たとえば小丸川の南にある野首第 2 遺跡では、集石遺構が 216 基、炉穴が 192 基という形で集石遺構と炉穴がほぼ同じ数です。ところが小丸川の北にある尾花 A 遺跡では集石遺構が 248 基に対して炉穴が 4 基しかないということで、小丸川を挟んで違いが見られているようです。あるいは佐土原町の別府原遺跡では集石遺構が 48 基しかないのに炉穴が逆に 307 基みつかるなど、遺跡によってちょっと様相が違うところもあるようです。別府原遺跡では炉穴から土器が見つかりますので、もしかすると一般的に言われるような燻製だけでなく、土器を使った使用方法があるのかもしれない。

それから東九州自動車道を調査した大きな成果として、川に面する谷部のところを掘り下げた関係で陥し穴が見つかりました。28,000 年前の固い火山灰 (A T) を抜いて下のところまで掘り下げています。床面に杭を入れる痕跡等が見つかりましたので、獣が川に下りていきそうな獣道に陥し穴をに設置しているようです。

その後、宮崎ではアカホヤという火山灰が降下しています。アカホヤという火山灰は、現在の屋久島と種子島沖の海底火山からの噴出物で、これが降った後は遺跡の数がぐっと減っています。都農～西都間でいいますと、縄文時代早期には 55 遺跡ほど遺跡があったのですが、アカホヤが降った後には 7 遺跡程度と 10 分の 1 ほどに遺跡の数が減っています。それだけ大きな影響があったと考えられます。つまり、前期の段階、それから中期、後期の段階までは宮崎県内にはあまり遺跡はないのではないかとされていました。

ところが高鍋町の下耳切第 3 遺跡では、縄文時代中頃の集落が見つかりました。ここでは瀬戸内系の船元式土器が出てきており、住居跡が 40 軒みつかったということで、今までわからなかった縄文時代中期の集落の様相がわかったのです。ここではイチイガシを埋めた貯蔵穴が出ています。それから小丸川に隣接する高鍋町の野首第 2 遺跡では、学園都市の平畑遺跡と同じような時期の円形 (上から見た形) の住居跡が 46 軒ほど見つかりました。遺跡内ではアカホヤがほとんど見られなかったということで、この集落を築くとき、アカホヤを削って大規模な土木工事が行われたのではないかとされることもあります。



それから後期で特徴的なのは、祭りに使う赤い顔料を塗った土器や、あるいは北陸で作られた玉類が出てきていることで、野首第2遺跡は縄文時代後期において拠点的な集落であるということがわかりました。そこではたくさんの石斧が出てきました。打製の石斧であり、従来、土掘り具は竪穴住居を築く、あるいは土を掘る用途が考えられてきたのですが、もう一つの解釈として縄文時代の畑で使用されたのではないかとことも言われています。野首第2遺跡ではわからなかったのですが、都農町内野々遺跡では縄文時代後期の住居跡が4軒ほど見つかりました。その中の土器の表面に凹んでいる跡があり、そこをレプリカ法で調べてみると、その中にコクゾウムシやマメ類、豆のへそがみえていますのでダイズとかアズキ、そういうものをこの時期には栽培していたのではないかと、ということがわかりました。それからコクゾウムシについては、この前の岩永さんの話の中でドングリもコクゾウムシは食べるということですので、このコクゾウムシはドングリとを食べていたかもしれません。

それから、縄文時代の終わりになりますが、孔列文土器という土器が出てきています。これは学園都市の前原北遺跡でも刻目突帯文の下に孔列が付く土器が出土していますが、似たようなものが東九州自動車道の中でも点々と見つかってきています。そのころがちょうど水田稲作が始まる時期です。持田中尾遺跡では大陸系磨製石器が入っています。川南町尾花A遺跡では抉入石斧が見つかっており、確実に川南周辺にもそういう石器群が入ってきているということがわかりました。それから先程述べた花びら形の住居跡も東九州自動車道の調査でいくつかみつかってきています。

それから、学園都市でも出土した凹線文、いわゆる瀬戸内系の土器で、伊予を中心とした地域の土器群が、高鍋町や新富町などで出てきています。その中で、国富町の塚原遺跡では、鳥を表現した軽石製品や家を表した軽石製品が出てきています。ここでは大柱遺構というのが出ていまして、集落の中の端のほうに穴があって、そこに大きな棒・柱を立て、村の境界などを示すと考えられます。この軽石製品は、もしかするとその上に乗っていたものかもしれません。大柱遺構は延岡市北浦町の中野内遺跡でもみつかっています。中野内遺跡では、弥生時代の花卉状住居も出てきており、弥生時代の中頃の集落が作られた後に、土石流で覆われてしまいます。その後、集落が再び営まれるのは古墳時代の中頃になってからです。だから弥生時代の中頃から古墳時代の中頃の間はこの中野内遺跡では人が住んでない時期があったということがわかりました。

では、その人たちはどこに行ったのか。これも東九州自動車道で調査した成果なのですが、さきほど集石遺構が168基出たと紹介した森ノ上遺跡という集落では、古墳時代の前期の集落が見つかっています。そのあと古墳時代の中頃以降はここで集落を築いていないということであり、まず弥生時代、中野内遺跡に集落を築いて、土石流で埋まった後にそこにいた人々は森ノ上遺跡に行き、再び生活できるようになった古墳時代の中頃になって中野内遺跡の方に戻ったのではないかとことです。ただし、弥生時代の中頃と森ノ上遺跡までの間に一つ空白期があって、中野内遺跡から一回どこかに移動し、それから森の上遺跡、それから中野内遺跡という形で、ある一時期他の場所に移動している。ただ東九州自動車道で調査した範囲では、その時期のものは見つかっていません。ここでの集落の動きというものは、学園都市において前原北遺跡を拠点として集落が動いていくのと同様のことであろうと考えられます。

それからもう一つ、中野内遺跡では、そこで使われている縄文時代早期の土器と森ノ上遺跡の縄文時代早期の土器、それから中野内遺跡の弥生時代中頃の土器と森ノ上遺跡の古墳時代の初

めの土器を比較したとき、胎土分析の結果、同じ胎土を使っている。ただし古墳時代の中頃になって どうも違う胎土を用いていたということがわかっています。中野内遺跡で出土した須恵器は、胎土分析の結果、大阪の陶邑から来ているということもわかりました。中野内遺跡は古墳時代の中頃にヤマト王権とのつながりがあったのではないかとされるわけです。

それから、弥生時代の石包丁に関して、宮崎では 8 割近くが穴を開ける代わりに 両端に抉りを入れるものが多いようで、これは瀬戸内との関係から出てきた石包丁になるかと思えます。

さらに、東九州自動車道で大きな成果として、川南町の弥生時代の集落を調査すると、必ず焼けた家の跡が出てくるという点があります。以前は自然でも炭化するのではないかとわれていたのですが、川南町のようにどこを掘っても焼けた住居・焼失住居が出てくるということになると、これは意図的に焼かれたとしか考えられません。

東九州自動車道の発掘では、自然科学分析としてフローテーション法というのを行ってきました。たとえば竪穴住居の中の土があります。それを移植ごてとかねじり鎌で掘っていたら微細な遺物を見逃してしまいます。それを土ごと持って帰ってきて水の中で浮かして 浮いている物と沈む物を選び、それを分析する。そして、そうして出てきたものを観察した結果、弥生時代ですからイネがあるのですが、それ以外にイチイガシも食べていた。それからモモなども各遺跡で見つかるようになってきました。

それから、川南町の赤坂遺跡では周溝墓という墓がみつかっており、近くに家や建物、周溝状遺構があって、そのそばに周溝墓があります。この周溝墓というのは基本的には弥生時代の近畿地方では四角い形をしているのですが、丸い形をした周溝墓というのは東部瀬戸内、播磨あたりが中心で、そこでは必ず単体の墓になってきています。そういうものが愛媛でも出てきますので、東部瀬戸内から松山とか大分などを通じて川南町あたりにきたということです。このなかには東部瀬戸内と繋がりを持つような、装飾を施す東部瀬戸内系の壺が出てきています。それから宮崎市町屋敷遺跡では堰の跡、小河川から水を引いてきて小さなダムをつくる、そういう堰の跡もみついています。

古墳時代では、東九州自動車道周辺には川南古墳群という古墳群がありまして、その川南古墳群と谷を隔てたところにある尾花 A 遺跡の調査を行いました。ちょうど先ほどお話ししたように作業員さんが 100 人入るような大規模な調査です。ここでは 200 軒を超える竪穴住居跡が見つかっています。この尾花 A 遺跡の北の西別府遺跡の調査では、鏡の一部が出てきました。もしかすると弥生時代の終わりの破鏡と呼ばれる前漢、後漢の鏡を住居に捨てたものかと思って掘り進んでいったら、丸い完全な形で、中国の鏡ではなくて日本製の鏡だったわけです。その鏡は瀬戸内地域の方でかなり出てきていますので、瀬戸内とのつながりで宮崎の方へきているのではないかと。ただ場所的に言は、弥生時代の中頃から古墳時代の初めの大規模な集落から離れたところにある建物跡なのでマツリとか特殊な建物の可能性があるかと思われれます。

それからもう一つ、古墳時代はじめ頃ですが日向市板平遺跡で調査をしていたところ、車輪石が出てきました。これはオオツタノハの貝輪を緑色の石で置き換えた石製品で九州でも 9 例しかない珍しいものです。ちょうど 4 世紀代の前期古墳からしばしば出てきます。付近には富高 2 号墳など古墳時代前期の古墳がありますので、そういう首長がもらったものがある段階で分割され板平遺跡に廃棄されたと考えられます。

それから古墳時代の終わり・終末期、西都原古墳群ではちょうど鬼の窟古墳が築かれる頃に、高鍋町の下耳切遺跡では鬼の窟古墳と同じように周りを二つの溝が巡る古墳がみつかっています。埋葬主体部には木の棺の跡が四つあることがわかりました。墳丘はももとの古墳時代の面のの上に、溝から掘った土などを上げて2 mくらいの高さの墳丘を築いてそこに木棺を置いたこともわかりました。また地下式横穴墓がみつかっており、地下式横穴墓としては一番北の端になります。そこからは勾玉や金メッキを施した耳飾、馬具などが出土しています。『日本書紀』には「駒なら日向の駒」ということが書かれています。『延喜式』には「野波野」「堤野」「都農」という3つの馬の牧が日向国に置かれたと書かれていますので、そのような牧の前段階にあたるものが下耳切第3遺跡の周辺に展開していたのではないかと思います。

それから、先ほど古墳時代になると四角い住居跡になるとお話ししましたが、下耳切第3遺跡では、住居の真ん中に穴を掘って素焼きの土器を据え付け、周りから火をたく、あるいはこの中で火をたく、この上に鍋を置く、そういった埋設炉が出ています。ガスコンロを真ん中において鍋をそこに持って来る、そういうものなのかもしれません。一方、それとあわせて竈も作られており竈と土器を据え付けた炉が一つの住居の中で使われている場合もあり、ということは竈で煮炊きした鍋を真ん中に持ってきて、この周りで囲炉裏としてここで食をしていた、ということも考えられるわけです。下耳切第3遺跡では最初は古墳が築かれ、そのあとに住居が作りますので、生活しているすぐそばに古墳が見える。そのような古墳時代の終わり頃の景観があったと考えています。

それからもう一つ、ちょうど西都のインターチェンジから一ツ瀬川を渡って新田原の台地上っていくところが宮ノ東遺跡で、弥生時代の中頃から集落を構えていって、7世紀～8世紀にたくさんの集落を構えていました。ここでは円面硯という硯が出しています。また役人が用いた石帯と呼ばれる飾りも出ています。ということになると一ツ瀬川近くのを使うという水運の要衝の地に宮ノ東遺跡という古代における集落がつくられたのではないかと考えられます。また、下耳切第3遺跡の北側に老瀬坂上第3遺跡という遺跡があります。そこからは奈良時代の蔵骨器が出土しており、焼けた骨がこの中から出てきます。下耳切第3遺跡の集落から谷を挟んで北側、集落と違うところに墓が見える。そういう位置関係で古代における墓が作られた。ここに硯も出していますのである程度限られた階層の人になるかと思っています。

鎌倉・室町時代になると、川南町の銀座第1遺跡や前ノ田村上第1遺跡など、ちょうど現在の県道(広域農道)に隣接するところの遺跡で、半町とか一町の方形に囲まれた中に屋敷建物が建つという方形区画の屋敷地がみつかっています。いわゆる古代の官道に沿っていたのでは、と考えましたが、東九州自動車道において調査した限りにおいては、古代の官道の跡は出てきません。現在の広域農道の下に古代の官道が眠っている可能性があるということです。

学園都市では車坂城跡や西ノ城跡と呼ばれる城があり、一部しか調査できなかったのですが、東九州自動車道が日向市の塩見小学校と塩見城跡の主郭に挟まれたところを通るということで、塩見城跡の発掘調査を行いました。ここでは全面的に、東九州自動車道が通るところすべて剥ぎ取りました。その結果、曲輪の跡の間々にV字状の溝が掘られ、敵から攻めにくい構造をしていることがわかりました。一番奥には「水の手」といいますか、井戸の跡が見つかりました。それからこの破却された時の溝の中からキリシタン遺物が出ています。



このように、今現在の東九州自動車道、これが未来へつなぐ道だとすれば、その道の下を掘って出てきた土器、あるいは石器から古代の「道」がいろいろわかってきたということになるかと思えます。

東九州自動車道の調査では、清武町から北では必ず旧石器が出てきます。また新富町から北では 28,000 年前の火山灰の下で 7 割くらいの遺跡で旧石器が出てきます。旧石器時代の人々は 2～3 家族で移動していますので、それだけ人々が移動していたからこそ、東九州自動車道路線内のいたるところで見ついているのだと思います。

縄文時代の草創期については 3 遺跡程度で、これは学園都市の頃とあまり状況は変わっていません。縄文時代早期は、どの遺跡をみても集石遺構が出てきており、これは学園都市と同じ状況です。その中でも一番大きな遺跡は、集石遺構 243 基が検出された尾花 A 遺跡や 210 基の野首第 2 遺跡、168 基の森ノ上遺跡などで、これらは、長い期間にわかって早期の人たちが住む拠点的な集落です。それ以外は、だいたい 20 基～30 基程度が標準的なムラかもしれません。前期とか中期については学園都市と同じような状況だったのですが、先ほど説明しましたように下耳切第 3 遺跡で中期の集落が出てきており、これが大きな東九州自動車道の成果になると思います。それから後期になってきますと、野首第 2 遺跡で竪穴住居跡が 46 軒、大規模な工事をするくらいの集落がみられることがわかりました。

弥生時代の前期から中期にかけてはあまり遺跡がないようですが、中期後半の瀬戸内系の土器が入る頃から日向において集落の形成がはじまり、弥生時代の後期後半から古墳前期までの集落が増えてきます。その中で、中野内遺跡から森ノ上遺跡という小さな地域の中でのムラの移り変わりがわかりました。

古代については宮ノ東遺跡、下耳切第 3 遺跡で大きな集落が営まれていましたが、それ以外ではあまりみられないようです。

中世末から近世では、塩見城跡の調査成果があります。これは学園都市における車坂城、今江城の調査を踏まえ、宮崎県において初めて大規模に展開した調査であるということになるかと思えます。

そのように、学園都市の遺跡と東九州自動車道の遺跡を見ていただければ 特に旧石器時代の遺跡がかなり出てきており、全国的に有名な旧石器時代の標準的な編年である関東地方・武蔵野台地の編年と並ぶような旧石器時代の編年が、この宮崎の中で火山灰を鍵層にして進んだわけで、これをどう評価していくかということになるかと思えます。

それから自然科学分析、フローテーションやレプリカ法、樹種同定、放射性炭素年代法によって細かな年代を決めていく、あるいは古環境、植生を復元していくという形で、考古学の手法以外の自然科学分析の導入も行ってきました。それらを踏まえて、旧石器時代から中世・近世までの県境～清武の歴史をどこまで復元していくのか、それが今後わたしたちに与えられた課題です。

時間をオーバーしましたので 終わりたいと思います。どうもありがとうございました。





図1 東九州自動車道(県境～北川間)路線内の遺跡分布(国土地理院発行5万分1地形図を利用)





図2 東九州自動車道(日向～都農間)路線内の遺跡分布(国土地理院発行5万分1地形図を利用)





図3 東九州自動車道(都農～西都間)路線内の遺跡分布(国土地理院発行5万分1地形図を利用)





図4 東九州自動車道 (西都～清武間) 路線内の遺跡分布 (国土地理院発行 5 万分 1 地形図を利用)



表1 東九州自動車道路線内の遺跡一覧

番号	遺跡名	市町村名	番号	遺跡名	市町村名	番号	遺跡名	市町村名
大分県境～北川間			都農～西都間			都農～西都間		
1	海舞寺遺跡	延岡市	52	尾立第5遺跡	都農町	106	牧内第2遺跡	高鍋町
2	市之串遺跡		53	立野第5遺跡		107	音明寺第1遺跡	新富町
3	中野内遺跡		54	立野第1遺跡		108	音明寺第2遺跡	
4	野地久保島遺跡		55	立野第2遺跡		109	東畦原第1遺跡	
5	森ノ上遺跡		56	立野第3遺跡		110	東畦原第2遺跡	
6	カラ石の元遺跡		57	立野第4遺跡		111	東畦原第3遺跡	
7	家田古墳群・家田城跡		58	八幡第1遺跡		112	西畦原第1遺跡	
門川～日向間			59	八幡第2遺跡		113	西畦原第2遺跡	
8	分蔵遺跡	門川町	60	上ノ原遺跡・北分遺跡		114	上新開遺跡	
9	板平遺跡	日向市	61	銀座第1遺跡		115	一丁田遺跡	
10	塩見城跡		62	銀座第2遺跡		116	勘大寺遺跡	
11	中山遺跡		63	銀座第3A遺跡		117	永牟田第1遺跡	
12	権現原遺跡		64	銀座第3B遺跡		118	永牟田第2遺跡	
13	池ノ下遺跡		65	登り口第1遺跡		119	尾小原遺跡	
14	大谷尻遺跡		66	登り口第2遺跡		120	向原第1遺跡	
15	馬込遺跡第1地点			67	山ノ口遺跡		121	向原第2遺跡
16	馬込遺跡第2地点		68	谷ノ口遺跡		122	藤山第1遺跡	
17	岡遺跡・平尾遺跡		69	市納上第1遺跡		123	藤山第2遺跡	
18	中ノ別府第2遺跡		70	市納上第2遺跡		124	宮ノ東遺跡	西都市
19	中ノ別府第3遺跡		71	市納上第3遺跡		125	宮ノ前遺跡	
20	金ヶ浜第2遺跡		72	市納上第4遺跡		西都～清武間		
21	金ヶ浜第3遺跡		73	市納上第5遺跡	川南町	126	蔵向遺跡	西都市
22	坂元第2遺跡	日向市	74	虚空蔵免遺跡		127	大辻屋敷遺跡	
23	坂元第3遺跡		75	赤石・天神本遺跡		128	小田河原遺跡	宮崎市
24	日平山ノ口第2遺跡		76	天神本第2遺跡		129	平田迫遺跡	
25	日平山ノ口第3遺跡		77	大内原遺跡		130	別府原・西ヶ迫遺跡	
26	向原中尾第1遺跡		78	中ノ迫第1遺跡		131		
27	向原中尾第2遺跡		79	中ノ迫第2遺跡		132	上ノ原遺跡	
28	向原中尾第3遺跡		80	中ノ迫第3遺跡		133	下屋敷遺跡	西都市
29	向原中尾第4遺跡	81	中ノ迫第4遺跡		134	梅ヶ島遺跡		
30	向原中尾第5遺跡	82	前ノ田村上第1遺跡		135	待居廻遺跡		
31	向原中尾第6遺跡	83	前ノ田村上第2遺跡		136	長蘭原遺跡		
32	長野遺跡	84	赤坂遺跡		137	上ノ迫遺跡		
33	舟川第2遺跡	85	国光原遺跡		138	上松尾遺跡		
34	舟川第3遺跡	86	湯牟田遺跡		139	松元遺跡		
35	舟川中原遺跡第1地点	都農町	87	西ノ別府遺跡		140	井手口遺跡	国富町
36	舟川中原遺跡第2地点		88	尾花A遺跡		141	木脇遺跡	
37	内野々遺跡		89	岳鳩遺跡		142	塚原遺跡	
38	内野々第2遺跡		90	崩戸遺跡		143	中別府遺跡	
39	内野々第3遺跡		91	野首第1遺跡		144	倉岡第2遺跡	
40	内野々第4遺跡		92	野首第2遺跡		145	町屋敷遺跡	
41	平山下原遺跡		93	南中原第1遺跡		146	北田城跡	
42	西ノ郡第2遺跡	94	南中原第2遺跡		147	迫内遺跡		
43	木戸平第2遺跡	95	老瀬坂上第3遺跡		148	野添遺跡		
44	木戸平第1遺跡	96	下耳切第3遺跡		149	生目村古墳周辺		
45	俵石第2遺跡	97	北牛牧第5遺跡	高鍋町	150	内宮田・柳迫遺跡	宮崎市	
46	俵石第1遺跡	98	唐木戸第1遺跡		151	本城跡		
都農～西都間			99	唐木戸第2遺跡		152	白ヶ野第2・3遺跡	
47	朝倉遺跡		100	唐木戸第3遺跡		153	上の原第1遺跡	
48	尾立第2遺跡	都農町	101	唐木戸第4遺跡		154	権現原第2遺跡	
49	朝草原遺跡		102	唐木戸第5遺跡		155	権現原第1遺跡	
50	尾立第3遺跡		103	小並第1遺跡		156	杉木原遺跡	
51	尾立第4遺跡		104	小並第2遺跡		157	下星野遺跡	
			105	牧内第1遺跡		158	永ノ原遺跡	



表 2 東九州自動車道路線内の遺跡が属する年代

時代	東九州自動車道路線内の遺跡															この頃日本は…	この頃世界は…					
	塚原	木脇	下屋敷	別府原	宮ノ東	東畦原第1	下耳切第3	野首第2	尾花A	赤坂	中ノ迫第1	銀座第1	尾立第2	内野々	舟川第2			塩見城跡	板平	森ノ上	中野内	
旧石器時代	後期 旧石器時代																				岩宿遺跡 (群馬県) 始良カルデラ (錦江湾・桜島) の大噴火	
	草創期	● <sub>2</sub>							●												土器の出現	
縄文時代	早期	● <sub>11</sub>	● <sub>83</sub>	● <sub>6</sub>	● <sub>48</sub>	● <sub>4</sub>	●	● <sub>216</sub>	● <sub>243</sub>		● <sub>2</sub>	● <sub>8</sub>	●	● <sub>52</sub>	●	●	● <sub>36</sub>	● <sub>168</sub>	● <sub>1</sub>	上野原遺跡 (鹿児島県) 気候の温暖化 鬼界カルデラ (鹿児島島の南、薩摩硫黄島あたり) の大噴火	農耕・牧畜の開始	
	前期								●													
	中期							● <sub>31</sub>		●				●						三内丸山遺跡 (青森県)	ギザの三大ピラミッド (エジプト)	
	後期					●				● <sub>46</sub>		●		●				●				
	晩期		●			●		●	●						●			●		東日本に亀ヶ岡文化が栄える 稲作の伝播		
	終末期																					
弥生時代	前期	●	●																	青銅器・鉄器の使用が始まる	仏教成立	
	中期	●	●			●											● <sub>1</sub>	●	吉野ヶ里遺跡 (佐賀県)	秦の始皇帝中国統一		
	後期		●			●			● <sub>23</sub>	◎ <sub>8</sub>	◎ <sub>1</sub>	● <sub>23</sub>	● <sub>1</sub>	●	● <sub>1</sub>			● <sub>5</sub>	倭国大乱			
古墳時代	前期	◎ <sub>1</sub>	●									● <sub>154</sub>					● <sub>8</sub>	● <sub>11</sub>	前方後円墳を造り始める 大和古墳群 (奈良県) 西都原古墳群 (宮崎県) 百舌鳥・古市古墳群 (大阪府) 九州で磐井の乱	中国で魏・呉・蜀の三国が成立 広開土王の碑文		
	中期		● <sub>43</sub>			● <sub>19</sub>			● <sub>34</sub>			● <sub>22</sub>					● <sub>7</sub>	◎ <sub>6</sub>				
	後期					● <sub>108</sub>			●								● <sub>3</sub>	◎ <sub>12</sub>		隋の成立		
飛鳥時代	約1400年前						◎ <sub>2</sub>												冠位十二階の制定 大化の改新 藤原京	唐の成立		
奈良時代	約1300年前								●										平城京に都を移す 古事記・日本書紀の編纂 聖武天皇、東大寺に大仏建立			
平安時代	約1200年前		● <sub>1</sub>			● <sub>91</sub>													平安京に都を移す 院政の開始			
中世	約800年前	水田	◎	●	●	◎			●		● <sub>19</sub>	●				●	● <sub>9</sub>		鎌倉幕府の成立 室町幕府の成立 戦国時代/秀吉の全国統一	マルコ=ポーロ『東方見聞録』		
	約400年前				●	◎		●	●		●	●	●	●		◎	● <sub>10</sub>	●	関ヶ原の戦い 江戸幕府の成立 享保の改革			
近代	約150年前																		明治政府の成立 西南戦争			
現代																						

※上図は、遺跡の主要な時代を示したものであり、各遺跡から出土した遺構や遺物のすべての時代を網羅したものではありません。



## 「考古学に何ができるか ～これからの遺跡の活用～」

講師 北郷 泰道  
(宮崎県文化財課)

日時：2014 年 2 月 16 日 (日) 13:30～15:00

場所：宮崎県総合博物館

こんにちは。今日は多くの方においでいただき、感謝いたします。いま長津さんの方からも話がありましたが、先週、世界文化遺産としての古墳を考えるというシンポジウムを開催しました。その副題としまして、「神話のふるさとの古墳文化」ということで、神話と古墳文化というものがどういう具合に結びつくものなのかという点を、一緒に考えていきたいということで実施したわけですが、時間の割にはパネラー・パネリストが6名と多く、論議が深まるその直前までというところで終わってしまいました。来年度以降、続けていろんな形で情報発信をしていきたいと思っておりますので、また耳を傾けていただき、そしてご一緒に考えていけたらなと思っております。

今日は「考古学に何ができるか」、「これからの遺跡の活用」というテーマなのですが、お手元の資料にありますとおり、私は『日本歴史』という専門雑誌の2011年1月号に「景観としての古代日向の都、西都」という題で文章を書きました。「史跡景観の保存と活用」という特集です。今日、お話をする内容のキーワードは、この中にすべて含まれています。史跡というのは一体何なのか、これは歴史的な所産・資産ということを表しますけれども、「景観」という概念とあわせて位置づけられているものは一体、何だろうか？そして保存と活用ということについても、保存とはいったい何なのか、そして活用とはどのように考えていけばよいのか？ということすべてはこの中に含まれています。この「みやざき発掘 100 年」の連続講座の中でも西都原古墳群の大正年間の発掘調査から始まって学園都市遺跡群の発掘調査、それから東九州自動車道の発掘調査など年次的に追う形になっており、そのような調査の中で多くの資料が蓄積されてきました。それこそ30年以前の宮崎県の考古学の状況からすると、大きく様変わりをして、内的に相当量の蓄積ができた。その蓄積を踏まえて、未来社会に向かって考古学とはどういう役割を果たすべきなのか、果たせるのか、といったことが問題であるわけです。

さて、その景観についてですが、先日、2月11日に鰐塚山に雪が降ったというニュースがテレビ等でも取り上げられていました。翌日、都城市に行く途中で車を止めて、写真を撮りました。この鰐塚山の「鰐」とは何なのか、という点についてですが、ご存じのように『古事記』・『日本書紀』、要するに神話に絡む地名なのです。山幸彦彦火火出見尊の奥さんになられた豊玉姫が出産をする。その時に元の姿に戻って出産するから、見ないようにと伝えたのですが、それを覗いてしまうという神話が語られています。元の姿というのが鰐、要するに鮫の古い言葉、古語です

が、それにちなんで鱈塚山と呼ばれている。そういう神話伝承の舞台となった場所というのを最近いろいろ調べていると38箇所くらい数えあげることができます。

法律的な用語になりますが、文化財保護法の「史跡・名勝・天然記念物」の中の「史跡」というのは歴史的な所産の遺跡であり、「名勝」というのが庭園や自然地形などの景観の優れた場所ということになっています。宮崎県の国の名勝指定については、実は戦前の昭和16年までしか指定がありません。何件、宮崎県内に名勝地指定があるか、ご存じですか？（聴衆から：「3件」）そうですね、高千穂峡が名勝及び天然記念物ということになっていますので、それで名勝を含むのは4件ということになって、名勝だけだと今ご指摘されたように、3件ということになります。妙国寺庭園、比叡山と矢筈岳、もう一つが尾鈴瀑布群となります。この中でも神話伝承を持つ場所は、高千穂峡もそうですけど、尾鈴の瀑布群も、矢研の滝はいわゆる神話伝承の舞台になっている。そういう場所にあたります。

この鱈塚山を日頃、私たちは日常的に見ているわけですが、たまたまというか、雪が積もった姿を見ていると、日頃と違う見方が見えてくる。いわば本当にそこに神話が息づくような感覚というのを私自身は覚えたわけです。それで車を止めて、写真を撮ったのですが、実はもうひとつ、宮崎市の田野町に国の史跡に指定されている本野原遺跡という遺跡があります。縄文時代の後期の集落で、南九州には全国的に有名な青森県の三内丸山遺跡などのような大きな縄文時代の集落はないと考えられていた中で、本野原遺跡は非常に大規模な、中央の広場を囲んで家が環状に並ぶ、環状集落と呼ばれる遺跡として注目されました。早川和子さんという私の高校時代の同窓生がイラストレーターをしていて古代関係のイラストを描いています。奈良文化財研究所や国立博物館などのイラストは早川和さんが描いたものです。彼女はイラストを描くときに実際に現地に立って、その周りの景観を含めて見ることでイラストを描きたい、と語っていて、その姿勢が全国の考古学、古代史の方々からも支持されて、全国各地でそのイラストが使われています。この本野原遺跡も、その集大成ともいえる本を4年程前に刊行した時に、宮崎県の代表的な遺跡として入れましょう、ということになり、私がコメントを書き、一緒に現地に立ちました。環状集落の中で、広場がすり鉢状に窪み、一番中心に石が据え置かれており、その場が、ひとつの祭祀の場であったらと考えられます。彼女と話をした時にふっと見上げると、この鱈塚山が見渡せる場所となっている。おそらくは縄文時代の本野原遺跡の住人たちも集落の真ん中に神が宿る石を据え、そして、そこにおいて祭りをする。ふと見上げてこの鱈塚山を見ていただろうし、そこは神が宿る山として考えられていたのではないだろうか。そこではそういうイメージについて話をしました。彼女は鱈塚山を入れて、村の景観をイラストに描いたわけです。今はテレビの電波塔があって、現代の情報伝達の非常に重要な場所となっているけれども、その原始・古代という時代においても、この鱈塚山というのは古代人の精神生活の重要な情報の磁場といえますか、磁力を持つ場所として考えられていたのではないだろうか、そういうふう感じたのです。

やはり、そういった日頃と違う景色を見ると、特に精神性、神話性といったものを強く感じるなど思えたのです。問題は、今まで戦後の社会は利便性を追求して、住みよい社会を作っていきましょう、そのために道路を通して住宅を建設して云々、という具合に進んできました。そういう時代というのは「開発 対 保護」というような形で、これまでの宮崎学園都市や東九州自動車道等の発掘調査の過程でもそうだったのですが、開発を優先するのか、それとも保護が大事なのか、というような、いわば対立的に考えられていた時代があります。そして、時に誤解といいま

すか、基本的に大きな誤解だと思いますが、発掘調査によって工事が遅れる、工事が遅れると困る、というような話で、遺跡が出てきても目をつぶるというようなことが、今から 30 年より前の時代にはあったわけです。そこを私たちは県の関係であれば開発部局と協議をして、少なくとも発掘調査をする期間をきっちりと設けた上で計画を立てることが基本的な考え方なのだ、という点を理解してもらって今日に至っているのです。そういうある種のやっかい者みたいに考えられていた時代がある。しかし一度、遺跡が失われると、歴史の証人を失う事になる。ここでは二度と歴史というものが復元、再現することができなくなってしまう。そのことの大きな損失というものを、やはり日本人全体としても、なかなか思い至らない、そういう時代があったことも事実だろうと思います。

ですから、近未来的な社会というものが、私たちにとっての将来像だと考えられていた時があるのですが、しかし振り返ってみると、本当に人工物に囲まれた社会というのが、私たちの望むべき、私たちが子どもたちに残すべき社会なのか、というと、どうも違うだろうと考えられるようになったわけです。要するに、その中で遺跡単体を考えるのではなくて、今回のキーワードでも上がっているように、景観というものが、人間の生活にとって非常に重要な役割を果たすのだ、ということが問われてきたのです。ですから、この『日本歴史』についても、そういう要請の中で、そういう問題意識の中で特集が組まれているということ、この表紙の中からも読んでいただきたいと思うわけです。ぜひ、興味をお持ちの方は、この本を探していただいて、他の所も読んでいただくとよろしいかと思います。そして平城京や京都の遺跡の保存と整備など、そうそうたる全国の史跡が取り上げられている中で、宮崎県としての代表的なもの、象徴的なものとして、西都原を中心にした場所を取り上げようということで執筆したのであります。

具体的な話を含みながら、そこに書いた事を少し追っていきたいと思います。

博物館というのは、人類の知的財産のアーカイブ、集積地・集積路であると概念規定することができます。博物館は、展示だけが主目的ではなくて、その中に収蔵されている資料、自然科学を含めた資料類を蓄積していくことが重要で、それが博物館の役割であります。人類の知的財産を考えたとき、自然のもの、例えば草・木とかもそうですけど、人間が認識する事によって、初めて存在するわけです。どんな雑草も 1 つ名前がついています。けれども、今まで認識されていなかったものが発表されると、新種の植物が発表された、新種の動物が発表されたと伝えられるわけで、結局、自然のものも人間の認識を通さなければ、存在しえないということです。要するに、博物館がまず行うことは分類することである。収集して、分類する、それが認識の 1 つの過程になるわけですが、単なる人工物、あるいは、人間の手によって生み出されたものではないものも、人間の認識を通して初めて理解され、存在する事ができる。そういう意味で人類の知的財産のアーカイブという位置づけを持つだろうと思います。

博物館の考え方として、1 つは野外博物館という、文字どおりフィールドを博物館として想定できるということが挙げられます。西都原古墳群についても、現在までに色々な形で整備をしてきました。文字どおり、それはフィールドミュージアムという野外の博物館として位置づけられているわけです。

もう一つ、似たものとして遺跡博物館という考え方があります。これはサイトミュージアムとも呼ばれます。サイトというのは、遺跡という意味です。遺跡に隣接して、遺跡を見学する、遺跡を理解するのに必要な情報を提供できる。そういう博物館が遺跡博物館ということになるので



すが、西都原古墳群の場合で言えば、西都原考古博物館という場所が遺跡博物館としての位置づけを持っていることになります。ですから、単純に博物館といっても、西都原における1つの博物館の意味というのは、こういう複合的な野外博物館というものと、サイトミュージアムすなわち遺跡博物館というものを兼ね備えた、そういう位置づけを持つものだという具合に考えていいと思います。

そこで問題になるのが、その遺跡だけを見るのではなくて、そこにある人々の暮らしとか、自然環境、そして、西都原古墳群だけを見ても理解できないわけですから、その周辺史跡の周り方を含めて考えていこう。そして人々の暮らしということになると、西都市街地を含めて、街づくりの中でどのように位置づけられていくのか、ということがありますし、自然環境の問題から言うと、皆さんご存じでしょうか？西都原というところは都市公園の規制がかかっているのです。杉安峡西都原公園という形で都市公園になっています。杉安峡というのは、その自然環境の1つの代表例であるわけですけど、史跡だけでなく自然景観を含めて、総合的に位置づけられるものということになります。それから周辺史跡となると、いわゆる新田原古墳群など対岸にある古墳群の存在もあわせて考えていくことによって、初めて西都原古墳群が理解できるということになりますが、これらを含めて、現代、特に大きく求められているのは、エコミュージアムという考え方になるわけです。そこに住む人々の生活を含めて、その博物館というものを考えていくということ、それが大きく言えばいわゆるエコミュージアムという位置づけになると考えていいでしょう。

そういう中で、少し中身の分析を含めて、今からお話をしていきたいと思います。宮崎県という場所を考えた時に、先ほどからお話をしているように大きくはこの30年間で資料の蓄積が進んだのですが、30年以上前は南九州などというところは遠隔辺境の地と考えられていた。西都原古墳群の発掘調査が始まって、その時の成果としては、畿内において4世紀に古墳時代が始まるとすれば、100年遅れた5世紀初頭に遡らないのが日向の古墳時代である、といった見方があったわけです。しかし、これはむしろ本当の歴史的な事実即した見方ではなくて、むしろ、現代社会における1つの距離感によって、それが先入観となって100年遅れる、あるいは半世紀ずれる辺境地の文化があるという具合に考えられていたのです。現代的感覚からいえば、東京でおこったことが、宮崎あたりに通達される、あるいは渡ってくるのに10年や20年くらいの時間差をもって伝わってくる、そういった感覚があった訳です。ですから、本当に30年以上前というのは、100年位遅れるのもありかな、という具合に考えられていた時代がありました。しかし、これは南九州だけじゃなくて、全国的にもそうですけど、例えば弥生時代の始まりといったときに北部九州、福岡、佐賀を中心にしたような場所に最初に米づくりが入ってきて、それが全国に広まっていくのだという具合に考えられていた。しかし、南九州にも、もう一つの大きな窓口があった、ということが分かってきました。

特に都城とか、えびのとか、内陸部においてもほとんど北部九州と時間差を持たずに、初期の米作りが始まっていたということが分かってきました。そうすると今までのように北部九州を一元的に考えて、そこから日本列島に米づくりが広がっていった、そういう歴史像から、南九州にも一つの窓口があって、南九州からも全国に米作りが広がっていったという具合に多元的に歴史を見るということができると、それまでに見ていた古代史像というのが変わってくる。ある種、結論的な話にもなりますけども、要するに『古事記』・『日本書紀』の中、日本神話の中の日向神

話というのは、なぜ、大きな柱になりえたのか、というところも、30 年以上前の考え方でいくこと、全部が物語、フィクションであって、歴史事実ではない、ということになります。そう考えるのではなく、多元的な見方というものがあるとなれば、そこに日向神話の位置付けも新たに見えてくると考えているわけです。

次に古墳時代になると、巨大古墳がつくられる場所は大阪、奈良を中心とする畿内だけでなく、東北、群馬、茨城などにも巨大古墳が存在しますし、吉備・岡山にも在ります。そして九州においては北部九州ではなくて、この日向の地にこそ巨大古墳が存在するということが明らかになってきたわけです。そうすると多様な中心というものがあるということ、ここでは代表例として出雲、吉備、日向を挙げました。

例えば出雲という地域を考えると、これは巨大古墳という尺度でいえば巨大な古墳は存在しません。けれども四角い墳墓、方墳と言われるものとか、前方後円墳ではなくて、両方とも四角い前方後方墳という四角形を基調とする墳墓が中心となる、それが出雲の歴史の具体例であるわけです。去年以来、出雲大社の大遷宮があり、いらっしゃった方もおられると思いますけど、もっとさかのぼれば、非常に大量の青銅器を持つ、そういう地域でもありました。いわゆる青銅器の物量といいますか、それに圧倒されるようなものがあるわけです。しかし宮崎は青銅器のないところですから、そんなにたいしたことには思えないのです。決してないものねだりではありません。出雲は大量の青銅器を持つ地域である。それに対して日向の地域というのはいわば青銅器を持たない地域です。その際にもひとつの価値観で、モノを持っていない、モノがないと貧しいのだろうか、そういう見方もあるわけですが、しかしそうではない。青銅器というのは祭祀、祭りの道具であるとする、そういう祭りの精神風土を持つ場所が出雲であり、青銅器という祭祀を持たない精神風土が、この日向の地域である、という具合に見ていく必要があると思います。しかし、出雲という地域は、やはり古代史を考える上で、非常に重要な地域であることは間違いないと思います。

次に挙げたのは吉備です。吉備については先週のシンポジウムの中でも、岡山大学の新納泉先生にお話していただきましたけれども、全国 4 番目、それから 9 番目の造山、作山という巨大古墳があります。畿内の巨大古墳というのが、多くは陵墓に指定されているから、自由に入ることではできませんけど、全国第 4 位の造山古墳は今でも自由に上に登ったりもできる、そういう唯一の巨大古墳が存在するところです。なぜ吉備に全国でもベスト 10 に入るような巨大古墳が出現したのだろうか？という事になるわけですが、この吉備の存在を考える上でも、やはり日向の存在もあわせて考えていかなければならない。このことは先週、新納さんもそういう指摘をされました。要するに吉備を単体で抜き出して見ても分からないだろう。日向との関係、吉備、瀬戸内海を通じての交流のあり方、そして、大和、奈良・大阪の地域という面的な広がりの中で考えていく必要があるということが指摘されているわけです。ですから、多様な中心というものを理解していく、そして多様な中心というものが具体的にどういうものであるか？ということ情報を発信し、皆さんに知っていただく場の 1 つが、博物館の展示であるのだろうと思います。

では、どういった具合に遺跡を理解していくか、ということに関して、中身についての基本な

理解を基に、どういう具合にお伝いをするのか、どのように皆さんと一緒に考えていけるのか、ということになるわけですので、そのことを少し考えておきたいと思います。

古墳時代を考える上で、よく前方後円墳を取り上げるのですか、最も多く作られたのは円墳です。全国に約20万基の古墳が作られています、その中で前方後円墳というのは、いろんなデータがあるのですが、一応ここでは約4700基としておきたいと思います。そして、大きな前方後円墳の見方のポイントは、これが地域の王の墓である、という点であり、もちろん王の奥さんだとか、それから皇子たちというところも含みますけれども、少なくとも該当する地域の統率者の墳墓であるというのが、前方後円墳の位置づけです。ですから、一番多く作られている円墳よりも、前方後円墳に着目することによって、その地域の在り方、時代を考えることができる、そういう前提にたっているわけです。そして、前方後円墳の大きさというのは、その埋葬された首長の権威・権力の大きさに比例をするという考え方です。要するに吉備に第4位、第9位の巨大な前方後円墳がつくられるというのは、相対的に全国レベルの中で、それだけ強い権威・権力を持った首長が存在した証なのだ、と見るわけです。そして、九州の中で、ベスト10のうちの7基が日向の地に集中する、あるいは、12基まで拾うと、8基が日向の地に集中して、福岡、大分にそれぞれ2基ということも考えると、九州の中での権威・権力が集中した地域というのは、日向の地域であるということになるわけです。

また、古墳の大きさが大きくなったり、小さくなったり、ということがありますが、大きさの変遷というのは、その首長が統率する地域の盛衰も同時に表していて、単なる王の力の大きさではなくて、王を支える地域勢力、地域住民たちの力を表している、そのように考えているわけです。ですからとりあえずは前方後円墳に着目して、その前方後円墳の変遷を理解する事によって、地域社会の歴史的変遷が認識できるということが前提になります。図2の編年図によれば、ざっと見て4世紀代から巨大な前方後円墳が作られた場所はどこなのかというと、大淀川流域の生目古墳群になります。その中に1号墳と呼ばれる前方後円墳があって、最近、確認のためトレンチ調査によって葺石の状態が確認されました。葺石は非常に細かな石を使っており、3段に段状に積み重ねているのですが、それだけではなくて、どうも小さな段が途中についていて、全部で16段くらい確認されたことが報道されました。そういう新しい情報というのも発掘調査が行われた事によって、まさに明らかになってきたということです。ただ、それで全容が分かったのかというと、まだまだ考えなきゃいけないことがあるのですが、少なくとも1号墳という古墳に新しい情報が加わったということになるろうと思います。

ちょうどその時期の南九州を見渡すと、西都原古墳群では、基本的には墳長100m以下の前方後円墳しか築かれていません。一番大きいものでも、95号墳が90mくらい。100mを超えない大きさです。ただ4700基ある前方後円墳の中で、墳長100mを超す前方後円墳というのは308基。これもデータはいろいろあるのですが、100mを超す前方後円墳は、全体のわずか数%であるということです。150m以上だと、実は75基しかないということになります。この男狭穂塚、女狭穂塚というのは、墳長176mですから、150mを超すということで、全国の中でも75基しかない中の1つに位置づけられていくわけです。生目3号墳は墳長146mですから、150mを若干下回るのですが、この3号墳の146mという大きさも全体的な前方後円墳の数から見ると、極めて突出した大きさだという具合に理解できます。要するに90%以上は100mを越さない大きさの古墳であり、西都原の一群の古墳というのが普通の大きさの古墳であると、逆の意味から言えるのだらうと思います。



これは最初の講座の中でお話をしたことでもありますが、大正時代の発掘調査によって、南九州の古墳は 5 世紀初頭をさかのぼらないと位置づけられたということですから、結局、今では 4 世紀、あるいは 3 世紀の後半に頭を出している古墳も、全部、時期的に下に押し込まれていたのが、今から 30 年前の日向の古墳時代像であったわけです。私が大学の頃もそのように教わりましたし、長津さんなどほぼ同世代の人たちも、そういうことを教わって来たのです。しかし宮崎県に帰ってきて、まだ若い頃でしたけれども、長津さんが車の免許のない時期に僕の車にのせて、首長墓の変遷の図をなんとかつくらなければいけないね、ということをお話しながら宮崎県内の古墳をまわりました。だけど、そのころでも 4 世紀の半ばぐらいまで遡ることは、論理的にも可能だろうと考えていましたが、これをなかなか 4 世紀の初頭、あるいは、3 世紀の後半まで遡らせるには基本的にデータが不足している。西都原古墳群の 311 基の中の 30 基しか発掘調査されていないわけですから、そういう断片的な資料の中で、実証的な図を描けるかという点で極めて心許ない状態でした。

しかし、今はこういう変遷図が描けるようになり、繰り返しますけど、30 年前の見方と大きく変わってきました。そのことによって、初めて南九州の古墳時代の読み方が明らかになってきたし、新しいといえますか、本来、見るべき古代の日向の古代史像というものが明らかになってきたと思います。これからは、こうした枠組みが大きく覆ることはないと思います。ただ、少し前後関係が逆転する、ということはあるとしても、概ねこの流れというものは押さえることはできたのではないかと、思います。あとはよく話題になる、最古の前方後円墳と考えられる箸墓古墳が 3 世紀の半ばとした時に、3 世紀の後半のどこまで日向の古墳が遡るのか、という点が問題になると思います。

そうすると、先ほどお話ししたように、単に大きな古墳があります、ということが問題なのではなく、そもそも日向の歴史、古墳時代史というのは、どういう形で変遷していったのか、そして、そのことが日本歴史の中でどういう意味をもっているのか、ということを読み取りたいわけですから、少なくとも、どうして生目古墳群に巨大古墳があって、そして、5 世紀前半に西都原古墳群の中に男狭穂塚、女狭穂塚という巨大な古墳が成立しうるのか、という点は考えていかなければいけない課題になります。そして忘れてはならないのが、大隅半島の古墳です。大隅半島にも巨大な前方後円墳があり、その巨大な前方後円墳をどういう具合に考えていくのか、ということになります。

西都原古墳群の中で、5 世紀後半が前方後円墳のない時期になります。円墳がたくさん築かれるのですが、首長墓としての前方後円墳のない時代ということになります。これは一体何なのか、という点については、これまで何度もお話しをしてきましたので今日はそのことには踏み込みませんが、何を分析して、そこから何を引き出していきたいのか、ということをもとに理解いただいた上で、その後行っていく整備こそが、これから考古学が未来にわたって残し得るものだと考えていますので、今日の主題はそちらの方に重点をおいて話をしていきたいと、思います。

ここで、これから分析の話をしていきます。西都原古墳群というのは南北 4.2km、東西 2.6km という広い範囲に分布しており、ほぼ中心に男狭穂塚、女狭穂塚、鬼の窟古墳があって、台地の縁にずっと前方後円墳が並んでいる状態になっています。このような 311 基の古墳をどう読み解くのか、という点について、その読み解いた結果が図 2 の西都原古墳群の部分になるわけです。問題はこういう具合に離れた場所にも古墳があることです。結局、これはひとくくりに見る事が

できるだろう。前方後円墳がここでは3基あって、そして、円墳がある。例えば「北郷氏」というような1つの豪族の単位の墓域として考えられるだろう。南の方にも前方後円墳が1基あって、周りに円墳がある。これは、それぞれの1つの人間集団のまとまりが表れていると考えていけるわけです。しかし、西都原古墳の大きな謎はこのように台地の縁に密集した形で前方後円墳が存在するというところにありました。それこそ1980年以前はこれを読み解くことができない。そこで大正時代の発掘調査の羅列といいますか、大正時代に発掘調査されてこういうものができました、ということを書くだけで、いったい西都原古墳群というものの成り立ちをどのように読み解いていくか、ということができなかつたわけです。

西都原古墳群は、標高30mくらいの場所にも円墳を中心とした古墳群がありますが、一番の密集地帯は標高60m位の台地上です。まず分かるのは、202号と265号とした古墳は、表を見ても分かるように前方部の非常に大きな形をしているという点です。前方部が細長い形をしているものとは明らかに違う形をしている。

これから、皆さんが各地の古墳を見るときの一つの見方を伝えますと、最も古い古墳は前方部の端が三味線のバチのように開いている、それから前方部が割に低い形が次の段階としてあり、江戸時代頃の柄のついた鏡のような形、柄鏡形と呼ばれる段階もまだ前方部の低い形で、そこから次第に前方部が大きくなっていきます。横から見ても、前方部が高くなってきて、最後の段階でふたこぶラクダみたいな大きさになってくる、概ねそのことを頭に置いて見ていただければ、例えば、生目古墳群でも新田原古墳群でもいいですが、これが3世紀代後半、だいたいこれが4世紀代、前方部の方が後円部よりも大きくなるのがだいたい6世紀代という具合に、形の変遷を頭に描いていただければ、少なくとも100年幅ですけど、その幅の中の古墳だということが分かってきます。そして、西都原の202・265号というのは、前方部の非常に大きくなった形で、ここでいう6世紀代の古墳ということが分かります。5世紀代の典型例は、まさに女狭穂塚です。前方部と後円部がほぼ同じような大きさになって前方部もしっかりした形になってきています。

そう見ていくと、自動車が縦列駐車するように柄鏡形と呼ばれる前方後円墳が並んでいる一群については、柄鏡形のものは5世紀代の中に収まると考えていた時代があるのですが、どうもそういうものさしでは当てはまらないというところがありました。しかし、現実的にそれを証拠づける遺物等が確認できない時代があったわけです。列状に並んでいる柄鏡形の前方後円墳は16基あり、One generation = 1世代が30年ということで考えてみます。『古事記』・『日本書紀』のことに少し触れれば、『日本書紀』が30年ごとに宮廷内部で講義が行われていて、親から子に歴史を伝えるということ古代の人々が実践していたということをご紹介しましたが、1世代30年として1つの系譜をたどっていく、つまり一列だと16世代の首長が変わったという具合に読むことになるわけです。そうすると16×30ですから、480年ということになって、現在、古墳時代というのは400年くらいと考えるわけですから、その時間幅をこの柄鏡形前方後円墳のみで費やしてしまうということになる。

そこで、どうも密集しているようだけど、細かなまとまりがあるのではないかと、地形的にみて「このあたりで1つ区切りがありそうだな」、「もう1つありそうだな」という具合に、一列としてまとめて見るのではなくて、その中をもう少し細分できるのではないかと、いうところに思い至ったわけです。そのように分析すると、最終的な結論ですけれども、16基のいわゆる柄鏡形前方後円墳が大きく3つに分かれるだろう、そうすると3×5=15ですから、5基ないし6基によるまとまりとして理解できるのではないかと、そうなれば1世代30年ということですから、



5 基ということであれば、150 年という幅の中におさまってくるということになるのです。そのように考えたのが図 2 の変遷になるわけです。そういう形で大きくは 3 つの豪族たちの並列的な存在があって、その集合墓地的な形で西都原古墳群は築かれるようになったのだろうと解釈していったわけです。

それに対して、生目古墳群はほぼ一系列ですから、初代の首長があれば、二代目、三代目、四代目、五代目、六代目という具合に一系列で継承していく古墳群です。持田古墳群、川南古墳群も、ほぼそのように一系列で首長墓が継承されていく古墳群ということが理解できる。

一方、祇園原古墳群などは、空白期がありますし、西都原古墳群の場合は複数系列で巨大な古墳ができますけど、その後、前方後円墳がない時代を迎えて、再び 6 世紀に前方後円墳が登場する、そういう変遷が読み取れます。結局、これらは 1 つのドラマとして理解することができるわけです。そのドラマをどのように解釈するのか、という点については、これも今までお話をしてきましたけれども『日本書紀』の中にあられる畿内の大王、後の天皇家と日向の豪族の娘、女性たちの婚姻関係というものが、1 つはこの古墳群の変遷の中にあられて来るのではないかと考えるわけです。けれども、それを考えていくためにも分析を通して明らかにしていく必要があります。

男狭穂塚、女狭穂塚については、ご承知のように男狭穂塚は日本列島最大規模の帆立貝形古墳、女狭穂塚は九州最大で、列島では 48 番目。48 番目といっても、先ほど話をしたように 150 m 以上は 75 基しかない中の 48 番目ということですから、これはとてつもない巨大な古墳だということが理解できます。では、そのように理解した時に、西都原古墳群を訪れた人々にどのように見ていただきたいのか、どのようにその歴史のドラマというのを読み取っていききたいのか、ということになるわけですが、昭和 40 年から、文化庁の補助事業として風土記の丘の整備構想というものがある、その第 1 号として西都原古墳群の整備が行われた時代があります。今では姿も形も無くなりましたけど、昔の西都原資料館、ご存じの方、いらっしゃいますでしょうか？半地下状で、その屋根に四角錐のガラスのピラミッドが並んでいるみたいな建物でした。当時は周囲に樹木も少なく、周りは畑でした。その畑を買収して、公園整備をしようという計画だったのです。

ただし、この時は先ほどお話ししたように 30 基のデータしかないために、その歴史の変遷を読んでいくための整備というよりもむしろ環境整備であり、環境整備というのも非常に重要なのですが、古墳群の一番南側の第 1 古墳群は「草原の古墳群」、要するに草地の中に古墳群がある状態で、第 2 古墳群は「林の中の古墳群」で、木々の間に古墳がある。そして、「散策の古墳群」という形での歴史を読むというよりも、むしろ古墳のある景観というものを整備するというのが、この段階の風土記の丘の整備でありました。そのように全国で第 1 号の整備だったのですが、宮崎は何事も割と最初に手を付けるのですが、その後に続かないのが悪いところです。史跡の整備もそうです。大規模な古墳の整備というのは、本当に先駆けの事業だったわけですけど、その後は、もうほとんど手つかずの状態になって、そして古墳の上に樹木が生い茂り、どこに古墳があるのかも分からないという景観になってしまいました。

そこで平成 6 年に整備構想を立てて、平成 7 年から 5 年間、風土記の丘整備の第二段として再整備を行ったのですが、その時には基本的に古墳の上の樹木は伐採するという方針でいました。そして、鬼の窟古墳についても古墳の前を覆っていた楠も切りました。ただ、これに

つについては相当、批判も受けました。それは何故かという、この40年、1965年以降に整備をした後もほとんど放置の状態が樹木が茂って、それを見ていた西都の人たちは、それが原風景になっていたわけです。要するに、樹木に覆われた姿が古墳の在り方、西都原の在り方だというふうに思われている。だから、その景観が崩れるということで批判をもらいました。しかし、もともと、この古墳の在り方というのは、人工的で、その表面は葺石で覆われた状態で、ピラミッドと同じように、その権威・権力を象徴する人工物であった訳です。それが経年的にだんだんと草に覆われていくことになる、ただし江戸時代頃の絵図を見ても古墳の上には松の木が数本あったのみで、それほど樹木に覆われた姿というのはないのです。もちろん当時はいわゆる燃料のために木を切ったりするなどして所謂、里山も管理・整備をされているような時代ですから、古墳の上の樹木というのもそんなに繁茂するような状態ではなかったのです。しかし、やはり、人間にとって生まれ育って見慣れた景観というものが崩れ、変更されるということに対する違和感というものがある。だけど、本当の古墳というものを理解する上で、その樹木に覆われた姿でいいのか？という事になるわけです。先ほど話をしたように、イメージによる環境整備というのがこの段階のものでした。しかし、平成7年以降、基本的に行ったのは、まず樹木を伐採することですが、「緑の再配置」ということで、平場における緑は極力残す、あるいはツツジなども、古墳の上にあったものは高取山に移植するといった形で再配置を行ってきました。

このように古墳の本来の姿はこういう姿である、葺石に覆われたまさに人工物である、このことに古墳の大きな意味がある、ということですから、この姿を理解していただきたいということになります。100号墳で、葺石を露出した状態で整備をしました。ただ、その整備にしても10年以上経過して経年的な変化など、いろいろ問題があるということも分かってきましたので、一度、この整備の仕方も見直すつもりです。今、西都原考古博物館の方でその検討を行っています。けれども、整備というのは「これでできあがり、完成」というものではなくて、やはり10年、20年の中でまた経年変化等とも向き合う必要がある。だから、そこでもう一度立ち返って考え直さなければいけないのです。ですから、常に生き物を相手にしているということと、もう一度、新たな視点で整備をしないかということ、今は考えています。

ただ、なぜ露出した状態で整備をしたのかということ、本来の古墳の姿とはこういう姿で、そのことを見つけていただくことによって、古墳時代の地域勢力の在り方、地域の在り方をあらわす前方後円墳の築かれた当時の姿を再現したわけですが、ただし、前方後円墳がここには16基ありますが、これを全部、葺石の状態に露出させて、あるいは葺石復元するということになる、やはりそれは逆にアナクロな話になります。適切な場所を選んで、そして、本来の古墳の姿を理解していただくところを見ていただく、という具合に進めていきたいと思っています。

もう一方、13号前方後円墳の場合は、本来の葺石は概ね厚さ20cmくらいの覆土をして、埋め戻しています。盛土によって、前方部、後円部とも3段に築かれた古墳の形を理解していただく。そして手前に1/60の模型を設け、葺石の状態を復元しています。しかし、本来の姿は模型を通して見ていただけるという具合に整備しました。この時もいろいろアイディアがあったのですが、例えばある種のスクリーンを通してみると、向こうに本来の古墳の姿が投影されたように、もうちょっとリアルに見えないだろうか、とかいろんなアイディアは出たのですが、実際には技術的にできないという問題もあつたりするので、そんな事をあれこれ検討しながら、本来の姿を通して古墳の意味というのを理解していただくための整備ということを考えているのです。

また13号墳では、発掘調査の結果わかった埋葬主体の内部に入って見ていただけるように整

備をしました。もう何度か入っていただいき、見学していただいた方もいらっしゃると思いますが、本来これは全部、土に埋められた場所を空間として、そこに入って見る訳ですから、本来の姿ではないのですが、しかしそこに埋葬されている施設がこういう状態で作られている、ということを見ていただく1つの手法として考えたわけです。ただし、一つ問題を挙げると、土は呼吸していますので結露をする。そして、結露した水がしたり落ちて、遺構面に影響を与える、ということが出てきました。で、それを何とか止めるという意味で、若干の吸収剂的なものを吹きつけ、結露が起らないようにする、そういう工夫をしたりしています。

それから171号墳、これは西都原古墳群で唯一の方墳ですが、文字通り女狭穂塚の一部なのです。女狭穂塚にくっついて、女狭穂塚と一体的に作られている。女狭穂塚の方は陵墓参考地ですが、一方で171号墳は特別史跡の一つの古墳ですから、私たちの方で調査をして整備をしました。この整備の仕方としては、方墳ですから4面ありますけど、2面は芝生で覆って、残りの2面について葺石の部分の復元をするという形で整備をしました。あと169号墳など円墳の復元もしていきました。

また南九州独特の地下式横穴墓については、南九州の歴史を理解する上で非常に重要なポイントだったのですが、確認調査を行うことによって、盛土を持つ111号墳の埋葬主体として築かれたということが確認できました。そして、そのように確認できたことを皆さんに見ていただきたいので、小屋を作って、その中のモニターを操作することによって、玄室の中が見えるように、そういう整備をしてきています。

鬼の窟古墳についても、やりなおさないといけないかと思っています。周囲に土手がめぐるので、その土手の積み方を確認するために、断ち割りを入れて調査しました。古墳というのは千数百年たってもしっかりと残るのは、漫然と土を積み上げたものではなくて、砂質の土と粘質の土を交互に積み重ねて、サンドイッチ状に積み重ねていく、その事によって初めて千数百年保たれる。もちろん、崩れた部分はあるのですが、しかし基本的に土木工学的に考えられた土の積み方をしているのです。これは版築状という言い方をしますけど、お寺の基壇などはしっかりとした版築をして建物を建てる。ここではそういう技術が使われているわけです。そこで、それを断ち割って確認したわけですから、見ていただけるようにということで、その土の状態を樹脂ではぎ取って、露出展示をするということをしました。しかし、樹脂など薬品の耐用年数という問題があり、再整備の必要があります

最後になりますが、こういう整備をすると共に、歴史的な景観というものをどういう風に伝えていきたいのか、ということについて、周辺の自然環境と一緒にした形での整備をやっていくということが必要になります。西都原には「西都原憲法」と呼ばれたものがあるのです。これは地元の方々と西都市、宮崎県で取り交わしていた景観保全の覚え書きです。これは本当に先見的な取り組みだったと思います。ですから、今も、特に標高60m以上の台地上に県外の方々、観光で来られた方々が登っていただいた時、古墳時代に迷いこんだような、タイムスリップしたような感覚になるという風に言われます。電線1本通さない、そしてこの中には、集落は別にして、古墳の分布する中においては、景観を保全していくのだということを行ってきたからです。冒頭の世界文化遺産の話の中でも、百舌鳥・古市古墳群などは、ご存じのようにもう市街地の中に古墳がのみこまれているという状態であります。しかし、この西都原は、本当に古墳時代の景観そのものを今に伝えています。イギリスの研究者が来日されて、本当の古墳時代、古墳というもの



が理解できるというのは、百舌鳥・古市の古墳群よりも、まさに西都原だろうと言っていただきました。そういう意味で、西都原憲法という形で景観が保全されたことは、非常に重要なことで、すし、特別史跡、これは文化財保護法による規制ですが、それに加えて都市公園、加えて自然公園という規制をかけて景観を保持しています。お手元の資料の中にこういう話しを含めて書いておられますので、時間がある時に読んでいただきたいのですが、その最後のところを少し確認させていただいて、今日の話の終わりにしたいと思います。

私は「歴史浴」という言い方を最近使います。26 ページのところの4項目で「歴史浴の場所、場として」と書きました。日光浴とか、森林浴という言い方がありますがけれども、史跡の環境、歴史的な環境として保全するというのは、歴史浴の場だろうと考えています。私たちが、奈良や京都に行って、金閣寺が何年に云々、などの細かなデータを説明板で頭に入れる、そんなことよりも、奈良、京都に行けば、その時代の景観、奈良、平安のいにしえが思いおこせて、そしてまた、その中にひたるといって、そこに立つことによって浴びる歴史の力というものがあるのだらうと思います。ですから、史跡整備というものも歴史浴という場の提供をするということであり、日常生活の私たちの現代的な日常生活というのは、やはり人工的な環境それだけでは成り立っていかない、その中には自然環境が保全されて、そして歴史景観としての歴史浴の場が設けられ、それが将来に向けて残されていくこと、私たちの子や孫までの時代にそれが残されていくことが、今、私たちに課せられた課題だろうと考えています。

最後の5番目のところで、引き継がれる歴史的景観というところに書きましたけれども、これも毎度述べることですが、宮崎県の戦後の観光というのは、大地に絵を描くという岩切章太郎さんの考え方で、まったく新しい白いキャンバスに南国を描くということを行った。しかし、それは白いキャンバスではなくて、やっぱりそこには歴史、民俗、そして自然景観、そういうものがある。その中に、その上にどういう風に、私たちは未来に伝えていくべき景観をデザインできるか、ということが問題だらうと思うわけです。従ってそういう意味で、私たちは県内に残された史跡というものを大事にしていく必要があるということを度々お話してきました。そして、これからは高齢化社会ということ言われて久しいですけれども、高齢者が大事にされる社会と歴史が大事にされる社会は、これはイコールだと思います。やはり歴史が大事にされない社会というのは、高齢者が大事にされない社会となる。私もだんだん高齢者の中に入りますので、やはり大事にしてもらいたい。そのためにも、こういう形でお話をさせていただいているわけです。

そして、昨年以来、記紀編さん 1300 年ということで、もう一度、宮崎の神話を含め見直していこうという動きになっていますが、これも表面的な「神話のふるさと」ということではなくて、やはりその内実に含まれたもの、冒頭に鱈塚山の話少し触れましたけれども、私たちの日常生活の中にある感性、そういう中から神話を感じ、そして、そういう中で生活を享受していくという、そういう社会が生み出せたらと思いますし、その一端を考古学が担っている、と考えています。そういうところで、少し中身の話と技術的な話ということも含みまして、今日の大きな趣旨としては、将来に残すべき景観というものが、重要なキーワードになってきているのだ、ということをお話し差し上げて、終わりにしたいと思います。

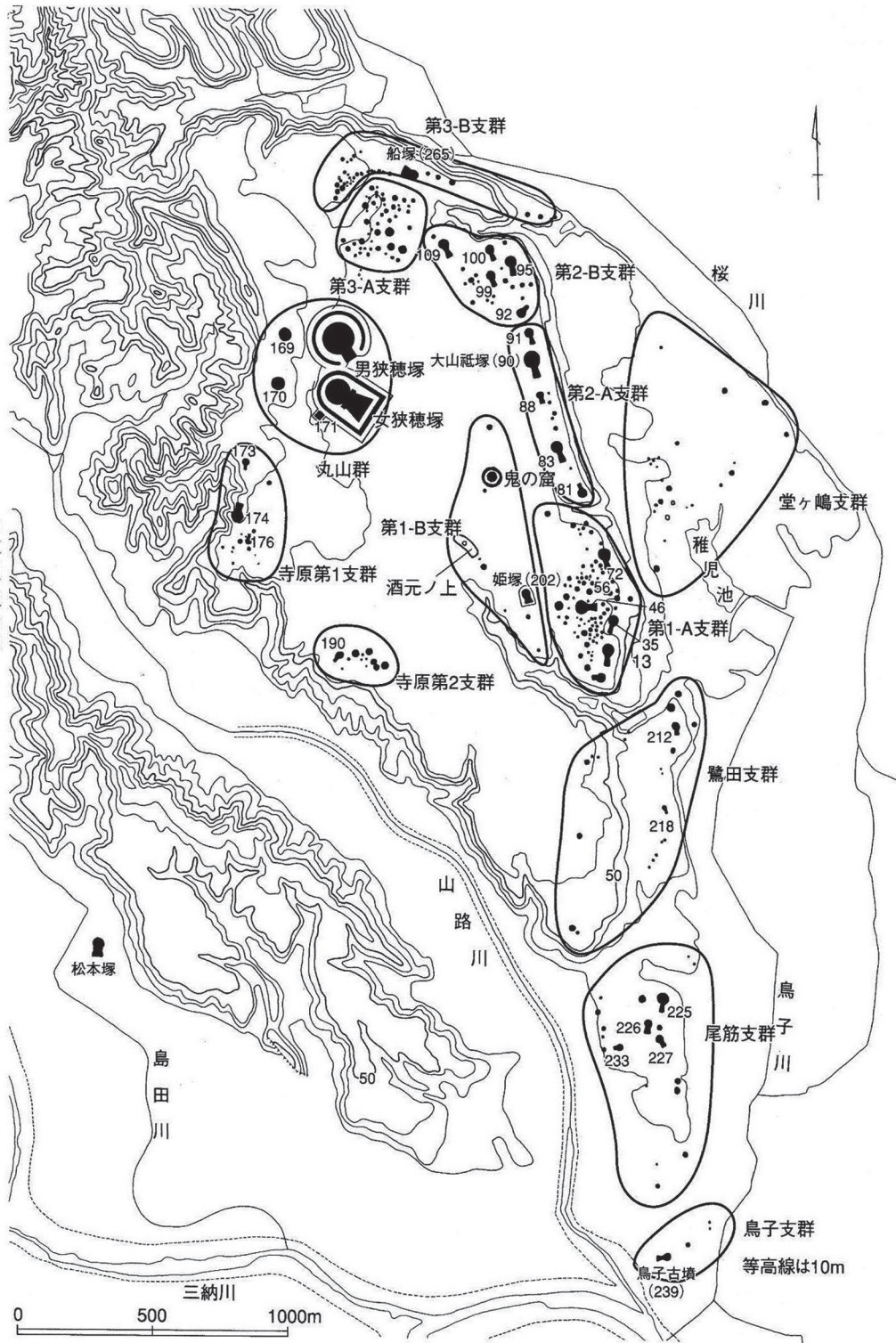


図1 西都原古墳群古墳分布図







## 執筆 者 一 覧（ 掲 載 順 ）

柳田 晴子 (YANAGITA Haruko)	宮崎県埋蔵文化財センター
加藤 徹 (KATO Itaru)	宮崎県埋蔵文化財センター
長津 宗重 (NAGATSU Muneshige)	宮崎県埋蔵文化財センター
北郷 泰道 (HONGO Hiromichi)	宮崎県文化財課

## 投 稿 規 定

- 1 投稿できるのは、宮崎県埋蔵文化財センター職員及び紀要編集担当が認める者とする。
- 2 投稿原稿は、当該年度の紀要編集担当が定める期日までに提出する。紀要編集担当が指名する匿名査読者の査読を経たうえで掲載する。
- 3 原稿は宮崎県の埋蔵文化財および関連する諸分野に関する論文、研究ノート、資料紹介とする。既発表のものは受理しない。
- 4 一編当たりの分量は20頁以内とし、一人一件を原則とする。
- 5 執筆要項は次の通りである。

版面（キャプション含）は幅155mm、高さ240mmで、本文の文字は明朝10pt、数字はすべて半角、1頁当たり43字×40行とする。註・参考文献は9ptで、文末に註と参考文献に分けてまとめる。本文中の註は、文字右上に(1)のように表記する。文末の参考文献は著者・発行年・「表題」『出典』・発行機関・掲載頁の順とする。

宮崎県埋蔵文化財センター

## 研 究 紀 要

第3集

2015年3月31日

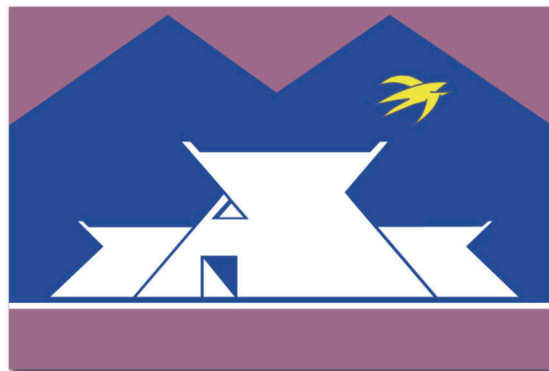
編集・発行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地

TEL 0985-36-1171・1172 FAX 0985-72-0660



**Research Bulletin**  
of  
**Miyazaki Prefectural Archaeological Centre**  
vol.3



2015.3

**Miyazaki Prefectural Archaeological Centre**